[illegible]九日第三種郵便物認可（毎月一回二十
[illegible]十三日印刷納本（五日印刷納本）
大正二年七月十五日發行（毎月一回一日）

女子文壇

新しき文藝



第九年第十號
七月十五日第三增刊

女子文壇第三増刊

新らしき文藝（目次）

小説

滋養強壯グリコナール錠

▼北里博士指導佐伯氏發見の方式に出り製出したる本品は卓越廣汎の用途を有する滋養强壯劑にして特に肺結核慢性胃腸病及一般病後產後等の營養不給に適應す



各地有名藥舖にあり
定價百錠入金壹圓
外送料金八錢
說明書御申越次第郵送す

發賣元 東京市日本橋區室町三丁目 三共株式會社

タカヂアスターゼ

本劑と同一なる消化効力ありと稱し粗惡品を强賣する向あり信用厚き藥舖より御買上を乞ふ

類似品數多あり
高峰博士發明品と
御指定を要す



本劑の試驗報告
御申越次第進呈す

發賣元
東京市日本橋區
室町三丁目拾番地
三共株式會社

美しき海



肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして生來色黒き男女にても平素之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白性作用により漸次**白色**となり肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し肉體**艶美**の容貌となる卓効を有す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑特製分貳劑を試みよ偉大なる奇効完全に顯る 價並製壹劑壹圓廿錢 特別製壹劑貳圓貳拾錢

色白飲藥

英國輸入の全身清血劑にて飲んで體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし完全に肉色を**白色艶美**ならしむる奇効顯著藥なり 價壹劑貳圓九拾錢參劑七圓九拾錢五劑拾貳圓五拾錢色白新劑と内外双方併用せば偉大の奏効迅速に顯る着金即刻送藥す

わきが 腋臭治劑

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる**斯病唯一**の理想的卓効新藥にて本劑の作用により其病原汗腺を根底より變質せしむるを以て如何なる雑症腋臭も完全に治癒す故に他藥にて全治せざる患者は早く試み病原を去り**苦惱を脱**せよ雑重症は特別製を用ゆれば完全著効を奏す藥價輕症用壹圓八拾錢重症用貳圓八拾錢慢性症用五圓八拾錢頑固症用特別製分拾圓八拾錢着金小包密送す

最新發見奇藥

陰萎病 特効新劑

本劑(藥名トニチン)は最近發見に係る陰萎病**唯一**の特効新劑にして其主治適應症を擧れば種々の原因より來る**陰萎病** 精神性陰萎。貧血性陰萎。衰弱性陰萎。根氣衰弱。神經衰弱症。早漏。萎縮。元氣衰弱。腎虚。冷症等に卓越絶倫なる奇効あり苟も精力を旺盛にし生殖機能を強健ならしめ人生の快樂を保全せんと欲する人は早く試みよ偉大なる特効顯著なり藥價試用分壹劑貳圓輕症用五劑九圓五拾錢重症用八劑拾四圓五拾錢慢性症用拾參劑貳拾參圓也着金即刻小包密送す

閉通經劑

本劑は胃腸を害せず子宮を痛めず月經とまりを容易に**通經**す長き滯り及び血塊には特製分を用ひよ極安全に快通**流經**す且つ月經不順より起る子宮病血の道を治癒し惡血古血を一掃す患者は早く試み卓絶偉大なる**特効**を知られよ近時無効類似偽藥多し御注意を乞ふ價は壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢特別製分貳圓卅錢頑固症用特製分四圓卅錢郵券代用貳割増し

婦人病の福音

本劑は最新の學理と多年の實驗とにより發見せられたる婦人病唯一の靈劑なるを以て頑固なる月經閉止及血塊拆と稱へ永年經水なきを快通流下するは勿論月經不調に基因して續發する逆上頭痛眩暈腰或は子宮に痛ある人腹腰子宮部の痙攣に用ひて偉大なる卓効顯著なり早く試みよ

毛生新藥

([illegible])

本劑(藥名ヘアーグロース)は多年研究實驗の結果發見したる**毛髪發生藥**なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脱毛する人頭髪及はゑぎわの薄き人陰部毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人に用ゆれば毛髪蒼々と**發生**する**特効**あり本劑は世にありふれたる種々雑多の毛はへ藥とは其効大に異なるに付卒に玉瓦混同視することなく速に試み偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢大瓶五圓卅錢特別製分拾圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増しの事

やせる藥

壹劑參圓廿錢貳劑六圓二十錢特別製九圓拾錢

本劑(藥名ヨードチリン)錠は學理實驗に徴したる唯一の**瘦身劑**にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し**美容健康**を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ひ其偉大なる卓効を知られよ

以上七藥專賣

東京市神田區五軒町十九番地

日新館藥房

電話下谷五百四拾六番

振替東京壹九貳四六番

講談界

◁ 七月特別號　三百餘頁一冊　金參拾錢　送料二錢五厘 ▷

- 武士道銘々傳 御所の五郎丸……馬琴
- おとみ與三郎 浮名の横櫛……桃葉
- 俠客 樊噲の平六……燕玉
- 雲霧仁左衛門……伯龍
- 怪談 常盤木太夫……南玉
- 仇討 襤褸の錦……貞山
- 落語 權助提灯……燕枝
- 比糸蘭蝶 枕琴夢通路……春輔
- 文學藝妓 失戀記……高子
- 續兒雷也お梶……伯知
- 落語 おばけ屋……圓右
- 前田犬千代……南陵
- 浪花節 田大炊……虎春
- 花柳小說 雛妓日記……美登里
- 幇間總まくり……蕉雨
- 易者のうら表……無腸公子

△雜錄▽ ○落語の新しい進捗○藝人と癖○講談世界館○女義界憎まれ口○柳派の頭領株○演劇月々語…… ○俳句○都々逸○一トロ噺○冠句○へなぶり○物は付○川柳○編輯便り其他滿載

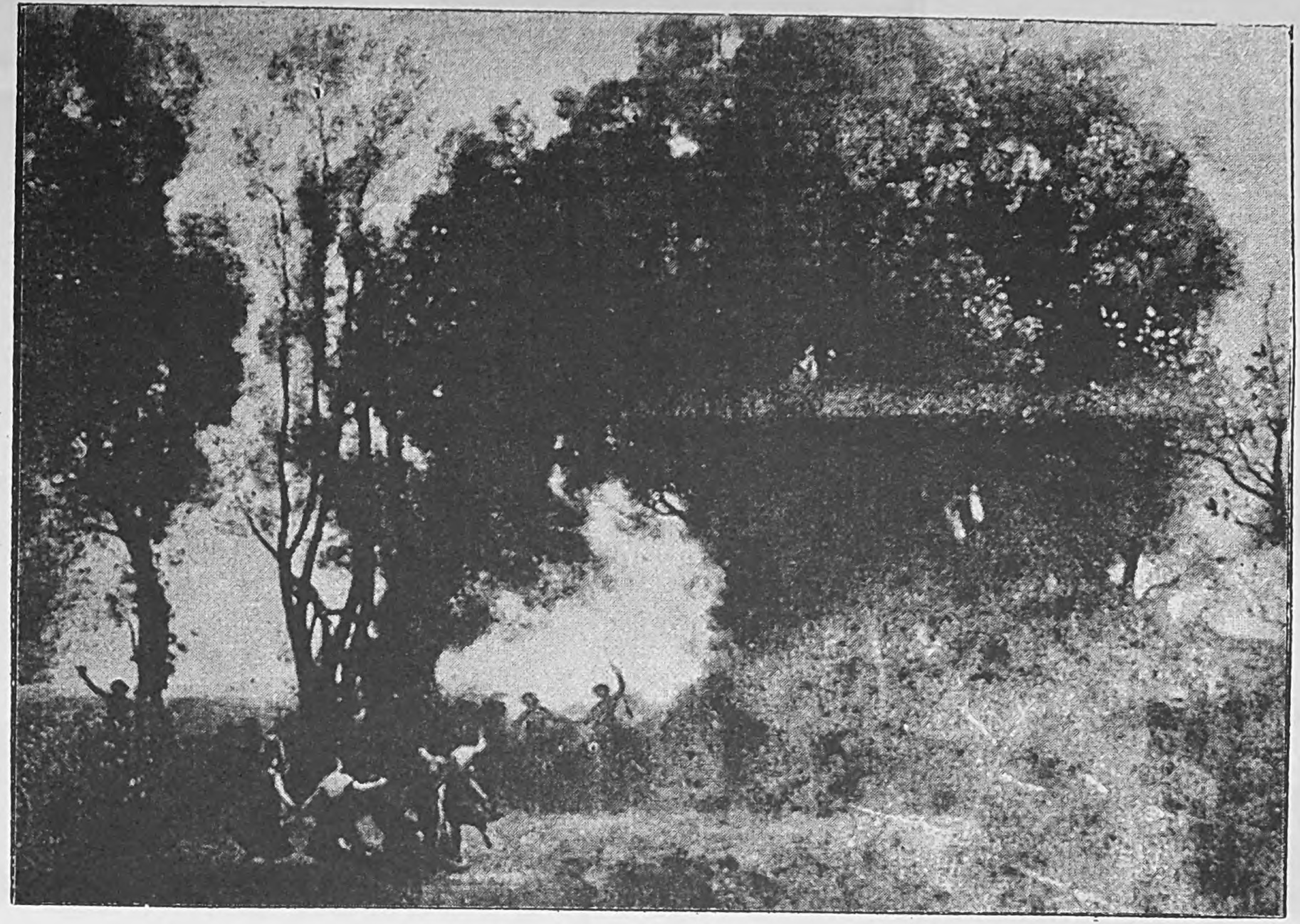
口繪 例に依つて艶麗比無…

挿繪 執筆 畫伯 古洞、英朋 宗方、春帆 泣葉の諸氏

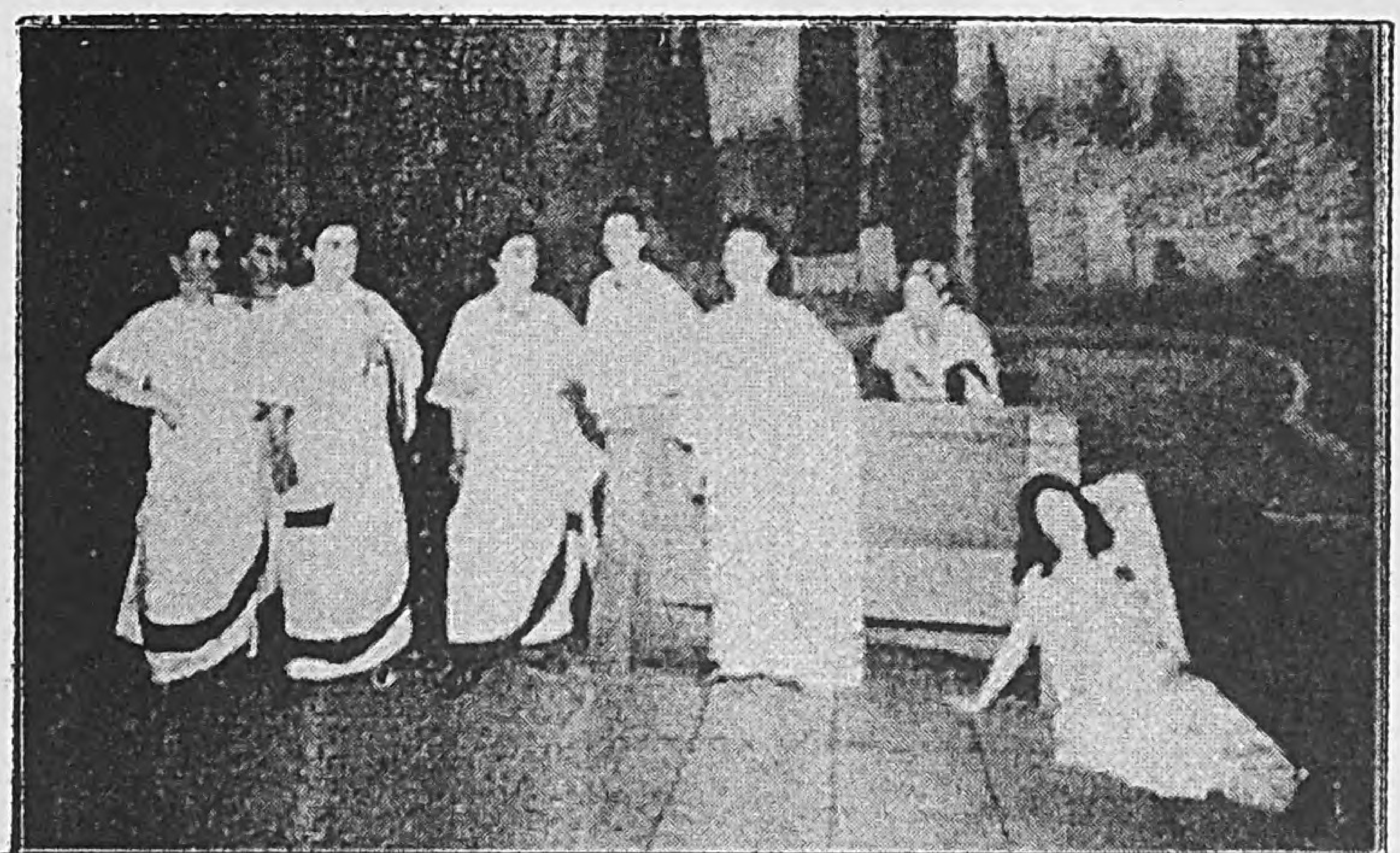
發行元 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 電話下谷(四八一九) 振替東京一九五五

(最寄書店ニ品切レノ時ハ本社ニ取揃アリ直接御注文願上候)

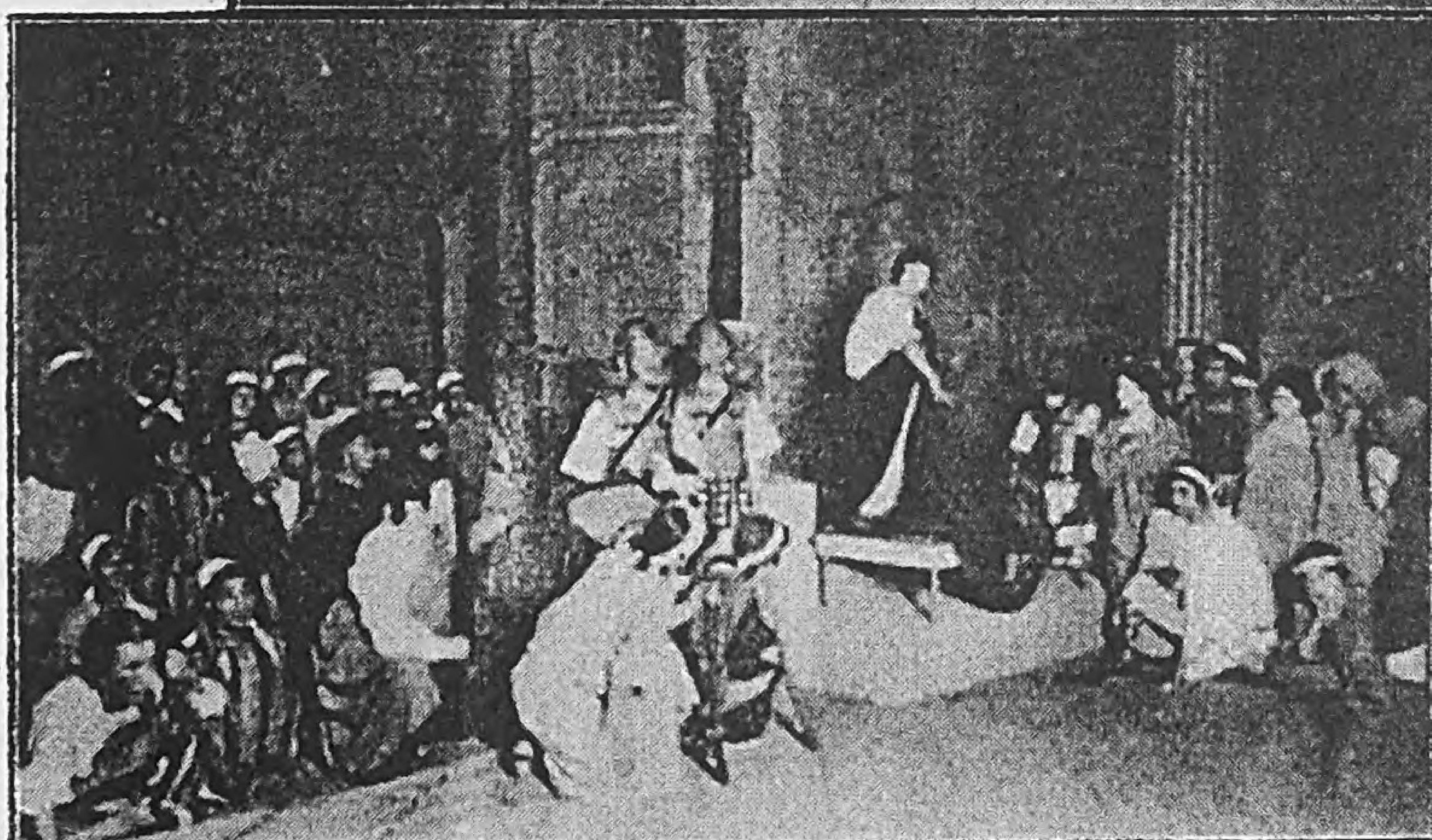
樹陰のよろこび



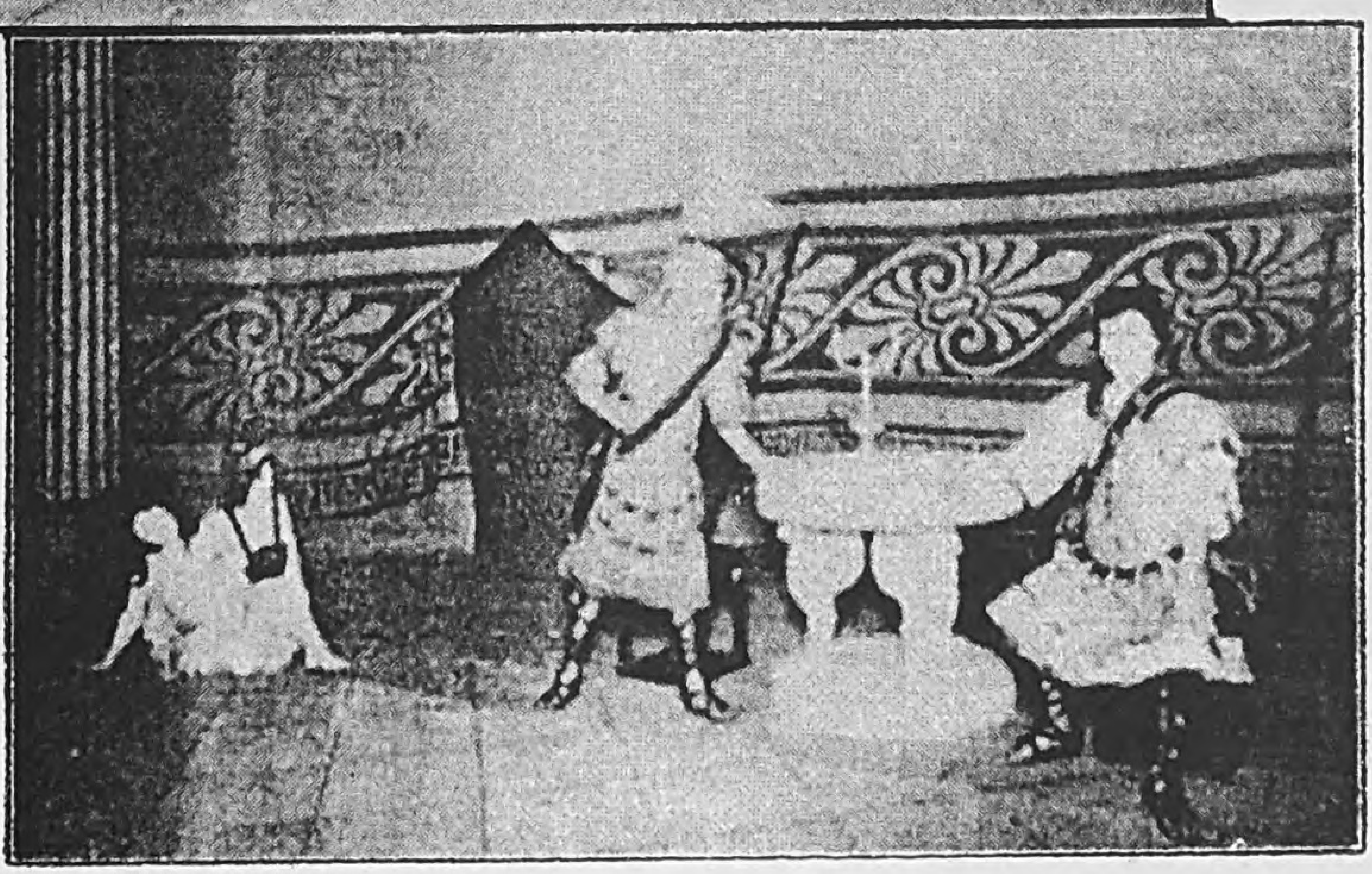
シーザー劇



三幕目ブルータスの庭園

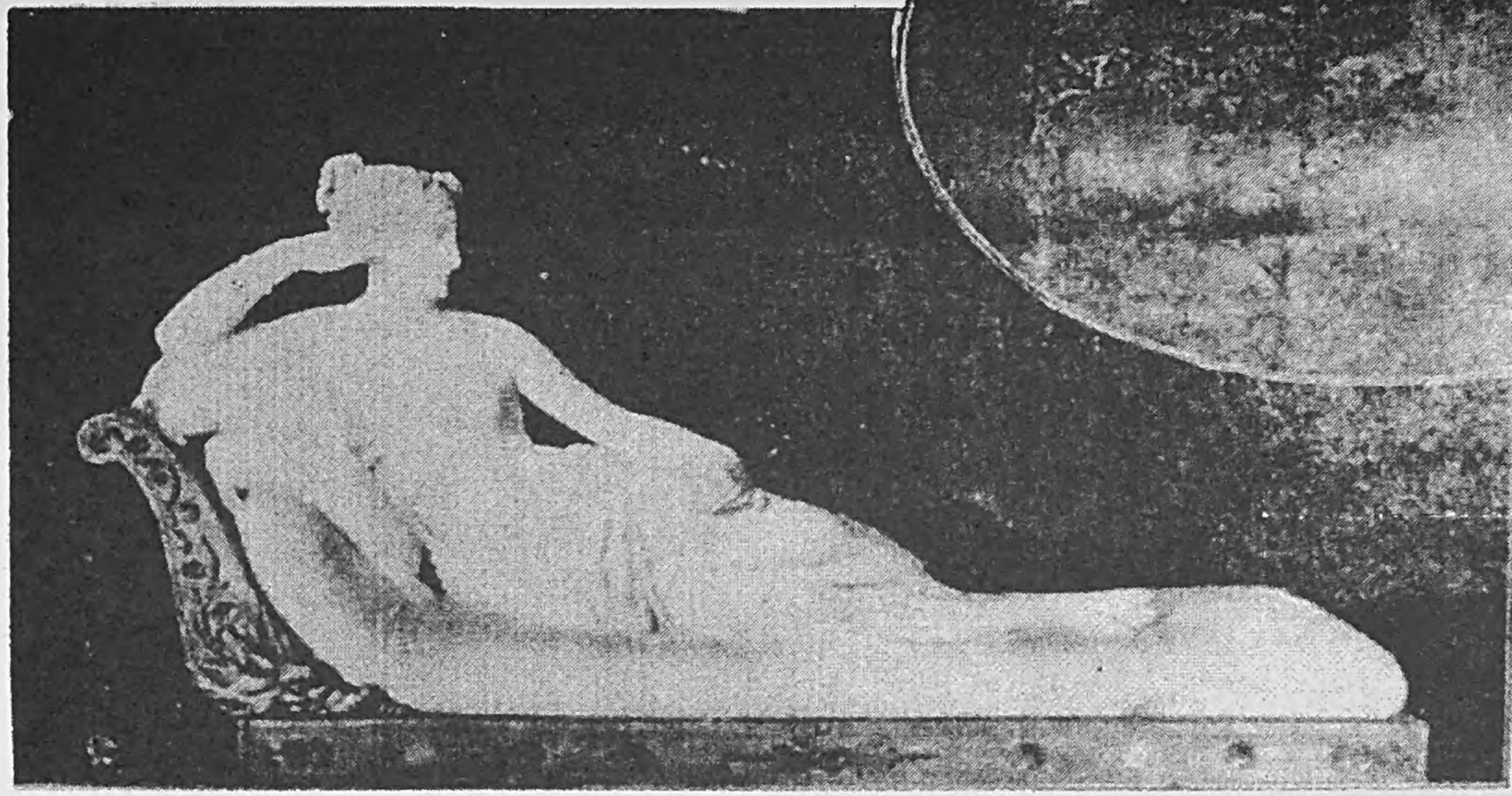


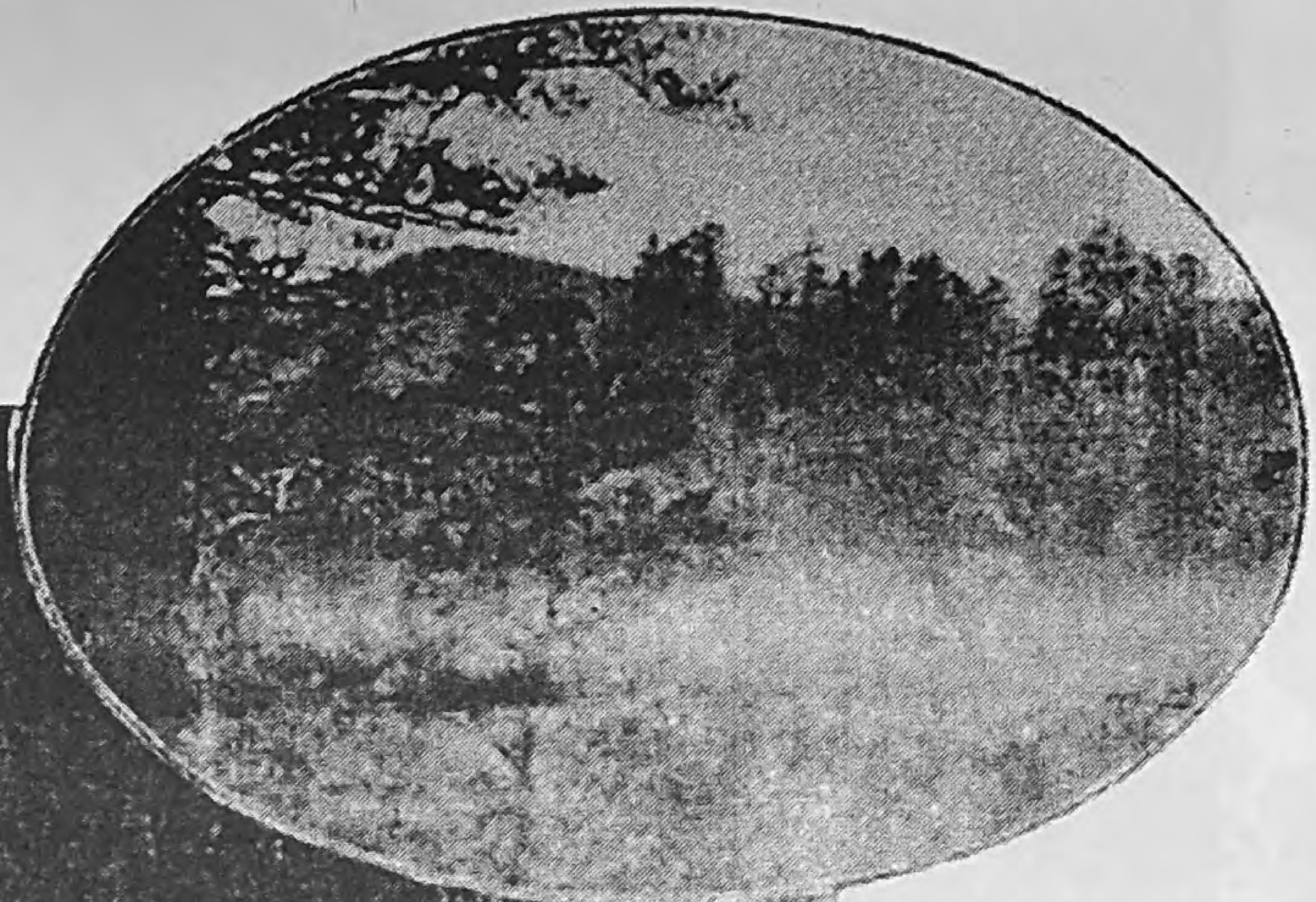
五幕目羅馬市街の市場



六幕目ブルータスの天幕

ミューズ





此大理石像のミューズは羅馬の有名なる古蹟の一にしてナポレオンの妹をモデルとせしものなり

飛石づたひ



女子文壇化粧顧問　藤波芙蓉先生實驗發明

毛はへ 抜毛止 強髪剤（きやうはつざい）

清韓臺樺各送料参拾錢ヅヽ

◎定價一瓶金九拾五錢　送料市内四錢、地方八錢

芙蓉先生曰く「これは自分が發明した良剤ではない、英國の有名なる侍醫ロコック先生が、毛髪の生育を促がし、脱毛を防ぐ常用御料として、故ヴイクトリア女皇の爲に苦心して創製された顯著なる強髪剤ですが、西洋人に適するもの其儘日本人によいとも限られないから永いとそが効否を實驗した結果、多少の改良を加へたに過ぎんので、主材には大した變りはないのであるから、之を使用して効驗を得た人は宜しくロコック先生に感謝するが至當です」。以て此強髪剤の非凡の選良化粧材たることが了解されるでせう。

艶肌剤（えんきざい）

清韓臺樺各送料参拾錢ヅヽ

◎定價一瓶金六拾錢　送料市内四錢、地方八錢

「艶肌剤」は顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にも、白粉下にもなり、而して白粉のノリをよくし、お化粧を落付かせる化粧料であります。

西洋式 煉洗粉 トレートクリーム液

清韓臺樺各送料参拾錢ヅヽ

◎定價一瓶金七拾五錢　送料市内四錢、地方八錢

「植物性洗粉」は洗粉として理想的のものであつたけれど原料が時々需要を充たすと能はざるため、希望者の不便を釀すと少からず、如何にもしてこれに代るものをと遂に此純植物性洋式煉洗粉を皆様のお化粧の資料に供することゝなりました、それに先の植物性洗粉はアブラ性の人には極めて好適材でしたけれどアレ性の方には適せぬ缺點があつたに反し此トレートクリーム液は何れの皮膚の人にもふさはしく、白粉のノリをよくし、キメを細かにするのみならず、使用の簡便なる洗粉に比して使ひ心地よく、剃刀アブレするやうな弱き皮膚の人でも其アレを防ぐの力を有して居ります。

日（ひ）やけどめ

清韓臺樺各送料参拾錢ヅヽ

◎定價一瓶金四拾錢　送料市内四錢、地方八錢

此「日やけどめ」は季節々々に、朝夕郊外の散策又は海邊の漫歩の折、之を御顔に御つけになつて出られ、御歸りになり又御つけになれば、日に焦けることとなく、又やけたのを綺麗に除ります、化粧水の代用としても結構です。

横瀬夜雨先生著

夜雨集

再版

製本既成　好評　再版將に盡んとす

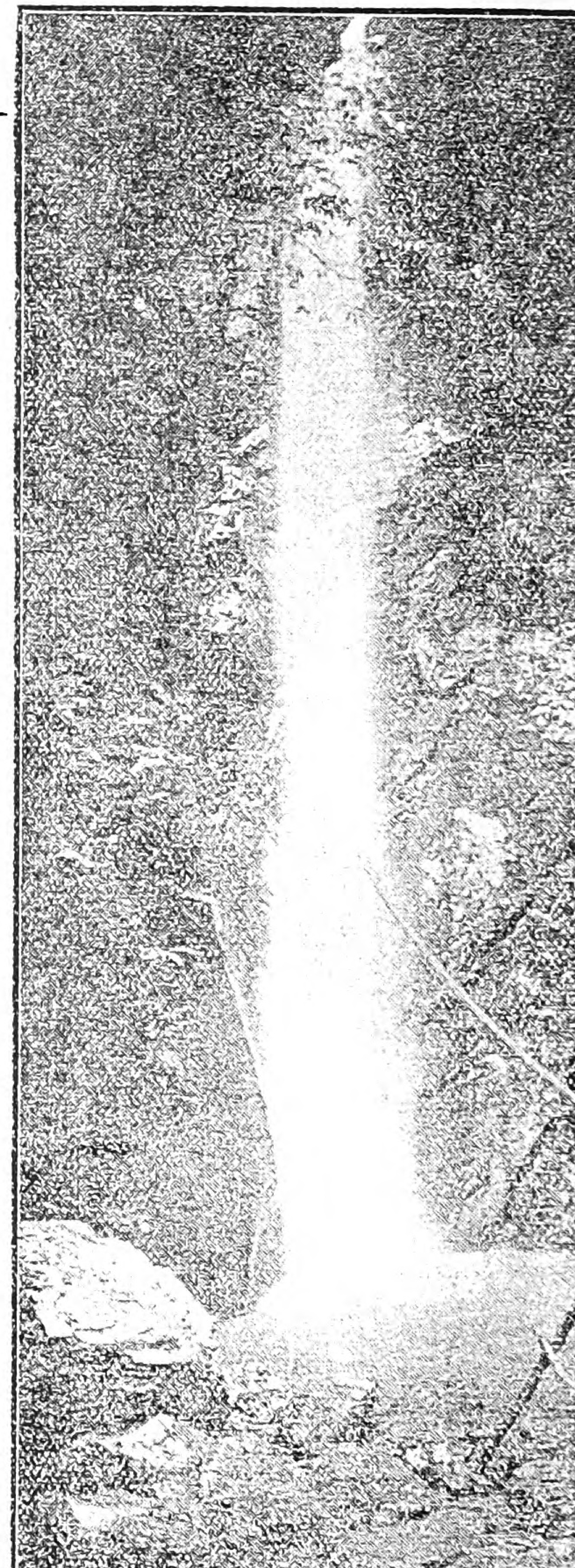
全一冊洋装本綴　紙數三百三十頁

特製色クロース天金雅装　正價八拾錢　送料六錢

並製美色箔入装　正價五拾錢　送料六錢

著者は我邦に珍しき**郷土詩人**なり身は筑波山下の一閑村に寂静なる孤獨生活を送れど其文名は天下の**青年男女**に**渇仰**されて驚くべき**潜勢力**を有せり殊に「夜雨集」は**自己の生活**を描くこと最も眞實にして其文、人を動かさずんば已まず而かも此書の如く男子より**婦人**を觀、婦人より**男子**を觀るに濃かなる**感情**の籠れるものは他に尠し蓋し本書は出來合の出版にあらず當然**永遠**の生命を有すべき**眞面目**なる著述なり

發兌元
東京京橋區大鋸町
女子文壇社
（振替口座一七二九番）
◀全國書店取次販賣▶



女子文壇増刊

新しき文藝

—（第九年第拾號）—

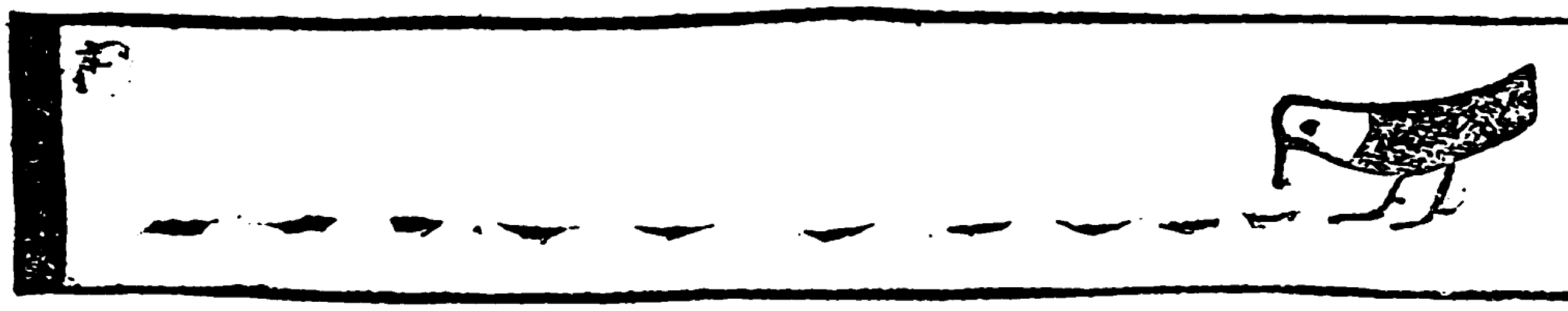
夜の浪

水野仙子

どちらから誘ひ合ふともなく、二人は夕方の散歩にと二階を下りた。婢が並べた草履の目に喰ひ入つて居た砂が、聰くなつて居る拇指の裏に濕りを帶びて感じられた。

『いつてらつしやいまし』。と板の間に手をつく聲が、暫く後を見送つて居ること丶、肩のあたりにこそばゆい思ひをしながら、あの女にも嫉妬を持つと民子は自分の胸のうちを考へた。綺麗な女ではない、けれどもその溫厚しさと、少くも自分が此處に來るまでの幾日間を、心にかけて朝晩の世話をしたといふことに――それは都で受取つた手紙の中に書き挿まれてあつた――嫉妬らしい思ひが湧くのである。明日は馬鹿らしいこの思ひに、愚かしい懸念の輪を一つ〱懸けながら此處を離れ行かなければならない――と思ふと、低首れ氣味に一足二足後れて行く民子の前に白絣の胴を締めた白縮緬の帶の先が搖れつゝあつた。

先の草履の音の行くまゝに民子は從つた。草の根に縋つて僅かな崖を攀ぢる時、默つて握つたまゝ渡されるまゝに、默つてその手の溫みの殘つた草の根を握つた。さうして小高い丘に立つた時、ふと振りかへつた通りに民子も亦た振りかへつた。遙かに低く見える宿の二階の二人の部屋に、窓のカーテンが白く二人の目を捕へた。その小窓に倚りかゝつて、二人が見合はした或時の目の微笑みを思つた時、民子の胸は再びその味はひを經驗した。



岬の中腹を低く高く導いて行く小道に、一つ二つ河原撫子のいたいけなのが叢の中に咲いて居た。いつもならば大袈裟な表情の聲をあげて、危かしいところならば摘んでも貰ふものを、民子はたゞ認めるだけの目を注いで過ぎた。

世間を忘れて明した今朝も、晴々しい朝の氣に猶幾日かの樂しい夢が續くのを占つた甲斐もなく、午前の便で着いた姉からの手紙を披いて讀んで行くうちに、民子は間もなく此處を去らなければならないことを覺悟した。二人の上に就いて、たゞ一人の同情者である姉は、中一日を置いて歸國の旨を言ひ送つて來たのであつた。それには民子を伴ふことに就いては一言も書き及ぼしてなかつたけれど、姉のみ歸つた時の母の失望と疑惑を思つては、民子はどうしても直ぐに此處を去らなければならないと思つた。それに今度の深い〳〵決心を持つて歸國するには、助言の爲めに姉の感情も考へなければならなかつた。しかしそれはあまりに殘り惜しいもの悲しい別れである爲めに、民子は歸るといふことに就いてはまだ一言も言ひ出さなかつた。

あらゆるものを彈いてたゞ二人が二人の息をして居た日は、僅かではあるが尊いものであつた一瞬きにも、その唇の微かな慄えにも、二人にのみ働く神經が、どうして一つの胸にばかり思ひの宿るのを見逃して置かう。民子の考へは男の思ひであつた。

たとへ二人は間もなく二人の生活をはじめるのであるとしても、それはまたある時のことであつて、現在の滿足を失ふ悲しみには、漸く見出すほどの慰藉に過ぎないのである。四つづゝついた砂の足跡も明日からは淋しく二つ殘るであらう。涙に、砂に、それとない告別の目が民子の顏色を沈ませた。その顏色がまた男の顏色であつた。



自分の心を悟つて居る男の心をまた悟つて、その沈默を破るのを怖れるやうに、民子はやはりいつまでも默つて蹤いて行つた。潮風は一足毎に岬の鼻に近づくに從つて濕りを加へて來た。耳に馴れた浪の音は次第々々にその度を高くして行く。ふと民子は立止つた。それは導く歩みがひたと其處に止つたからで、白絣の袂の下に跼んで、一人の媼が何やら摘み取つては籠の中に投げ入れてるのが見えた。

二人が其處に立止つたので、媼は體を崖の方に寄せて背をそばめて道を開けやうとした。けれども二人は暫く其處に立つて、ぽき〳〵と音をたてゝ摘まれる草の手元を見入つた。

『おばあさん、なんだいその草は?』と初めて男によつて口が開かれた。

『これかね、これあ濱菊つてまさあ。』

『なんするんだらう?』

それは獨り言ともつかず言ひ出された言葉であつた。

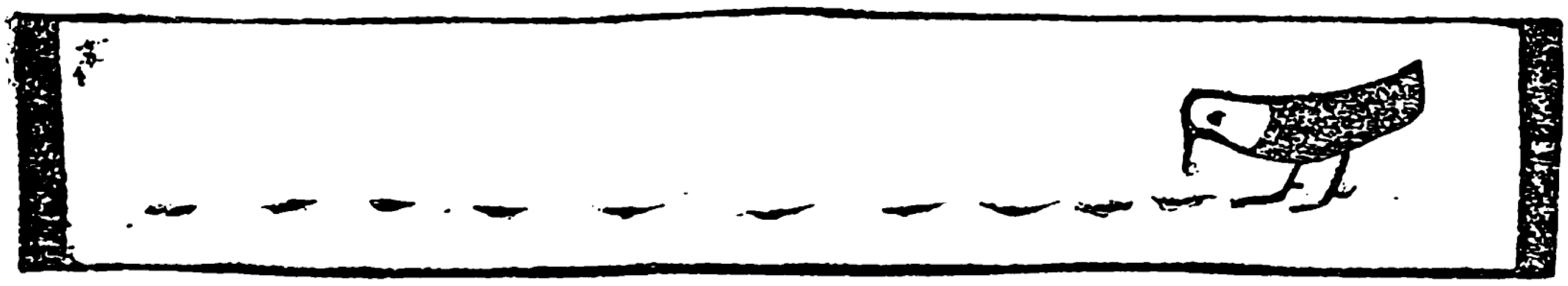
『土用の牛の日にね、これを摘んでゝね、風呂にたてゝ這入ると、リウマチなんぞにそりあよく利くんでさ。此處らの奴どもあ誰もこんな有難いこと知りやあがらねえんさ、ほんに勿體ねえこんなにどつさりあるものをさ。』

媼はぶつ〳〵と呟くやうに言ひながら、貪るやうにぽき〳〵とその有難い藥草を折り溜めた。投げ入れられる草は、籠の中に氣の故ほどの萎れを見せて積み込まれた。

二人はやがてまた默つて歩き出した。岬の頂きには待ち構へたやうな潮風が、はら〳〵と浴衣の袂を弄んだ。南上總の海は靜寂のうちに徐々として黑みを加へつゝあつた。斷崖の先に打込



まれた幾本かの杭に引いた針金の緩みが、搖ぐほどに時たま風は強く吹きあげる。
『あの船は歸るんでせうか行くんでせうか?』
民子は徐かにその杭の一つに掴まりながら言つた。
遙かの沖に一つ小鳥のとまつたやうに、じつとして居る船は、少しづゝ動くやうでもあればまた動かぬものゝやうにも見えた。
『さあ』
暫くして男は言つた。
『今時分出て行く船もあるまいから、そのへんで漁でもしてるのだらう。ごらん、じつとしてるぢやないか。』
はら〳〵と鬢の毛が頬を撫でる。
空と海との境は紛るゝほどになつた。たゞ下にはちら〳〵閃くものが走り、上には雲らしいものが微かに薄く漂ふのである。
『まだ動きませんね、あの船は。』
『…………』
民子はふと顔を仰ぎ見た。
悲しみを包んだ男性の沈默、その目は暮れ行く浪の面に動かず注がれて沈んだ。民子の胸には言ひやうのない感激が哀しさを誘つて流れた。
『民さん。』



『え？』

『明日歸る積りなんだらう？』

『…………』

『ね？』

『え〻。』

此時矢のやうに走つたいとしさが民子の胸を戰慄した。それは生れて二十二年を經て初めて湧く情緒である。

『この人が？……、この人が？……』と思つて、つく〴〵親しくその顏を眺められた朝から、思ひもかけぬ感情の働きが民子の心を支配した。これがわが言ふことであらうかと思はれるやうな潤ひのある言葉も、體の曲線のうねりも、少女の持つ寶としてそれは戀の鍵によつて開かれたのである。

『ぢやあね、九月を待つてるよ。ね、九月になつたら必度出て來なけりあいけないよ。何も彼も民さんの決心一つなんだから……』

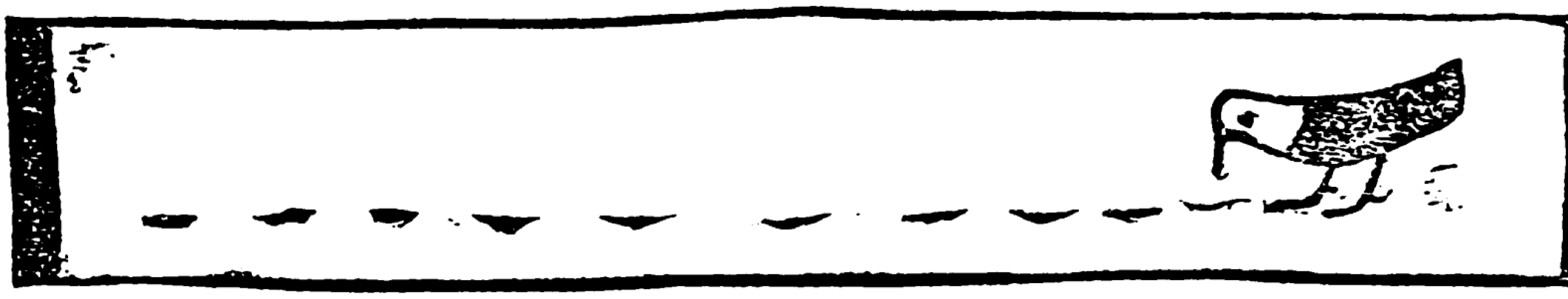
民子は默つて合點をした。包むやうな男の胸の匂ひが、ふと記憶を掠めて消えた。

『もう歸らう！だん〴〵暗くなつて來た！』

その聲に慴えたやうに民子は起ち立つた。

『あら！あの船はまだじつとしてますよ！』

思ひもかけなかつたやうな驚異の言葉は、ふと出てその半ばを潮風に攫はれて行つた。



船の影は黒くなつて死んだやうに靜止して居る。浪といふ浪はすつかりそれ自身のうちに薄い闇を吸ひ取つて居た。

簾戸を洩れる灯の影が、涼しく緣側を越えて庇の屋根瓦にその末を投げて居る。紙を走るペンの音が、その明るい灯の中から聞えた。民子の姉に齎す手紙が、男によつて一心に書かれつゝあるのであつた。なんとはない溜息が一ぱいに詰つたやうな胸を抱へて、民子は先刻から廊下に出て居た、欄干といはず柱といはず、潮氣を含んでしとく／＼になつた不氣味さも、海の宿の思ひ出の一つと明日からはなるのであらう。

直ぐ目の下の入江に寄せる夜の浪は、月のないのに焦れる腹立しさのやうに、どゞどうと岩に碎けてはざあと勢ひ込んで引いて行く、僅かに波頭の光るのが、碎けては黒い浪の畦に白い飛沫となつて散つた。果てもなく續く濤の音は、幾千年の昔から幾らの年の未來に渡つてその響きを傳へるのであらう？小さなる人間の肉體や、精神や、思想やを無視して、絶對の無に動いて居る濤には怨恨もなく、愛惜もなく、故意もなく、偶意もない譯であつた。弄ぶでもなく、運ぶでもなくに運ばれた一つの物體が、何處かの果てに漂ひ寄つたとしても、其處に人間の發見の目がなかつたならば、それは偶然とも言へないのである。藻の一房の漂ひも、杭一本の漂着も、たゞ人間の考へによつて意義をつけられるのであつた。おゝ大自然よ！

ふと民子の胸にはある不安が萠した。海草の漂ひ寄つたにも等しい自分のこの一週日ばかりの生活が、この無心に雄大な浪に再び根を誘はれるやうな機會が、明日の別れではないかと思つた

時にであつた。――と思ふと、二日ばかり前に、慰み半分に寫眞を撮影して居る貝細工屋の主人を招んで、二人が樂しい生活の紀念にと、ある夕方岩の上と下とに立つて撮らせた寫眞が、時刻が遲かつた爲めに駄目だつたと言つて來たことを思ひ出して、その薄ぼんやりとした映像を目の當り見るやうな氣がしながら、それが何かの凶い兆でもあるかのやうに思ひなされるのであつたこと〳〵こと〳〵と簾戸を搖る潮風と、絕え間ない濤聲に、はた〳〵と廊下を行く草履の音を空聞きして、民子はまたしてもふとあの可憐な溫順しい婢のことなども思ひやつた。

ペンの音は猶續いて居る。

夜の浪は寄せて碎けて、引いて散つてまた搖れた。それはいつまでも〳〵止まぬ活動であつた。

折にふれて

三ヶ島よし子

知りがたし君が心の動くとき如何なることの我に起るや
たやすしとのたまふことのむづかしき世をば一つと知りしかなしさ
今ははやたゞある我と思へるに面影見えて涙流るゝ
うつろよりうつろに入るに似たれども出でゝ仰ぎぬ水色の空
君が今除かんとする水色の幕に心のくらみたる人
生るゝはすべてみにくし死ぬるこそ美しきなれ人の世なれば
一しづく熱き涙をたまはれと言ふをはゞかり吸はれたる口
瘦せし身のいたづらにして寂しくば君が血しほを君にそゝがむ

執着

山田たづ子

お柳は闇に消えて行くガッシリした後姿を、ぼんやりと胸の中にはまだ甘い夢を見續けながら見送つてゐたが、ふと踵を返さうとした時に、角の洋品店の大鏡にぱつと自分の姿が――降るやうな瓦斯の火の中に、青白いこそげた頰に煩く後れ毛の亂れかゝつた、恐ろしく老けて見える姿が、どんよりと映し出されてゐるのを見た。往來は織るがやうな中なり、先刻からじつと自分に好奇の瞳を注いでゐた店員の手前にも、再び見返しはしなかつたが、其咄嗟に今迄のふつくらとしたほのかな匂ひに浸つてゐるやうな物柔らかな情緒が消えて了つて、急に全身に涙の滲み渡るやうな氣持がして來た。

彼女の以前は花瓣のやうにみづ〳〵しかつた皮膚も今はもうその芳烈な何ものゝ魂をも溶さずには置かないと云つたやうな、強い香が薄れて了つて、いつか長い間の疲勞が、其面影に何處となく寂しい影を刻むやうにもなつたのである。事毎に觸れては激しく沸騰した鮮紅な感情もいつか古血のやうにどろ〳〵と黒ずんで了つて、もう何事に對しても少しも死身になれない、投げやりな氣怠るい氣分が、彼女の心をも髓をも犯して了つてゐるのであつた。彼女はもう此頃は終始全身に滲み渡るやうな哀愁に浸されてゐる。自分の衰へた影の寂しい姿がじつと眼に沁み着いて離れない――蕊が黒ずんで、もう疲勞が全身に沁み通つて、吐く息もあえぎあえぎ、そよとの風にも得絶えずに

悩ましげに悶えてゐる花を、じつと詠めてゐるやうな不安と寂しさが彼女の心持を、薄暗く佗しく包んで了つてゐるのであつた。

彼女は漲るやうな燈火の中を、とぼ〱と自分の家へ足を運んだ。母親はいつものやうに帳場格子の中にキチンと坐つて、青白い瓦斯に瘦せた面を照らさせながらしきりと帳面を繰つてゐた。

「只今」

笑顔一つ振り向けずに彼女はさういつたきり、物も云ふ氣になれずに、すぐその儘狹い店の間をすりぬけて、無意識に足はいつもの習慣でトン〱と暗い梯子を驅上つた。暫時彼女は眞暗な中に崩れたやうに坐つて、自分の重い息遣ひを、ヒシ〱と耳に感じてゐたが、やがてつと立つて電燈のスヰッチを捻つた。にぶい五燭の燈火は闇の上にそろつと黄ろく流れて、赤茶けた疊の目をゴミゴミと浮き上らせる、彼女はぼんやりとその汚れた眼を落してゐたが、ふと氣がついたやうにまた立上つて押入から鏡臺を持出した。そして櫛を取つて慌しく亂れ毛を掻き上げながら――眼を据ゑて鏡の中を見た。まじ〱と見つめた。何處となく疲れのほの見ゆる顏には一體にぎら〱と脂が浮いて、薄汚く白粉の剝げ落ちたあとには幾つかの汚點さへも見えるのである。艶のない眼は不安らしくじつと沈澱んでゐる。……彼女は暫時、じつとさうしてゐたが、そのやるせない悲痛な感情は、何かに打つかりでもしたやうに急に苛々と逆立つやうに胸先に込み上げて來た。彼女はこの鏡を矢庭に何かに打つけて粉微塵に毀したくてならなくなつて來た。右の手をそつとこの鏡臺の細い引出しにかけて、鋭利な剃刀でプッツリとこの頸動脈を斷ち切つて、この疊の上にぱつと無數に鮮紅色の花を咲かせて見たい――そしてせめてもの此しほれた肉體に最後の榮をあらしめたい

……が氣を落つけて考へればそれもこれも、皆馬鹿々々しい空想に過ぎなかつた。彼女はもう堪らなくなつて、ぐつたりと其處に崩れて了つた。

お柳はこの頃つく〴〵もう斯んな烈しい刺戟から逃れて了ひたいと思ふことがある。斯ういふ恐ろしく密度の濃い空氣の一杯に充ちてゐる溫室の中に蟄居してゐるやうな息苦しい生活に彼女はもう疲れて了つた。――――彼女の肉體と感情とは餘りに疲弊して了つてゐた。早く此處から逃れ出さなければ、…………………………………思はれて、ならなかつた。

が彼女の……………………………

……………………………………………………………

……………………………………………………………

……………………………………………………………

……………………………………………………………

……………………………………………。

「……………………………………」彼女の靈は時時呼び醒されたやうに斯う叫んだ。が矢張……………いつかほの溫い柔らかな情緒の中に溶け入つて、彈力のない皮膚にも意識的に若々しい色を漲らして媚を含んでも見た。……少女のやうにみづ〳〵しく、ぱつと鮮やかに紅木蓮の開いたやうな笑ひをも見せなければならなかつた。けれども底から笑はないその笑顔は、いつも內心から押寄せてくる薄暗いじめ〳〵した

氣分のために影のやうに萎れて了ふのであつた。

「別れなければ！別れなければ！！」彼女は絶えず心に斯う云ひ續けながらも、矢張同じやうな惱みの日を重ねて來た。

そのうちにも月日は立つていつた。

今年もまた、濕つた庭の黑い土を破つて、芍藥が炎のやうな芽を吹いた。そのみづ〳〵しい赤い柔かな嬰兒の唇を思はせるやうな芽は、恐しく獰猛な力で地の底から燃やし立てられるやうに、見る〳〵成長して行く。空は毎日スツキリと透明に晴れて、匂ひのいゝ甘い露が滴り落ちさうな深い碧の色を湛え、タツプリと明るい光線を一杯に含んだ白い浮雲は、その瑠璃盤のやうな上を辷るやうに運いて行く。

凡ての木の芽はみなしく〳〵と酸味を帶びた高い香を吐いて延び、冬の中老人の腕のやうな硬い白ざけた乾いた色をしてゐた幹は、皆一樣に多分の水氣を含んで、艶やかな色を見せて來た。風は甘く薰つて凡てのものは皆此燃え立つやうな生の力に充ち溢れてゐる。

人間の肉體も矢張同じやうに、成熟し盡してどこかもう甘く熟れて行くやうな、ほのかな氣怠るさが感じられる。疲憊したお柳の肉體は此刺戟性を帶びた、毎日少しづゝ香りの高い魔醉藥を注入せられるやうな、怠るい氣候に堪へ得ないで、ブラ〳〵とよく病んだ、ガヤ〳〵した朝のどよめきも一しきり止んだ、熟れた果實のやうな色をした太陽が梢に高く輝やく頃になると、定まつて彼女は、體が少しづゝ解けて緩んで來るやうな疲勞を覺える。全身が甘い液に浸されたやうになつて、指の爪先にまでむづ痒いやうな怠るさが沁み通つて來る。……彼女はもうじつとさうしてゐら

れないで、引っ散らけてゐた紅絹の切なぞを投り出して、緑の柱にうつとりと凭れて了ふ。

黒い土の上が少し薄白く乾いて、熱い息のやうな陽炎がゆら〳〵と上つてゐる。フサ〳〵した若い人の髪の感觸を思はせるやうに、みづ〳〵と延びた若草がほの溫い柔かな風に操られるやうに弄ばれてゐる。……

蜥蜴が燒刃色の背をちらと日に光らせて、すぐまた其柔らかな叢の中に隱れて了つた。——

しなやかな若木の櫻は、明るい陽を浴びてぽつと夢のやうに咲いてゐる。そしてその薄綠の草の上に殆ど曲線かと思はれるやうな柔らかな影を、クッキリと濃く投げてゐる。

——じつとさうしてゐると彼女の意識は次第にぽつと柔かに心地よく、その夢のやうな氣分の中に溶かされて行く。……只全身を循環つてゐる血液が、漸次に沸騰してくるやうな心持がかすかに感じられるだけである。快い！快い!!何だか靈魂が肉體を遊離して、この明るい歡喜に輕くフワ〳〵と飛んでゆくやうだ。……

いつか彼女はその夢の中にじつと彼の姿を見つめてゐる。その昂つた濃い眉が明るい日の中にきら〳〵と輝いてゐる。感情の高潮した、————……………

……………………………………

…………………………………彼女はうつとりと——うつとりと……ほの溫い感覺が感じてゐる。……彼女はふと眼を瞠つた。しらじらと…… しら〳〵と明るい陽が眼を横ぎる——が彼女はもう其夢か現かを分つ意識もない。……

……………。

——はつとして眼を開ける。矢張日は明るく照つて、若木の櫻はそのふるえて居る光線の中に、しら〳〵と夢の瞬きを續けてゐる。……………………

……………………………………

…………………………………。少しぬるりと脂の浮いてほてつた頰に、ひた〳〵と清水の染み入る皮膚の目醒めた歡喜！やつと疲れた意識がハツキリとなつて我に歸るのであつた。

もう日は落ちて了つた。邊りにはひた〳〵と薄暗が迫つてゐる。空はまだ薄明るく、ぽつと入日の名殘に染められてゐる。

お柳はいつもの柱に凭れて、じつと次第に濃く黃昏れて來る庭の面を見つめてゐた。

——ヒラ〳〵と花が散つてゐる。白い艶のない死んだ櫻の花片が灰色の靄の中をヒラ〳〵と何處かへ消えて行く。……

草や木や凡てのものは皆此一日の旺盛な生の營みに疲れ果てゝ、グツタリと全身に疲勞の染み渡つたやうな生氣のない姿をしてじつとうなだれてゐる。

——夜は刻々と潮を寄せて來るやうに迫つて來る。それに連れて庭のさまは次第に、ぽつと幽韻におぼろめいて行く。

ふと氣が着くと室の中にはいつの間にか、又電燈が黃ろく濁つた光に流れてゐる。生温い風が何方からともなく迷つたやうに、そろつと吹いて來て、彼女の襟首に氣味惡るく染みるのであつた。

――またヒラ〱と花が散つてゐる。・・・・・・死人の肌のやうな冷めたい色をして、夕闇の中に迷つたやうに散つてゐる。何だか皮膚病にでもかゝつてゐる人間の肌をこそげたやうな汚ない花片だ！。

寂しい！お柳は何だか心の中に水の沁み入つて來るやうな寂しさを感じてゐる。そして何かに襲はれたやうにぶる〱と身體が顫へてゐる。――その心の底に溜つた水の上をぽつとかすかに薄日が射して、その水の色がきら・・・・と暗く冷たく光つてゐる。――何だか斯う云ふやうな寂しさが、お柳の心の中にじつと動かずにゐるのである。

――お柳は矢張彼のことを思つてゐる。ヒシ〱と思ひ續けてゐる。

彼女は今こんなことを思つてゐる。――

彼は今あの部屋のあの自分の凭れた手摺にじつと寄つてゐる。そして矢張この暗い空をじつと見つめてるだらう。してあの猛獸の瞳のやうにきら〱と光る星をじつと睨みつめてるだらう。その眼は矢張燃えるやうに輝いてゐる。炎のやうに運いてゐる。――そして自分に逢はない今宵をどんなにか焦り〱して悶えて悔ひてゐるに違ひない。その悔は今其渾身を運かしてゐる。そしてワナ〱と慄いてゐる。・・・・

――ふとまた男は少し落附いて、自分の周圍を見廻した。暗い、たゞ暗い！室の中には燈火もついてゐない。――すると迷つた風のやうな寂しみが、今ふと彼の胸に染み入つた。彼は沁々と懷しき思ひ出を辿りながら暗がりで、そつとその手摺を撫でゝゐる。――ひよつとしたらあの手摺には自分の脂の匂ひが染んでるかも知れない。いつも二人で凭つかゝつたあの手摺、――――

……………………………………………………………………………

……………………………………………………………………………

…………………。

お柳はふと我に歸つた。——

夜は段々更けて來たやうに四邊が寂然となつて來た。風が冷めたくなつてヒヤ〳〵と身に染みる寂しさがまた襲ふやうに喰ひ込んで來る。——すると自分の衰へた容姿が、ふつと眼に浮んで來る。しぼんだ影のやうになつた心がじつと自分にこびり着いてゐるのが感じられる。

お柳にはこのしぼんだ自分が、燃えるやうな彼に打つかつて漸々と虐げられて行くのが感じられてゐる。彼に逢ふ毎に少しづゝ甘い毒藥を注入せられてゐるやうにも感じてゐる。自分の身體が一日々々衰へて行くやうにも思つてゐる。そして遂にはこの自分が芥のやうに汚なく萎んで了ふのだとは思つてゐる。………

けれどお柳には、寸時でもこのすがれた自分をその甘い温い靄の中に漾はして置かなければ、この喰入るやうな寂寥をどうしやうもないのである。



疲勞

松井靜代

其夜の月は寂しかつた。兎もすれば雨の落ちて來さうな空合ひで、十二日の赤味掛つた月影は暗黒な鱗形に亂れた雲の流れ目を出たり入つたりして居た。眞白なマクレットの花片がたつた二つ、中庭の片隅からほつゝりと浮き出たやうに闇を破つて私の眼を引寄せるのだつた。何と無く滅入る樣な遣瀨なさがヒタ〳〵と疲れ切つた身體を領して行く。

全く私は疲れ切つて居るのだつた。身體も、心も。如何しやうも無い幻に追掛けられて追掛けられて「此儘自分は弱り切つて消えて終ふんぢやないだらうか」どうでも何者にか縋らないでは居られぬ程、自分の心は喘ぎ切つて居る、自分の胸は乾いて居る。

かうして私が取止めも無い苦しみに逐はれてじつと身動きもせずに默り込んでる傍では叔母が後向きになつて水色のフランス縮緬を廣げた儘、長襦袢の縫模樣でも工夫して居るらしく首を傾げて考へ込んで居た。

何やら毎日圖書館に通つて硏究して居ると云ふ喜代次さんは「近代文學十講」等と云ふ本を氣の無さゝうな顏をして讀んで居たが、ふつと顏を上げて先刻から琵琶をひねくつて居る德哉さんに聲をかけた。

「今日僕が谷中の方を廻つて來ると宵待草が澤山ありましたよ、取つて來れば宜かつたなあ」終ひの方は中ば獨言のやう。すると德哉さんは強度の近眼鏡から透かして見るやうにして

「エヽ、でも嫌な匂ひですね、僕は彼麼ボケた花は嫌ひですよ」と意味ありげな事を云ふ。
「私もさ、恰度みいちやんだね、左樣云つた所がお前にあるよ」と突然叔母が口を出した。と一所に水色の絹がスルッと二つに裂ける。私は強ひて淋しく微笑だ。
「あら、ぢや私は必竟姉樣達の嫌ひな花なんですね」
「何も那麼譯ぢや有りませんよ、ねえ姉さん」と德哉さんは狼狽てゝ打消しながら「道さんも口が惡くなつたなあ」とわざとらしく笑つた　それなり又暫らく沈默が續く。
自分はもう何だか座に靜かにしてる事すら堪へられ無くなつて來た。
「どうせ自分の心持を解して呉れる人は有りはしないんだ」と妙な反抗心がむら〳〵と湧き上る。何か思ふ樣云ひたい、シッカリと現はれる樣な話しをしたい。何故自分は斯う臆病なんだらう。何故思ふ樣に口が聞けないんだらうと我乍ら恨めしかつた。
やがて叔母は目算が立つたらしくしつとりと重味のある柔かい裂れをたゝみながら此方を振向いて、切れのいゝ眼にじつと自分を見詰めたが急に思ひ出したらしく、
「忘れて居た。みつちやん是れをお見」と懷中から葉書を出して見せた。何氣なしに手に取つた自分は早くも氣が附いて思はず物懷しい氣分に顫へた。正しく大阪の父の手蹟である。相變らずのなぐり書きで、無造作に書き流したのが一層慕はしかつた。
拜啓過日は御親切に御送品多謝々々、扨て小生三ヶ年間月俸金二百圓の約束にて南洋ピナンに渡航する事に相成、來る七日神戸出發の筈なり、病身なりとて御配慮無用、全身之膽也、萬一の事あらば白骨を送る可きのみ呵々、此儀みちに御傳へ下されたし、さよなら。

讀み終つて私は只呆然とした、殆んど何も云ふ事が出來なかつた。

考へる隙もなく俯いて汚れ掛つた銘仙の膝を見詰めて居る内に急に思ひ掛けない熱い涙が底の方から戟しい勢ひで込み上げて來た。到頭ぽとりと音を立てゝ重ねた手の甲に落ちた。またぽとりと一つ落ちた、自分はもう何にも見えはしなかつた。

「あゝした兄さんだからもう止めたつて留まるまいね、お前はかう云ふ事を聞いて可哀想だとは思はないかい」

稍々皮肉らしく斯う云つて叔母が面を覗き込んだ時に又生憎一滴ポトリと落ちた。急にひしひしと寂しさが迫つて來て迚も一人ではどうにも成らなかつた。

「父は生きて歸らぬ心算なんぢやあるまいか」ふつと思つた時堪へた歔欷が一時にどつと溢れて來て微かな忍び音を立てた。之を見た叔母は流石に優しく成つて、

「確固おしよ、みいちやん、ね、全く云へば今度兄さんが日本を離れて行くと云ふのも確かにお前が原因してるんだよ、でも今更仕方がないやね」と唾を呑んで

「ホラ、よくお見、其端書に凱の字が書いてあるだろ、彼れはね、左樣すると屹度其人は無事で歸ると云ふ「おまぢなゐ」なんだよ、お隣家の奥樣から聞いたもんだから」と靜かに話す其調子さへ何時になくしんみりして來た。

私には其れが却つて悲しかつた。事實父に取つては只一人の娘から背かれたと云ふ事は甚麼に便り無い事で有つたらう。自分は親を遠くに死にゝ遣るのだ。

未だ癒り切らない半身不髓の不確な足取りが眼に見えるやうである。彼の亂視の覺束ない瞳を

じつと見据る時寂しい面ざしが浮んで來る。あの足取りで彼の視力で彼の力で何處迄强がつて行かうとする父なんだらう。

七日と云へばもう明日である。明日の正午と云ふ時、彼のざわ〳〵した神戸港外に浮むで居る巨大な外國船が其纜を解いて愈々母國を離れやうとする瞬間、彼の片意地な其癖心には熱い情を押へ付けてるやうな父の亂れ掛けた胸の隅に、親を捨てゝ自分の道に走つた只一人子の大きな眼を思出さぬであらうか、幾十人の知人等が見送つて呉れたとて、果して背いた娘の俤を忍むで涙さへ滲み出さずに居るであらうか、昔の俤の消え掛つた廢殘の面影は端なく自分の心を領して來た。と同時に結綿の鹿の子の水淺黄をふつと思ひ出した。それは彼のいぢらしい娘氣に父を慕つて居るお葉の姿である。

お葉は本當に優しい娘だつた。年と云へば自分より二つも下でありながら、奥の間の八疊で風にも當てられず二十年を育つて來ながら彼の慘忍な手を擴げたやうな私の父に思ひを掛けて陰ながらに何か「まぼろし」でも描いて居るらしかつた。私は其れとは云はなかつたけれども暴逆な荒び切つた父親の手があの可憐な小娘の上に落ちるのをどんなに恐しく見じめに思つたらう。

其内に私は暗い家から逃れて到頭懷しい柳の町の生れ故郷に歸るべく、そして獨りの新生涯を開く爲に蘆邊踊りの道頓堀や、京町堀の文樂を捨て様とした時、プラットホームの柱に凭れて涙ぐんだお葉は私の顏をふり仰いで、

「父樣の事は御案じやすな、私がついてますさかい」

「それよりあんた早よ用濟まして歸つとくなはれ、近い内私も獨りになる樣な事おへんやろか、

えらい氣が濟まん、となあ」と、とぎれ〴〵に云ひ終つて寂しく微笑むだ。あの人の微笑み。
「お葉さんも死ぬかも知れない」再び私は這麼事を思つた。
「泣いちや厭や、泣いちや厭や、ね、何だつてあなたはさう弱いんだらう………。」
私は愕然とした。今の聲、左樣だ、今の聲だ。
「しつかりおし」何處からともなく又聞えて來る。
私の頭はくら〳〵つとした。もう苦しくて苦しくて堪へられなくなつて來た、身體中の血が一時に頭に昇つて來たんぢやあるまいか、家がぐる〳〵と廻つて電燈がパッと消えた、と思ふと其處には憔悴し切つた老人の恨めし想な眼と、若やいだ美しい人の微笑みとがふつと浮ぶ。ハッとして自分は身を縮ませて隱れやうとした、とても堪らない。
「堪忍して、堪忍して」と夢中で叫ぶ、ふつと消えた。と、又今度は二つ巴のやうに廻り廻つて私の胸の中をがら〳〵と掻き廻して行くその痛さ。
どさつと音がした。吃驚して飛上るとあッそれは自分の心臟が破裂した音だつたのだ。眞紅な心房と心室とが恰度芥子の花片のやうに四つに分れて離れ〴〵に暗の中を向ふへと飛んで行く。
「いけない、そんなに逃げてはいけない」と私は叫んだ。
「そんなに行つちまふと私は空虛になつちまふぢや無いか」と耐らなくなつて追掛けやうとするそれなり何時の間にか自分と云ふものがだん〳〵薄く失くなつて行く………。
………。どこか遠くの方で
「みいちやん」としきりに誰かゞ呼ぶ、それは私の知らない亡母のやうでもあり、またどこかの

女の樣な氣もしてふつと眼を開くと、自分は眞白なシーツに被はれた床の中に寢かされて周圍には心配想な德哉さんだの色々な人がじつと私の顏を見守りつゝ坐つて居た。枕の上に居て私の手を握つて居るのは叔母だつた。

私が眼を開いたのを見るとほつとした樣な樣子で母親らしい態度を示しながら、

「まあ、みいちやん」と淚ぐんで「しつかりおし」と云つた。

「しつかり、しつかりおし」と私は口の中で繰返した、それはたつた今し方何處からか微かに聞いた懷しい聲だつたのだ。私は悲しくなつて終つた。そして父の妹だと云ふ此叔母の顏をそつと見上げて彼の眉と眉との間の廣い裕然した面に睫毛の長い綺麗な目、稍大きな鼻、さうした似方を見出したとき、何とも云はれない程、懷しくなつて其手をぎゆつと握りしめたまゝ其青白い細い手の甲を冷たくなつた自分の頰に押當てた。

さ　さ　や　き

マクスオーレル

△愛は相反するものから生れる、女の如き男が女らしき女から輕蔑せられ、男の如き女が男らしき男から恐れらるゝ所以は此點に存する△富が窓口へ來た時は、多くの場合愛と幸福とが窓から飛去る時である△女は全く聞取れない調子の外「諾」と云つてはならぬ。彼女は常に「否」と云はねばならぬ。彼女の美德を載せた彈藥車が爆發されようとする刹那まで「否」と云ひ續けねばならぬ△男が彼の家庭を愛してゐる場合に、あらゆる彼の缺點を恕すことの出來ない女は救ふべからざる愚物である△男は多くの場合彼が與ふる以上のものを約束し、女は毎に彼女の約束する以上のものを與ふる。

赤い柿

山田邦子

廓の金松樓の「おなぎ」の熊さんとも別れて又おきたさんは私の家の、あの納屋つゞきの三疊に住むやうになつた。其頃にはもう鬢のあたりは白髮ばかりになつてゐた。

「なんぼなんでも、此度はおきたさんも白髮は拔けまいねとおばあ樣」

「知つてこそ、いまに又たれか亭主を見つけて口紅をつけますぞエ、何歳になつても困りもんだぞ」

「ほんとにあの人はどこでどうして死ぬずらねエ、今朝も朝湯に行きがけに、ぱつたり熊さんに逢つたら、丸でお他人に挨拶するやうに「おはやう御座いやす」つてしやあ〳〵して居ましたぞね、昨日今日離れたと言ふ人に……」

私の家の借家のおばさんたちはくすぐッたいやうな口つきで、祖母や私たちにこんな話をした。大抵の事に口を出さない祖母は聞くでもなく聞かぬでもなく苦笑をしてゐたがおしまひの話で一座はドッと笑ひ崩れた。

それは私の國の習慣で朝の十時頃と午後の二時頃には定つて漬物やお菓子を並べてお茶を飲む、（つひ近い同志では呼んだり呼ばれたりする）其或る日のお茶の時の話で、太陽が大きいほの暗い家の私たちをパッと射してゐた。

五十を越してからも、おきたさんは髪に油をこて〱とつけて格向のいゝ丸髷に襟足をつくつてはぬき襟に着物を着た。そこらを閉め切つてひつそり古い鏡を針箱にたてかけては小さい毛ぬきで白髪を拔いてゐるのがたてつけの惡い戶のすき間から時々人に見えた。

いつやら私の姉が婚禮の待女郎にたのまれて仕度をして行く時に白粉は有つたが口紅がない、片化粧では行かれないと言ふのでおきくが氣をきかせて家の借屋を片つぱしから聞きあるいたが一軒も持合せがなかつた。ふと祖母は見ぬいたやうに「おきくや、おきたさんの處へ行つて聞いておいでよ、きつと持つてゐる」と言ふ、おきくはくすぐつたいやうにおきたさんの處へ出かけた。「おばあ樣御座いましたゞね」あきれたやうにかう言ひながらおきくは昔風な口紅ちよこを持つて歸つて來た。こんな事が皆な人の笑話になつてしまつた。

一體おきたさんはいつ頃から私の家のあの裏の三疊に居たんだらう、――かう考へて見ると、私といふものゝ意識がいつとなく働き出した、其おもひでの始つからおきたさんはあの三疊に居た、幼い頃には私は近所のをばあ樣たちのなりふりにかまはぬのにくらべて、おはぐろがいつも黑く綺麗に光つてゐる引すぼめた口だけでも好きであつた。よい亭主を見付けると小さい道具をまとめては其人の方へ行く、けれどもそれは決して長持はしなかつた。別れると定つて私の家の三疊に歸つて針仕事をしたり機を織つたりして暮しを立てゝゐた。

しみつたれで、あんぱんを三ツに切つてはお茶うけに出すくせに齒の浮く樣なお世辭を言つて人の甘心を買はうとする、さう言ふ事のきらひな祖母は時には苦笑ひをしながら「おきたさん空世辭を

言つたつて己にはだめだぞエ」などゝ皮肉な事を言はれるけれどそれでも平氣で笑つてゐた。

生れは松本でそつちには身よりもあるといふ事だつたがとんと便りもないし又しやうともしなかつた。

熊さんと別れて二月ばかりは何事もなかつた。おきたさんはそろ〳〵夏が更けてゆく、熱いなかにどこかうすら冷い夕暮の光をだどるやうに私の家の土藏の前でいつ迄も機を織りつゞけた。

「秀樣、まあ見て下さい、今日もこれだけかせぎましたわね……」

かう言つて、土藏をしめに行つた私を、おきたさんは無理に呼び止めて、スル〳〵と織りためた布をほどいて見せた、私は其時ふとおきたさんの皮のたるんだいかにも老人らしい手が目について何んだかあはれにしみ〴〵と其布を見た。

おきたさんは、つや〳〵しい顏に、嬉しさうな笑を浮べて

「これだけでも仕事をしなければねエ秀樣、今日樣に對して申譯がないから――」

かう言つておいて口をすぼめて笑つた。暗くなつた土藏の前に其笑ゑが漂つて消えた。

二三日たつてからの朝、私は納屋に薪をよせに行きながら何心なくおきたさんの家をのぞいた。

――とおきたさんは織りあげた布を前に置いて大きな目鏡をかけたまゝ考へこんでゐる。

「きれいに織れたねエ」私はお愛想にかう聲をかけた、其實もう年をとつてゐるので縞の間違ひや織きずが多い上に盜み絲をするので布が非常に荒くなつてゐるといふのでおきたさんの機はさう評判がよくなかつた。

「まあ秀樣、いゝ處へ來て下さつた。今お願に行かうかと思つてゐやした」かう言ひながらおきた

さんは「機を織りあげると、直ぐそれを縫つてくれと又頼まれたが、それが老人の着る被布に縫つてくれといふ事、けれどもう被布なんか何年にも縫つた事がないから裁方をすつかり憶えてゐないので困り切つてゐた」と言ふ、それで私は無理にあげられて一目わりの黄色つぽい絹縞を被布に裁つてやり、ついでだと思つて垂れの格向を縫つてやつた。

「マア〳〵お有難いとも何んとも。今のお若い方は何から何までよく心得ておいでだで‥‥」

こんな事を言ひながらこそ〳〵片隅で火をおこしてゐた。しーんと小さいやくわんのお湯が音をたてると、おきたさんは立つてがちや〳〵お茶道具をそろへた。

「さあ秀樣お茶をいれませう、こんなにお前樣をお使ひたて申してもつたい至極もねえ」こんなお世辭をふりまきながらきうすを取つてちよつとお茶をつがうとして思ひ出した樣に立ちあがると右手の戸棚をあけて小さい古いお茶碗を出して、お茶をつぐと又其棚へ持つて行つた。私はふと何をするんだらうと思つて針の手を止めた。向ふ向きになつて何か小聲で言つておきたさんは直ぐこつちを向いてニツコリ笑つた「秀樣、こゝに私の娘が居りやす」かう言つて戸棚の中の古い寫眞を出して見せた。

「まあ」‥‥私は湧き出す好奇心を押へるやうに靜に其寫眞を受取つて見た、さう言へばおきたさんに似た處もあるやうな、何んだか薄命な女と言つたやうな十七八の娘が長い袂の着物を着て寫つてゐる。

「もう死んでから十八年にもなりやす、かうやつてお茶をあげるのが樂しみでね」とおきたさんはしみ〳〵と又寫眞に眺め入つた。

「をば樣、子供つて可愛いもの」私はふとこんな事が聞きたくなつた。

「そりやあ秀樣、泣けば泣いたで可愛いし笑へば笑つたで可愛いし怒れば怒つたで可愛いものですぞね、此おさきが死ぬ年、忘れもされない此着物の袂を長くこしらへてお祭に着せて出しましたが其時お友達衆と並んで行く後姿を私は見えなくなる迄見送つてゐましたぞね、嬉しくてねエ……死んでしまへばそれつきりのものだが――」

かう言つておきたさんは目をうるませた、其目の光はもうよつぽど老人らしくにごつてゐた、私は、おきたさんは、あので亭主をとり代へるたびに矢つ張り此寫眞も荷物にして其家に持ちこむんだらうかとそんな事を思つて寫眞の内の薄命らしい娘の人に生きてるやうな同情が湧いた。

「今晩は、あの裏のおきたさんはお留守で御座いますかね」とだみごゑの爺があわてたやうな聲で二三度も私の家を尋ねた。それはもう九月も末になつて透きとほるやうな蟲の聲が暗い家をめぐつて鳴きつゞけてゐる頃であつた。

「おばあ樣、おきたさんは又何か見付けましたぞね、此頃では毎晩〱灯けた事もないランプなんか灯けてお酒でも飮むらしい樣子だ、ほんとにあきれてしまうねエ」

借屋のをばさんたちは又こんな事を言ひ付けた。

「又此前の熊さんのやうに十も十五も年の若い人かエ？」

「いゝえおばあ樣此度は隱居らしう御座います」

「ブーン、いゝ爺樣なら結構だわエ何挺も長持がすればいゝが、おきたさんもいゝ頃に思案をし

ないと飛んだ事になるぞ、熊さんが己れにさう言つた「おばあ樣、としとつての夫婦だから色戀の道ばかりでは御座らない、大抵な事は我慢し合つて行かうと思つたけれど、何しろおきたは腹が冷い奴だから私もすつかり思案をきめました」つてね、此度隱居を抱き込んだら己れが一つすつかり意見をして死場を定めてやらずわエ」

母屋の方でヒソ／＼こんな事を言ひ合つてゐる間も土藏の方からはおきたさんの織る機の音がチヤン／＼と秋らしく家ぢうに冴えて響てゐた。

月のいゝ晩であつた、其頃非常に感傷的であつた私は只何となく一人裏の畑の細道に彳んで森と更けてゆく初秋の夜露にぬれてゐた。蟲の聲がそれは／＼あはれに沁み／＼と響て何んとも言へぬ物淋しさが黑く見える家のまはりをめぐつて居るやうな氣がされてならない、私はじつと彳んでゐた――と裏の細道にこそ／＼と人の足音が聞える、ハッと思つたが私は身動が出來なかつた其間に黑い人の影が飛ぶやうに私の家横を這入つた、私の胸は早鐘を打つやうに鳴る、けれども私はまだ身動きもしなかつた。

「今晩は、今晩は」……人の影はぴつたりと納屋つゞきのおきたさんの家の戸にくつゝいて忍ぶやうにかう呼んだ。私はほつと胸の安まると同時に一種の不快な念がむら／＼と湧いて來る、さうして妙に身をひそめて耳をそばだてる好奇心も押へる事は出來なかつた。

「今晩は、おるすかね、おきたさん、今晩は」

迫つたやうなあわてた樣な聲が忍び／＼に大きくなつてくる。森とした小さい暗い家には何の答もないらしい。

「今晩は、今晩は……」やがて外ではガタ／＼と戸をゆり出した。然し家からは何の答もなかつたしばらくするとぼとり／＼と重い足音を殘してどこへか人は歸つて行つた。私はほつと救はれたや

うに立ちあがると唾をはいて裏木戸を閉めた。

それから一月ばかりたつ間におきたさんは大格ないかにも人のよさゝうな隱居と並んで日向ぼつこをしながら機のつなぎ絲をつないだり自分の肌衣と並べてシマフランのシャツなどを乾したりするやうになつた。男の手のない私の家では時には爺さまの一寸手をかりて冬ごもりの薪をつみ上げて貰つたり雪菜をふせて貰つたりするやうにもなつた。

今度はおきたさんはどこへも越さずに其三疊に二人暮をした、隱居は村の集會所の小使であつた

十二月の始め小暖い日であつた。男の手がないので捨てゝおいた柿の實がはうだい赤くなつてゆくので仕方なしにおきたさんの爺さまの手をかりてやつとそれをもぐ事にした。

爺さまはニコ〳〵しながら腰に小びくをつけて高い梯子をかけて柿の木に登つていつた、私たちは霜がれの地べたに莚を敷いて柿の吊りおろされるのを待つてゐた。

「爺樣木の上にあんけらかんとして居ちやあいけないよ」

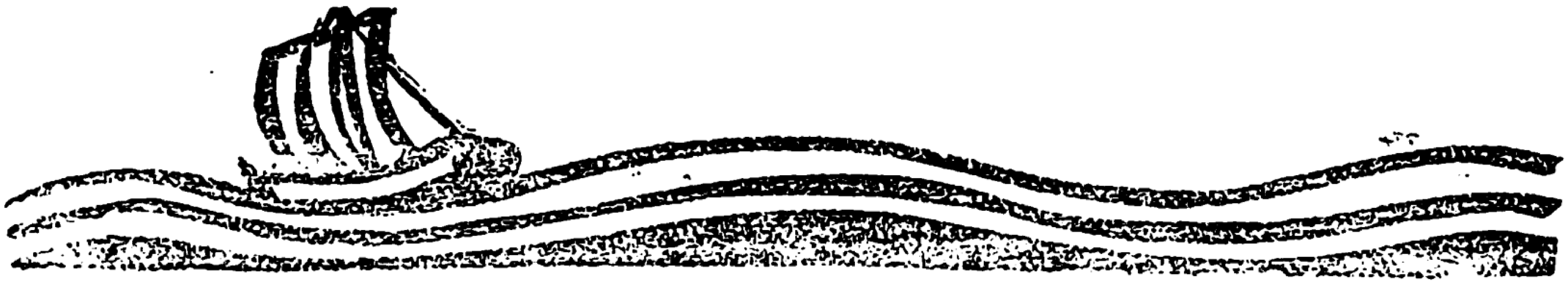
大聲でかう呼びながらおきたさんはゝしやいでそこへやつて來た。

「どれ私も手近い處を手傳はう」こんな事を言ひながらおきたさんは身輕くはしごを登つてゆく、私たちは目をみはつた。

「まあ、をば樣危い、およしな、およしな」

「なあに私は昔からこんな事が大好きでしたよ」おきたさんはゝしやぎ切つて笑ひながらはしごの中程から手をのばして赤い柿の實をもいでは莚の上に落してよこした。

「氣の若い人だ」私はふとかう思つて柿をもいでゐるおきたさんを見上げた、十二月の太陽が沁みるやうに射してゐる柿の木の中頃に、おきたさんは白髮の目だつ横顏を見せて餘念もなく、唄でもうたひ出しさうなはしやいだ口元をして赤い柿をもいでゐた。



勝利

前島優梨子

「健兄さん！」
何か店の用らしく奥藏へ行つた小兄の姿をチラと見た私は、急いで廊下の上草履を突掛けたまゝそつと其後を追つて、重い引戸の半分許り明いた薄暗い藏の中へ、草履を脱いだ素足にヒヤリとする石段を二つ登つて這入ると、低い聲でそつと斯う呼んだ。

「ウン？」と振り返つた兄はすぐ私の目なざしを見てそれと思つたらしく。

「什麽したんだえ？」と重ねて優しく聞いた。

「小兄さん、什麽したら好いんでせう、私眞實に情ない」

といふともう張りつめて居た氣が意氣地なく緩んで、胸が一杯になるのであつた。

「また縁談が出たんだらう？」

昨晩北座敷で晩酌のお酌をさせながら、父がひそ〳〵と落着のある低い聲で私に話て聞かせて居た時、廊下を通つてそれと知つた小兄は、斯う云ひながら何か探す手を止めて、そこに重ねてあつた店の品物に倚りかゝる樣に肘を持たせて、またいつもの樣に私の情ない訴へを心から聞いて吳れるらしい面もちで昵と私を見詰めた。

「えゝ困るわ」と云つたきり、私は昨晩父から聞かされた色々の事を思ひながら伏目になつて、

傍にあつた簞笥へ倚りかゝつた。

兄は甚麽緣談かそんな事は聞く必要もないと云つた樣な顏をして何も云はなかつた。

「小兄さん、私は一層父樣にさう申さうか知ら？とも思ふのよ、だつて……」と皆まで云はせもせず。

「もう暫くだ我慢してお居で」と兄は口早に云つて、

「今此處でそんな事にして今までの苦勞を什麽するんだえ、お前は花田樣に何て云つた？」と優しくそしてたしなめる樣に云ひたした。

私は默つて袂を顏にあてた。

辛い！何事も此胸一つに秘め置いて、絕えず心を惱まされつゝ只時の來るのを待つ今の私の身は、云はれなく情ない。

「××樣にも決して何も云つて遣るんぢやないよ」と兄は私の顏を覗く樣にしてまた重ねて云つた。

「ハア」と私は小さい聲で明瞭云つた。

――戀を得ぬ、されどすべてを失ひぬ。

誰の言葉でしたかこれが眞實の戀の成功者？なんでせう。けれど古い空氣に取り卷かれた、そして心の小さい私には、こんな事はしたくない。それはもう最後の最後の其時の事は知らないけれど。戀といふ事さへ此上ない罪惡の樣に思ひなして居る人達に、私はそれさへも知らせたくないのだもの。僞るは濟まないけれど。

今もしすべてを打ち明けたら私は不孝の子と云はれなければならない、嫂にはまたどんな下げすみの目で見られる事だらう。

親を思ひそして妹を想ふ小兄は、家の何處にも暗い氣分は露漂よはせないで、そして誰の面も晴やかに心から私の幸福を思つて呉れる樣にと、それは自分の事でもある樣に心遣ひして呉れるのだもの。あゝ私は其時の來るのを待つ間の獨の情なさなどは、笑つて耐えなければならなかつたものを、…。

「そしてお前昨晩は何て云つて置いたの？」

「私考へさせて下さい、つて云つて置いたわ。いつもお前はまだ早いから〱といふけれど、もう決して早い事はないし、それに此度の縁談は何も不足はないだらうと思ふ、なんて仰有るんですもの、困るわ」、暫時してから兄妹は矢張り低い聲で口を開いた。

「ネ兄さん、父樣や大兄樣は何とか思つて被在りはしないでせうか、私そればつかりが心配だわ」と私は絶えず覺える胸の震ひをまた訴へた。

「氣が進まなければ仕方ない、と思つて居られるだらう」と兄は私の氣安めらしい事を、それでもいくらか自分もさう思つて居るらしく云つた。

「私はたゞハラ〱して居てよくも聞かなかつたけれど、何だか今度の縁談は大變父樣が乘り氣で被在る樣ですし、それに嫂さんの遠縁の方とかですつて、だから私が理由もなく斷つたら屹度嫂さんがネ…」

「何處からか故障が出ると好いんだがなア」と少し默つて考へて居た兄は獨言の樣に云つた。

兄妹はまた默つて同じ事を別々に考へて居た。
厚い扉の明いた鐵格子の窓からは、夕方の白い光りが淋しく投げ込まれて居た。
あゝまたしても私のむすぼれた心は堪らなくイラ〳〵して來た、不安になつて來た。思ひ返し思ひ返しはするものゝ。
緣組は矢張り其家と家との緣組だから、とよく仰有る父樣だもの、それには今度の話などまたなく相應しい、否過ぎる緣談かも知れないだらう。
あゝもし父樣が是非にと仰有つたら――。
もし、嫂さんが嫁つて下さるんでせう、とわざとらしいあの莞爾した顏で仰有つたら――。
戀を知らない昔の私だつたら、それは美しい着物を澤山持つて珍らしい知らない家へ招ばれて行く樣な可憐らしい嬉しさを思つて快く頭を縦に振つたであらうけれど。あゝもし其時は仕方ない、私は罪の子となりませう、心の小さい私にだつて戀は重いんだもの――。其時の父の怒り! 嫂の憎しみ! そしてもし、あゝそしてもし此紅い想ひを破られたらば……。
さうした時屹度母樣は何も忘れて私をかばつて下さるだらうに……。あゝ其母樣は冷たい墓に――。斯した悩ましい思ひを私はもう甚麽にしたらう。緣談の出る度に、一層××樣に打ち明けて、すぐにもさうした運びにして頂かうか、せめて此情ない胸の想ひを分けてだけでもいたゞきたい、とそれは幾度思つて見るかは知れないけれど、あゝ大事な最後の試驗を控へた方に、もしそんなお心遣ひの爲に成績が……と思つてはどうして云へよう。
限りなく美しい輝きが遠い向ふに見えるを思へば、幾度暗い雲に閉され樣と、屹度此手で拂ひ

さんは「機を織りあげると、直ぐそれを縫つてくれと又頼まれたが、それが老人の着る被布に縫つてくれといふ事、けれどもう被布なんか何年にも縫つた事がないから裁方をすつかり憶えてゐないので困り切つてゐた」と言ふ、それで私は無理にあげられて一目わりの黄色つぽい絹縞を被布に裁つてやり、ついでだと思つて垂れの格向を縫つてやつた。

「マア〳〵お有難いとも何んとも。今のお若い方は何から何までよく心得ておいでだで……」

こんな事を言ひながらこそ〳〵片隅で火をおこしてゐた。しーんと小さいやくわんのお湯が音をたてると、おきたさんは立つてがちや〳〵お茶道具をそろへた。

「さあ秀樣お茶をいれませう、こんなにお前樣をお使ひたて申してもつたい至極もねえ」こんなお世辭をふりまきながらきうすを取つてちよつとお茶をつがうとして思ひ出した樣に立ちあがると右手の戸棚をあけて小さい古いお茶碗を出して、お茶をつぐと又其棚へ持つて行つた。私はふと何をするんだらうと思つて針の手を止めた。向ふ向きになつて何か小聲で言つておきたさんは直ぐこつちを向いてニツコリ笑つた「秀樣、こゝに私の娘が居りやす」かう言つて戸棚の中の古い寫眞を出して見せた。

「まあ」……私は湧き出す好奇心を押へるやうに靜に其寫眞を受取つて見た、さう言へばおきたさんに似た處もあるやうな、何んだか薄命な女と言つたやうな十七八の娘が長い袂の着物を着て寫つてゐる。

「もう死んでから十八年にもなりやす、かうやつてお茶をあげるのが樂しみでね」とおきたさんはしみ〴〵と又寫眞に眺め入つた。

「をば樣、子供つて可愛いもの」私はふとこんな事が聞きたくなつた。

「そりやあ秀樣、泣けば泣いたで可愛いし笑へば笑つたで可愛いし怒れば怒つたで可愛いものですぞね、此おさきが死ぬ年、忘れもされない此着物の袂を長くこしらへてお祭に着せて出しましたが其時お友達衆と並んで行く後姿を私は見えなくなる迄見送つてゐましたぞね、嬉しくてねェ…死んでしまへばそれつきりのものだが――」

かう言つておきたさんは目をうるませた、其目の光はもうよつぽど老人らしくにごつてゐた、私は、おきたさんは、あので亭主をとり代へるたびに矢つ張り此寫眞も荷物にして其家に持ちこむだらうかとそんな事を思つて寫眞の内の薄命らしい娘の人に生きてるやうな同情が湧いた。

「今晩は、あの裏のおきたさんはお留守で御座いますかね」とだみごゑの爺があわてたやうな聲で二三度も私の家を尋ねた。それはもう九月も末になつて透きとほるやうな蟲の聲が暗い家をめぐつて鳴きつゞけてゐる頃であつた。

「おばあ樣、おきたさんは又何か見付けましたぞね、此頃では毎晩々々灯けた事もないランプなんか灯けてお酒でも飲むらしい樣子だ、ほんとにあきれてしまうねェ」

借屋のをばさんたちは又こんな事を言ひ付けた。

「又此前の熊さんのやうに十も十五も年の若い人かエ?」

「いゝえおばあ樣此度は隱居らしう御座います」

「フーン、いゝ爺樣なら結構だわェ何挺も長持がすればいゝが、おきたさんもいゝ頃に思案をし

ないと飛んだ事になるぞ、熊さんが己れにさう言つた、「おばあ樣、としとつての夫婦だから色戀の道ばかりでは御座らない、大抵な事は我慢し合つて行かうと思つたけれど、何しろおきたは腹が冷い奴だから私もすつかり思案をきめました」つてね、此度隱居を抱き込んだら己れが一つすつかり意見をして死場を定めてやらずわヱ」

母屋の方でヒソ〳〵こんな事を言ひ合つてゐる間も土藏の方からはおきたさんの織る機の音がチヤン〳〵と秋らしく家ぢうに冴えて響てゐた。

月のいゝ晩であつた、其頃非常に感傷的であつた私は只何となく一人裏の畑の細道に彳んで森と更けてゆく初秋の夜露にぬれてゐた。蟲の聲がそれは〳〵あはれに沁み〴〵と響て何んとも言へぬ物淋しさが黑く見える家のまはりをめぐつて居るやうな氣がされてならない、私はじつと彳んでゐた――と裏の細道にこそ〳〵と人の足音が聞える、ハッと思つたが私は身動が出來なかつた其間に黑い人の影が飛ぶやうに私の家横を這入つた、私の胸は早鐘を打つやうに鳴る、けれども私はまだ身動きもしなかつた。

「今晩は、今晩は」……人の影はぴつたりと納屋つゞきのおきたさんの家の戶にくつゝいて忍ぶやうにかう呼んだ。私はほつと胸の安まると同時に一種の不快な念がむら〳〵と湧いて來る、さうして妙に身をひそめて耳をそばだてる好奇心も押へる事は出來なかつた。

「今晩は、おるすかね、おきたさん、今晩は」

迫つたやうなあわてた樣な聲が忍び〳〵に大きくなつてくる。森とした小さい暗い家には何の答もないらしい。

「今晩は、今晩は……」やがて外ではガタ〳〵と戶をゆり出した。然し家からは何の答もなかつたしばらくするとぼとり〳〵と重い足音を殘してどこへか人は歸つて行つた。私はほつと救はれたや

うに立ちあがると唾をはいて裏木戸を閉めた。

それから一月ばかりたつ間におきたさんは大格ないかにも人のよさゝうな隱居と並んで日向ぼつこをしながら機のつなぎ絲をつないだり自分の肌衣と並べてシマフランのシヤツなどを乾したりするやうになつた。男の手のない私の家では時には爺さまの一寸手をかりて冬でもりの薪をつみ上げて貰つたり雪菜をふせて貰つたりするやうにもなつた。

今度はおきたさんはどこへも越さずに其三疊に二人暮をした、隱居は村の集會所の小使であつた

十二月の始め小暖い日であつた。男の手がないので捨てゝおいた柿の實が赤くなりはうだい赤くなつてゆくので仕方なしにおきたさんの爺さまの手をかりてやつとそれをもぐ事にした。

爺さまはニコ〳〵しながら腰に小びくをつけて高い梯子をかけて柿の木に登つていつた、私たちは霜がれの地べたに莚を敷いて柿の吊りおろされるのを待つてゐた。

「爺様木の上にあんけらかんとして居ちやあいけないよ」

大聲でかう呼びながらおきたさんはゝしやいでそこへやつて來た。

「どれ私も手近い處を手傳はう」こんな事を言ひながらおきたさんは身輕くはしでを登つてゆく、私たちは目をみはつた。

「まあ、をば樣危い、およしな、およしな」

「なあに私は昔からこんな事が大好きでしたよ」おきたさんはゝしやぎ切つて笑ひながらはしでの中程から手をのばして赤い柿の實をもいでは莚の上に落してよこした。

「氣の若い人だ」私はふとかう思つて柿をもいでゐるおきたさんを見上げた、十二月の太陽が沁みるやうに射してゐる柿の木の中頃に、おきたさんは白髮の目だつ横顔を見せて餘念もなく、唄でもうたひ出しさうなはしやいだ口元をして赤い柿をもいでゐた。



勝利

前島優梨子

「健兄さん！」
何か店の用らしく奥藏へ行つた小兄の姿をチラと見た私は、急いで廊下の上草履を突掛けたまゝそつと其後を追つて、重い引戸の半分許り明いた薄暗い藏の中へ、草履を脱いだ素足にヒヤリとする石段を二つ登つて這入ると、低い聲でそつと斯う呼んだ。

「ウン？」と振り返つた兄はすぐ私の目なざしを見てそれと思つたらしく。

「什麽したんだえ？」と重ねて優しく聞いた。

「小兄さん、什麽したら好いんでせう、私眞實に情ない」

といふともう張りつめて居た氣が意氣地なく緩んで、胸が一杯になるのであつた。

「また縁談が出たんだらう？」

昨晩北座敷で晩酌のお酌をさせながら、父がひそ〳〵と落着のある低い聲で私に話て聞かせて居た時、廊下を通つてそれと知つた小兄は、斯う云ひながら何か探す手を止めて、そこに重ねてあつた店の品物に倚りかゝる樣に肘を持たせて、またいつもの樣に私の情ない訴へを心から聞いて呉れるらしい面もちで昵と私を見詰めた。

「えゝ困るわ」と云つたきり、私は昨晩父から聞かされた色々の事を思ひながら伏目になつて、

傍にあつた簞笥へ倚りかゝつた。

兄は甚麼縁談かそんな事は聞く必要もないと云つた樣な顏をして何も云はなかつた。

「小兄さん、私は一層父樣にさう申さうか知ら？とも思ふのよ、だつて……」と皆まで云はせもせず。

「もう暫くだ我慢してお居で」と兄は口早に云つて、

「今此處でそんな事にして今までの苦勞を什麼するんだえ、お前は花田樣に何て云つた？」と優しくそしてたしなめる樣に云ひたした。

私は默つて袂を顏にあてた。

辛い！何事も此胸一つに秘め置いて、絶えず心を惱まされつゝ只時の來るのを待つ今の私の身は、云はれなく情ない。

「××樣にも決して何も云つて遣るんぢやないよ」と兄は私の顏を覗く樣にしてまた重ねて云つた。

「ハア」と私は小さい聲で明瞭云つた。

——戀を得ぬ、されどすべてを失ひぬ。

誰の言葉でしたかこれが眞實の戀の成功者？なんでせう。けれど古い空氣に取り卷かれた、そして心の小さい私には、こんな事はしたくない。それはもう最後の最後の其時の事は知らないけれど。戀といふ事さへ此上ない罪惡の樣に思ひなして居る人達に、私はそれさへも知らせたくないのだもの。僞るは濟まないけれど。

今もすべてを打ち明けたら私は不孝の子と云はれなければならない、嫂にはまたどんな下げすみの目で見られる事だらう。

親を思ひそして妹を想ふ小兄は、家の何處にも暗い氣分は露漂よはせないで、そして誰の面も晴やかに心から私の幸福を思つて呉れる樣にと、それは自分の事でもある樣に心遣ひして呉れるのだもの。あゝ私は其時の來るのを待つ間の獨の情なさなどは、笑つて耐えなければならなかつたものを、……。

「そしてお前昨晩は何て云つて置いたの？」

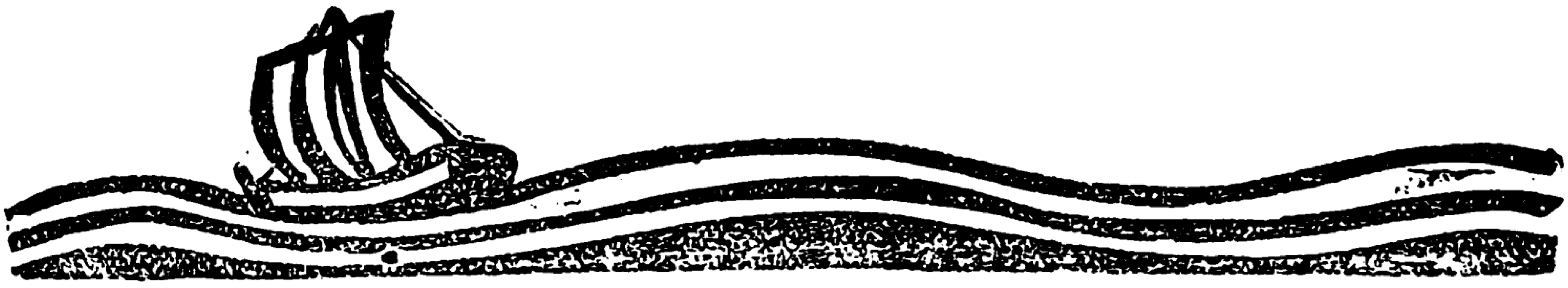
「私考へさせて下さい、つて云つて置いたわ。いつもお前はまだ早いから〳〵といふけれど、もう決して早い事はないし、それに此度の緣談は何も不足はないだらうと思ふ、なんて仰有るんですもの、困るわ」、暫時してから兄妹は矢張り低い聲で口を開いた。

「ネ兄さん、父樣や大兄樣は何とか思つて被在りはしないでせうか、私そればつかりが心配だわ」と私は絕えず覺える胸の震ひをまた訴へた。

「氣が進まなければ仕方ない、と思つて居られるだらう」と兄は私の氣安めらしい事を、それでもいくらか自分もさう思つて居るらしく云つた。

「私はたゞハラ〳〵して居てよくも聞かなかつたけれど、何だか今度の緣談は大變父樣が乘り氣で被在る樣ですし、それに嫂さんの遠緣の方とかですつて、だから私が理由もなく斷つたら屹度嫂さんがネ……」

「何處からか故障が出ると好いんだがなア」と少し默つて考へて居た兄は獨言の樣に云つた。



兄妹はまた默つて同じ事を別々に考へて居た。

厚い扉の明いた鐵格子の窓からは、夕方の白い光りが淋しく投げ込まれて居た。

あゝまたしても私のむすぼれた心は堪らなくイラ〳〵して來た、不安になつて來た。思ひ返し思ひ返しはするものゝ。

緣組は矢張り其家と家との緣組だから、とよく仰有る父樣だもの、それには今度の話などまたなく相應しい、否過ぎる緣談かも知れないだらう。

あゝもし父樣が是非にと仰有つたら――。

もし、嫂さんが嫁つて下さるんでせう、とわざとらしいあの莞爾した顔で仰有つたら――。

戀を知らない昔の私だつたら、それは美しい着物を澤山持つて珍らしい知らない家へ招ばれて行く樣な可憐らしい嬉しさを思つて快く頭を縱に振つたであらうけれど。あゝもし其時は仕方ない、私は罪の子となりませう、心の小さい私にだつて戀は重いんだもの――。其時の父の怒り!　嫂の憎しみ!　そしてもし、あゝそしてもし此紅い想ひを破られたらば……。

さうした時屹度母樣は何も忘れて私をかばつて下さるだらうに……。あゝ其母樣は冷たい墓に――。斯した惱ましい思ひを私はもう甚麼にしたらう。緣談の出る度に、一層××樣に打ち明けて、すぐにもさうした運びにして頂かうか、せめて此情ない胸の想ひを分けてだけでもいたゞきたい、とそれは幾度思つて見るかは知れないけれど、あゝ大事な最後の試驗を控へた方に、もしそんなお心遣ひの爲に成績が……と思つてはどうして云へよう。

限りなく美しい輝きが遠い向ふに見えるを思へば、幾度暗い雲に閉さ　れと、屹度此手で拂ひ

のける――。けれど、あゝ、ともすれば恐しい魔の手は私の行先を永久にたちふさいで終ふ樣な氣がして……。胸がイラ〳〵する。

「オイ嫂さんが呼んで居る樣だよ」

低い兄の聲にハッとした私は、それが甚麽にか大きな聲で酷く驚かされた樣に喫驚した。「さう」と云つた言葉など震へて居やしなかつたかと思ふ程だつた。

「早くおいで、そんなに心配しなくても大丈夫だよ、思つたより好く行くものだ」と云ひながら兄は急に忘れたものでも思ひ出した樣に何か探し始めた。

私も氣を變へてわざと草履の音をバタ〳〵させながら、何でもない樣な顏をして嫂の呼ぶ方へ行つた。

着物の數を誇つて來た嫂は、急に⌐キや柏屋の來る度に、相應しい柄だといつては私の物を調へる樣になつた。

「お母樣が被在らないから仕度が出來なかつたなんて人に云はれては私が濟みませんから」とさも嫂といふ責任を思つて居るらしく云ひ〳〵して、時には「今度のお緣談は定まればもうすぐにといふんですから今の中に心用意して置きませんとネ」などゝ、もうさうなる事でもある樣に云つたりした。

「私着物なんか鳥渡も欲いと思はないんですもの、それにすぐ變りますから一時に調へたつて……」と惱みある胸は柔かい顏色に包んで、只優しく打ち消すばかりだつた。そしてはそつと嫂の顏色を見て居た。



斯うした日は何日續いたらう。其緣談は何日までも長引いた、長引くのを願つた、さうしていつか破れるのを——。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

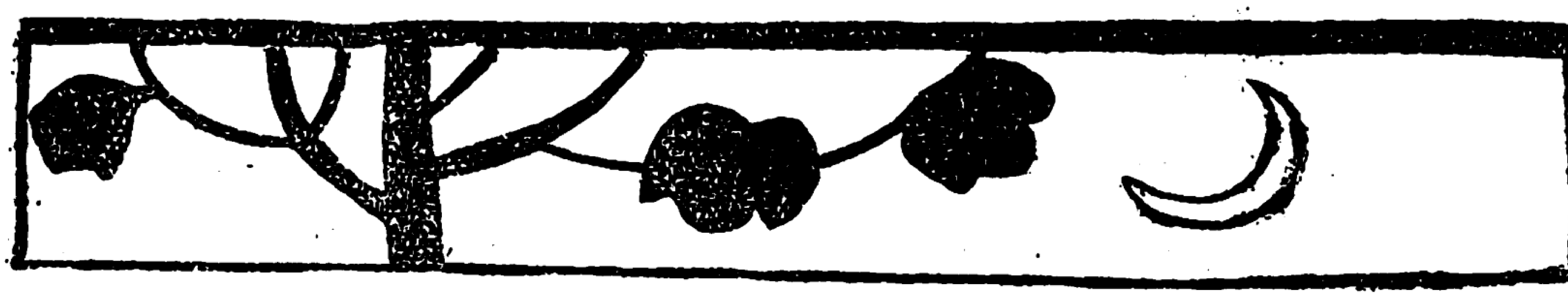
前略、定めし毎日體軀の置き場に困り居らるゝ事と存じ候。暇にまかせて詰らぬ事は考へぬが宜しく候、昨晩いよ〳〵秋本樣が參られ候。
××樣は一昨日御歸省なされ、明日御　上京の筈、月半ばより暫く京都大阪府地方へ御出張の由に候。
呉れ〴〵も取越苦勞は無用に御座候。

胃腸をいためて嫂と二人、避暑客の大方去つた寂しい山の溫泉に殘る暑さを避けて居た或る日こんな打切ら棒の短かい手紙が、しかも大きな封筒に這入つて小兄から來た。

私の胸はまた新らしく大きく波立つた。もうすぐにも歸つて其樣子が知りたくなつた。門閥、財產、こんな言葉に一番耳を傾ける父に、秋本樣は甚麽に云はれたらう。父の心を引くに相應しい肩書、私達にはどうでも好い樣な斯うした資格が欲しい許りに私は情ない思して今まで待つて居たのだもの……などゝ思へばもう堪らなく氣づかはしくなつて、氣持ち好い大きな湯槽に浸つて居ても、涼しい瀧の音を脊にして凝と椽の欄干に倚つて居ても、什麽しても落着いた心持ちにはなつて居られなかつた。

ろくろ細工のおどけた玩具など土產にして、わざと何も知らない樣な顏して歸つた三日目の晩私はまア甚麽に高鳴する胸を凝と落着ながらそつと父の面色を見い〳〵して其緣談を聞たらう。

あゝ私は幸福でした、私は何にも要りません、胸の奧深く秘めた其想ひは誰の手にも開かれずに、あゝ而して長い間の辛い情ない思ひに皆取越苦勞と定まつた其夜。あゝ秋雨のしと〳〵と降つて居た其夜！。私は人知れぬ暗い一室に只泣き倒れました。



水菓子屋の前

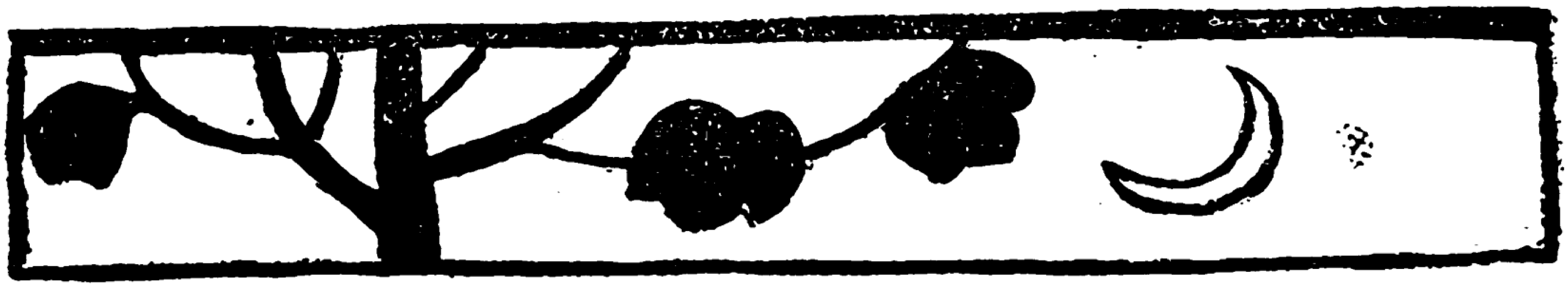
小笠原さだ子

私の室は電車通りに出ようと云ふ或街角の水菓子屋の二階の一室でした。南側は通りに向いた方でスリガラスのはまつた小さな高窓が一ツあるきりで、壁になつて居ます。それから西側のさんのこまかい障子の外は、黒光のするがつしりとした廊下があります。そして其所には二坪か三坪許の中庭がとつてあつて、其庭をはさんで直ぐ隣の高い三階の人造石か何かの薄青色をした壁がたつて居るのです。

明るい光線は一度此薄青色の壁にあたつて、更に其が屈折して、柔らかに青味をふくんだ光となつて、靜に室の中に流れて來るのでした。直接にさす日光と云つては、高窓から朝のうちだけ強い日がさし込む許りで、一體に靜かないかにもおつとりとした物を考へたりするには極く似つかはしい室でした。其光線の具合が私にはひどく氣に適つて好なのでした。

話相手のない時などは、梯子段をつたつて流れてくるリンゴやバナヽやオレンヂなどの熟れた薄紅色の樣な香がかすかに室の中にたゞよつてくる中に、新しい紅裏のかいまきにくるまつて、ウツトリと其香の中に身も心もつかつて居りますと、おかしい程此心が柔らんで來て、なつかしい人の息がかすかに自分の顏にかゝつてゞも居る樣に、わけもなく心が慄えて居るのでした。

其當座の私は無智な墮落な飼猫かなぞの樣に朝から夕方まで、此一室の中に許りごろ〳〵して



微溫湯の中にウト〳〵と眠りに落ちて居る人の樣な安易な空漠な日を送つて居るのでした。それは五月の始めのよく晴れ渡つた或朝でした。

　みづ〳〵しくかすみがちであつた天候も、いつかすつきりと澄み渡つて空は次第に近くなつてくる程濃い色をして居ました。お茶の水の深い土手の櫻は、もえつく樣な新綠の葉が茂つて、土手一面に柔らかな夏草がもえ出して居るのが、高窓から伸び上つてのぞきますとわづかに見えるのでした。

　私は男の出て行つたあとの靜かな淋しさをなつかしがりながら、暫の間、此柔かな心持をくづすまいと、いつ迄もウツトリとして居るのでした。ゴーッと云ふ電車の響が時折かすかに聞えてくる許で、通は至つて靜かでした。

「オーヤオヤ、これだもの、上等となると直ぐいたんで終ふんだからやり切れやしない」

下ではおばさんが一ッ一ッ果物に手を入れて居るらしい氣配がして居ます。

　私は今朝も薄暗な深い所のよく澄み切つた水底に住んでゞも居る樣な、ある冷たい快さと安易さとを總身に感じながら、輕い眠にをそはれて來るのでした。

「いやだア、いやだア、いやだア」

私の眠りかねた氣だるい心の端に不意にかう叫んで居る男の子の聲が響いて來ました。

「あれが欲しいよう！頂戴よう」

「だつてあれを召上ると坊樣のポンポが痛くなりますよ」

「いやだア、いやだア、欲しいよう欲しいよ」

未だ年の行かぬ少女らしい聲と子供の聲とは靜かに凪いだ私の心に涼風の樣に輕くあたつてくるのです。私はふと其にさそはれる樣になつて、自然と身を起すと窓際に行くのでした。そしてガラス戸を半分程あけると、目の下のよく日の照つた明るい街を見下しました。

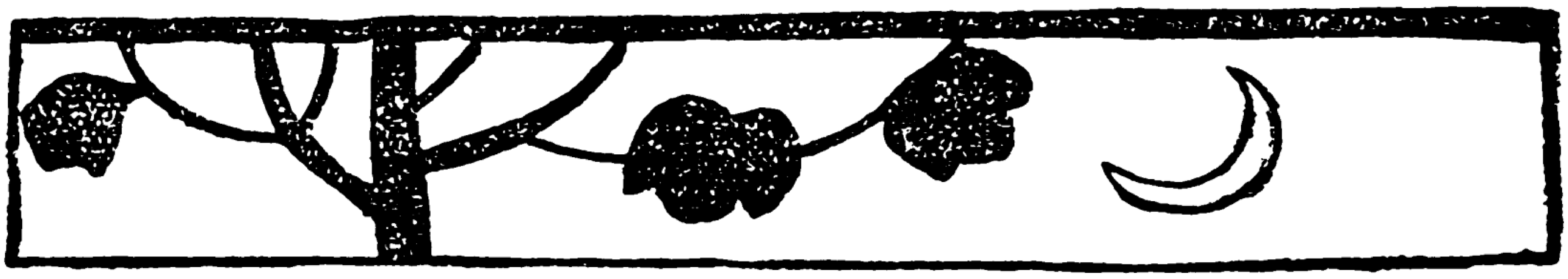
「ね、そら先程、お母樣がおつしやツたでせう、あれを召上るとまたポンポが痛くなつてもう何處にも行かれなくなりますつて……ね覺えて入らつしやるでせう、まアおりかうな坊ちやまね」

から云つて子供をなだめて居るのは十四五の赤い猫毛らしい髮の毛を小さく束髮にした色白の女中でした。子供の方は目と口の大きい弱々しく見える五ツ位の男の子で、ジッと物欲しさうに私の家の店先を眺めて居るのでした。店には丁度雛段の樣にだん〳〵になつて居て、其所には鬱金色をした蜜柑や、薄紅や、眞紅や、紫紅色の寶玉の樣にかゞやいたリンゴや、高い香のバナ、や、薄ものを着たオレンヂなどが數へ切れぬ程うづ高く並べられてあるのです。そして軒下には舟の形や、蟲籠の形を細工した小籠に、可愛らしい星の樣なキンカンが入つて、そして赤や、青や、黄の短冊がヒラ〳〵と廻つて居るのです。子供の物てのみの強い瞳は、其濃い色彩にすつかり引き入れられて終つたのでせう。

「ね、お母樣がおつしやいましたね、決して召上つちや否けませんつて、ね、お解りですわね、ほんとうにおりかうな坊ちやまね、さ、あちらに參りませう」

子供は女中に手を引つぱられると今迄得心の行つた樣にうなづいて居たのが、急にまた耐らなく欲しさうな色が、瞳の中に浮んでくるのでした。

「ウヽン買つて頂戴、とめ!、よう買つて……ウヽン否だア」



子供は其薄い皮に齒を喰ひ入れた時、甘酸い何とも云はれぬ強い香と共に舌をさす其汁の味を思ふと、どうしても我慢が出來なくなつてくるのです。

店先を離れようとする女中の手を振り切ると、いきなりつか〳〵と店先にかけよるのでした。

「まア！　仕樣のない方ですね」

女中は不意を打たれてうろたへて、子供の腕をしつかりとつかみました。

「痛い！」

子供は後に引戻された口惜さに、かう大業に叫ぶと、今度はワーッと云つて泣き出しました。

「馬鹿、とめの馬鹿、馬鹿ア」

泣聲にかう云ひながら、女中の手にしがみつくのでした。

「オヽ痛い！、ひどい坊ちやん」

女中は引かゝれた手を口にあてゝ身を引きましたが思ひ返したらしく、顏には忠實らしい笑が上つて來ました。

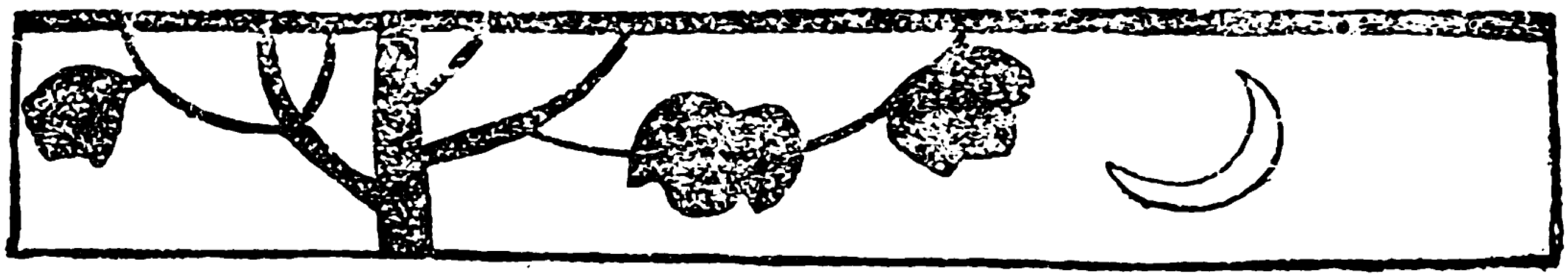
「坊ちやんのお手が痛かつた御免して下さいね、そらとめの手は坊ちやまに引かゝれてこんなに赤くなつて……ね、ですからもうかんにんして下さいね、坊ちやまはきついんですとも、もうとめは適ひやいたしません、降下、降下、陸軍大將でしたものね、坊ちやまは」

女中は此拍子、子供を連れて行かうとすばしこく手を取つて歩き出しました。

「ウヽン否だい、あれ買つて、買つてよう」

「だつてあれは駄目ですつたら、あれを食べると死にますよ」

「否だい、否だい、買つて……とめ、あの籠買つて――」
「だつてお母様がいけないとおつしやつたぢやありませんか」
「ウヽン、否だア、否だア」
子供は日光にほてつてボク／＼と砂の浮いた地べたにしやがんで、體を振りながら駄々を云ひ出しました。涙のたまつた其目は絶えず店先に引き入れられそうになります。弱々しく可愛らしい其瞳には、熱心な強い或る欲望に恐しく力をもつて來ました。今の子供の體の中には、頭の先から足のつまさき迄も只あの黄金に光つた甘酸い露を、一杯にふくんだ木の實をむさぼり食べたいと云ふ欲求の外は、全く何もないのです。此世の上に何程の重大な大變な事が起つて來ようとも、此子供の心持には薄い影さへ落す事は出來ないでせう。
「まア何と云ふしつこい坊ちやまだらう」
じつと子供の様子をあきれた様に眺めて居る女中の目は、こんな事を語つてます。
「欲しいよう……よう……よう」
子供は「よう」にだん／＼をつけて力をつよめて叫んで居る。今日に限つて何故とめは意地固く買つてはくれないのだらうと云ふ心をふくませて。
「眞實に聞わけのない方ねッ、あなたは今ポンポがわるいんでせう、あれを食べるとお腹が眞中から割れて死んで終ひますよ」
「ウヽン、うそだい、うそだい、割れるもんか、馬鹿！」
「うそでも何でも今日はあれは上げられませんよッ」



「ウヽヽヽワッ」
子供は喉がやぶれそうな叫聲をして泣き出しました。
「さゝ仕樣のない方ね、もう私は知りません」
つんぼになりそうな泣聲と、店先に意地惡そうなおばさんにじつと見て居られる極りわるさとに、女中はもう顔を火の樣に赤くしてます、まめ〳〵しくやさし味のあつた頰は、苛立つてくる心にかすかに慄えて居ます。
「外の人が笑つて居るぢやあゝませんか、さお泣き止みなさいましよ、ね御母樣の處に行つてお聞きしませう、好いとおつしやつたら買つて上げますからね」
女中は近所の店先の小僧などが面白そうに眺めて居るのを見ると、恥かしさにカッと上氣して來ました。でかう云ふといきなり後から小供の體を抱き上げました。
「否だア、否だア」
こう云ふ小供の聲を殘して、女中は急いで街角を曲つて行きました。私はぼんやりと窓に頰杖をつきながら、未だ子供の叫聲のたゞよつて居る樣な、明るい其邊の路上を見つめて居りますと
「たつた二錢か三錢ですもの、買つてやつたら好さそうなものぢやありませんか、ねえ貴方」
卑しそうに云つて居るのは下のおばさんです、久らくするとバタ〳〵と馳けてくる子供がありますので、ふと見ると前の男の子なのです。
「坊ちやんいけません、いけません」
女中はかう叫びながらおひかけて來るのでした。

私は子供の強い食慾と、其執着心の強いのに驚かされまして、思はず瞳を見はつて眺めるのでした。女中の顔も、子供の顔も、互にはげしい憎嫌にすつかり尖つたみにくい表情に變つて居るのです、女中は荒々しく子供の腕をしつかりつかみながら、

「意地でも買つて上げないから、そう思つて入らつしやい。幾度も〳〵云つてますのにわけのわからない人ですね、何んだつてから聞きわけのないのでせう！」

女中はぐん〳〵子供の體を引ずつて行くのでした。

「痛い、痛いよッ、馬鹿、畜生！、母さんにそう云つてやるぞ、幾つも〳〵僕をぶつたつて、云ひつけてやるからい丶やい」

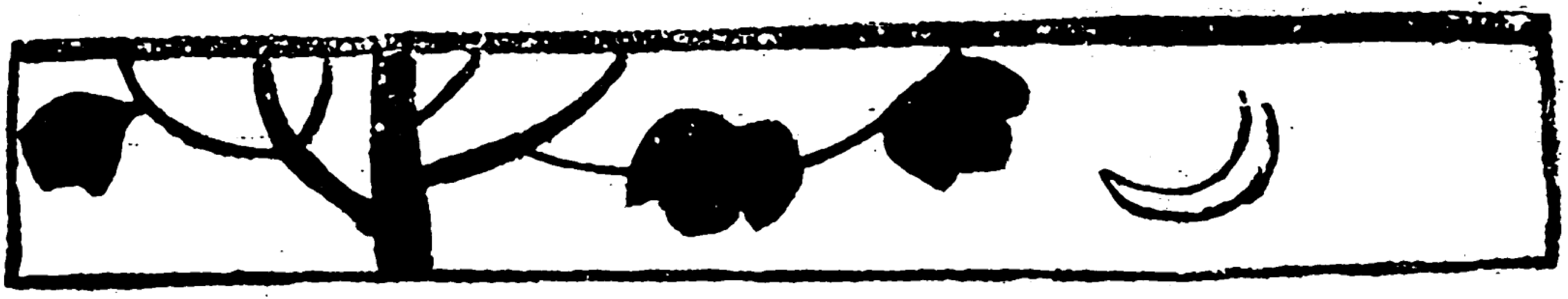
「いつ私がぶちました、え、いつ貴方をぶちました、そんなうそつきこそお巡さんに云ひつけてやります」

「ウ丶ン、否だア、否だア、痛いよう」

子供はいかに全身の力を込めて女中の手から逃がれようとしても駄目でした、二三間ずる〳〵と引づられて行きましたが、いきなり自分の顔を女中の丸々した手にもつて行くと、力一杯喰つくのでした。

「アッ」女中はかう叫ぶと　子供を思はずつき飛ばして、そして恐しい憤怒を目に表はして、小供を睨むのでした。

「さア食べるのなら食べてごらんなさい、さア、さア」と云つて太い其握り拳を子供の顔につきつけるのでした。



「馬鹿、畜生！」子供はこんな事を泣いじやくりの間々に叫びながら、女中の手を引つかいて居ます。

「たんとそんな事をなさいましよ！　貴方になんぞ負ける私ぢやありませんよッ」

女中にはもう相手が子供であると云ふ事は忘れて終つて居るのです、いきなり子供の體を横にかゝへるとさつさと歩き出しました。

子供は涙によごれた汚い顔を地につきそうに引つくり返つて顔を眞赤にして「否だア、否だア」をくり返しながら、兩足を出來るだけバタ／＼さして居ます。然かし今度は女中が勝を奏したらしく、街角を曲つて行きました。

私は二人の姿が目の前から取りのけられると、輕い疲れを覺えて、深い吐息を洩すのでした。そして靜かに座に返つて、じつと目をつぶりますと、色々な深い意味を私は今の二人から受取つた様に、心持が知らぬ間にすつかり充滿して來て居るのを感じました。私の體は自然と今の子供の體の中を流れて居る強い熱を感じて居たのでした。

私は久らくの間、子供の叫聲を耳に聞きながら、此空々とした中に、尊い自分の魂をくさらして行くのを思つて戰慄しました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊



溫泉に行く路

粒木つね

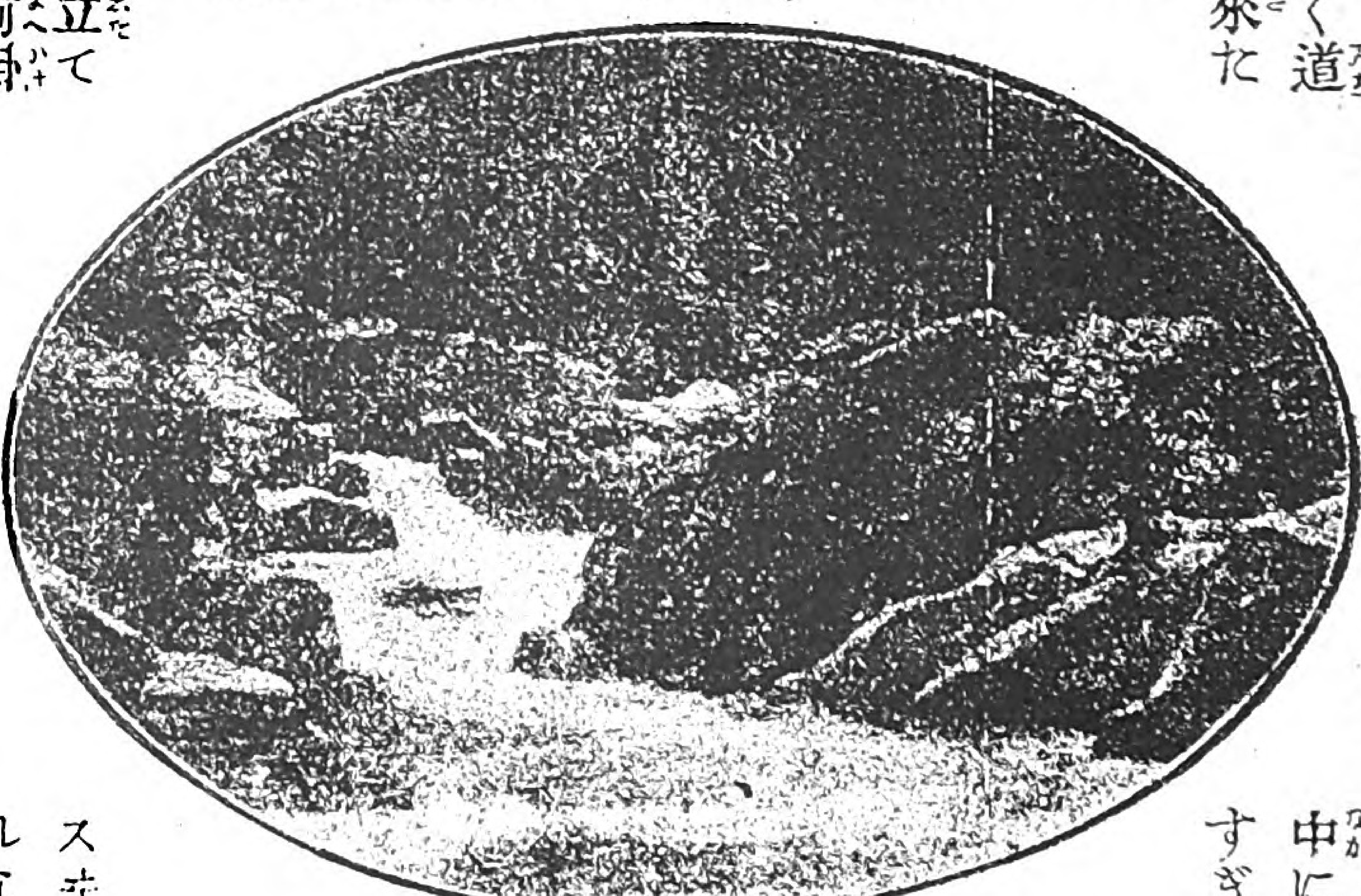
湯氣ゝ渦巻いた薄暗い冷い黎明の浴場に崖に向いた高窓の杉の梢を透けて朝日が虹の様に吹込んだ時、灰濁に疲れ曇つた頭腦に山の湯!!といふ喜びが震へる様な嬉しさが瞭然映つた。湯のはねる音や子供等の戯ける聲や賑かな心地よい騷々しさに包まれ乍ら深々と青んだ湯に體を沈めて、黒ずんだ疲勞に強張つて了つてる我が肌を撫勞つてると、丁度夢の様な昨夜の道中の面白さが快く解れて浮んで來る。

……山腹に包まれた不思議な靜寂の中を螺旋狀に登て行く。右手の山陰に風鳴が凄まじい。仰ぐと高い絶壁の頂に新緑の山毛の木立が毛髮の様にはゝたゝ〱と揉れてる左手の深い澤にも綠の浪が大まゝかゝにゆれて廣い盆地へ續いてなだれて行く。青い〱盆地に白い雨雲が濃く薄く下り込めてる。入際に一時パツと溺れた濃い夕陽が苺の汁でも搾りかけた様に濃く薄く美しく雲を染めた。

雲はだん〱白けて暗くなつて來た。山を一廻りする毎に其處に思ひ掛けない小村落を見た。息もつけない様な山間にまだ灯もつけず凝と薄墨色の夕暮に浸つてるもの悲しい村落、すぐ目につき易い高みには必と小さな小學校の白壁が淋しい沈默に暮殘つてゐた。道連の先生達は二人三人と別れて行つた。取殘された様な暗い小村に歸つて行つた男達の――嘗てはその時代〱の青年達の若い心をそゝつたであらう。あの幼稚な色合、舊式な型のオバコートや二重廻が悲しく眼に殘つた。

峠の中の茶屋はもう閉めてあつた。固く閉した蔀から灯一筋もれない。新竹を渡し

た掛樋の水が冷く高く響を立てる。その傍に唯一本の櫻が微白くぼんやり咲いて居た。日陰裏といふ長い絶壁の下に入ると雪崩の形見の雪が白く道を遮つてる。雪と一所にずり落ちて來た崖土が小山をなして横はつてる。私は一足々々寒い暗い世界へはいつて行くのを感せずには居られなかつた――××の船場迄、梨の白い花と紅い桃青白い李とそして明い新緑と、柔な甘たるい色彩が霖雨の中に滲んで見える。明いスヰートな村々を腕車にゆられ乍ら私の胸は、溫泉へ――といふ如何に樂しい物懷しい想に充されてあつたか。ゆつたり水量增した最上川の川緣に柔な長雨に黑く腐れかゝつた樣な茅屋根を低く並べてゐた小な驛場、ぬれて立つてる高い警邏の下の小茶屋に仰山な笑聲立てて旅の若い男と戯けてる小婢の朱い前掛の紐――、柔な川緣の土砂がボク／＼無氣味に缺頽れてる、そのすぐ下に蓆帆を張つたまゝ荷船が一ツ休息んでゐる。ぬれた苫の小窓に後向に腰かけて若い男が浪花節らしい手薄い端本を一心に讀んでゐる。小雨の中にそれを見下し乍ら、私は約束の時間がすぎてもまだ顔見せないK氏とT氏をじれじれして待つてゐた。霧雨がサアと濃く薄く河面を渡ると對岸のゆるやかな綠草も美しい粘土層も灰色の浪も夢の樣に薄れる、粗造な渡船の動搖につれて其の綠、黃、赤、白の鮮な平穩な曲線が或る微妙な複雑な旋律を起して眼に輕い眩暈と疲れを感じさせる――あの心持が忘れかねる。あゝした柔な暖な世界からはもう百里も千里も遠つて來た樣な氣がする、陰鬱な冬が迫はれ潜んでる北の果の國へでも送り込まれた樣な――あのスヰートな時に續く同じ日のうちとも思はれない。どこまで無頓着な無責任な男達が今日はあまり遲くなつたからとて私一人をあの詫しい雨の驛場に宿めて置去らうとするのを無理矢理强情に



溪流淙淙

ついて來たのだが……。

私はお父樣とも云ひたい年配のK氏と道々聲高に話續けて來たのだがだん〳〵語少になつて何時の間にかお互暗い沈默に落ちてゐた。年若なT氏は拗ねた樣に一人數歩前をドッシ〳〵と行く。私は其の後姿――肉付の逞しい肩の邊を眺め乍ら歩いた。みづ〳〵しい、若い男の、若々しい力づよい體格がかうしたたよりなげな淋しい背景に一層懷しく尊く見えた。

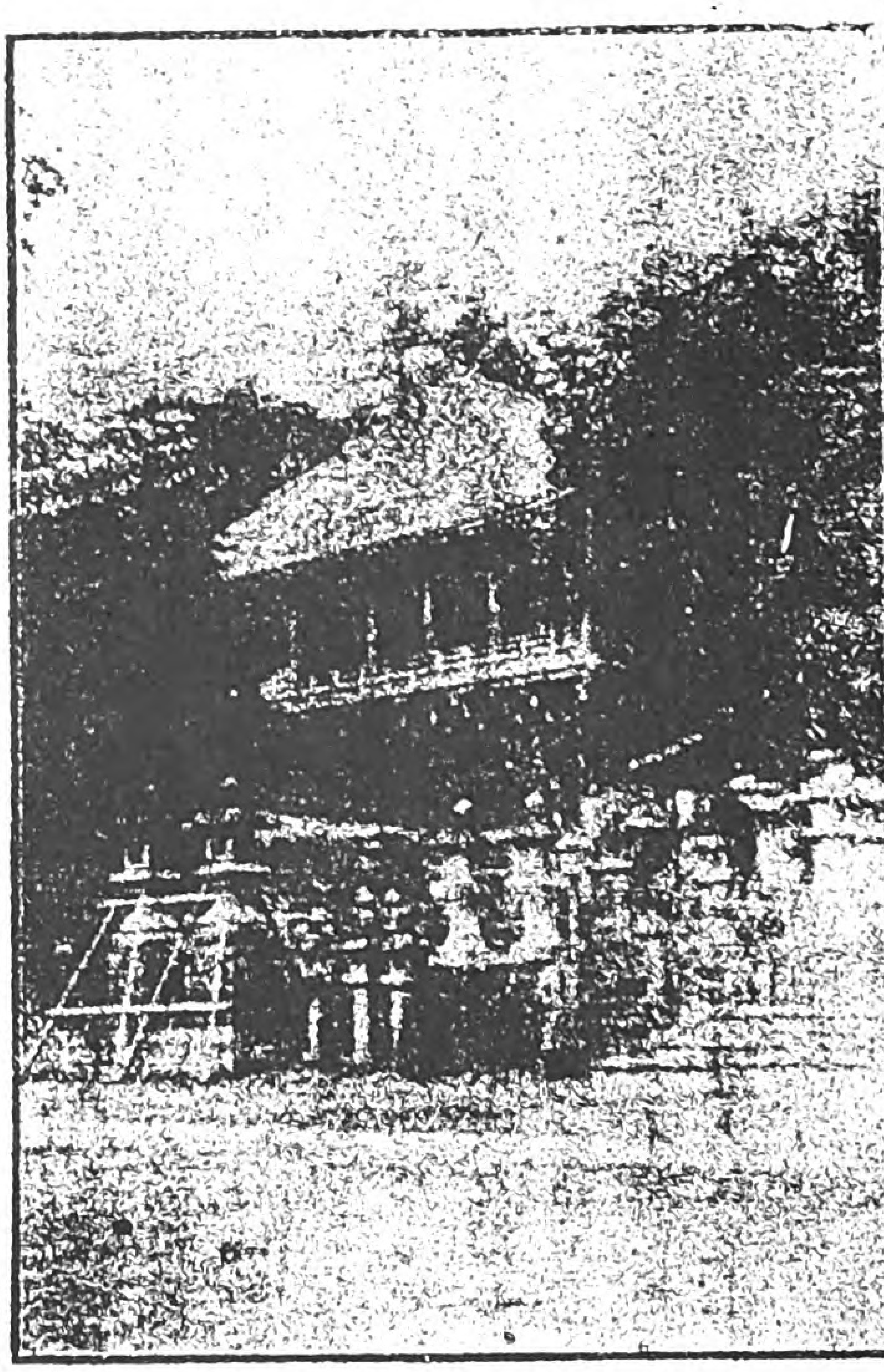
廣い高原に出た。そこはまだ微明みが何所ともなく展がつて見遙かす浪の紆の樣な小丘々々は一面茶褐色の枯萱と枯芝を被つて冷い薄墨色の夕暮ににじんでゐる、高原を廻つて傾く沈んだ遠い連山の眞黒な鋸齒の樣な峯間から眞黒な怖ろしい雲が幾つも〳〵生出て風にちぎられては頭上に展つて來る。道はとこ迄も一直線で平坦である。息もつけぬ樣な激しい風が方向も定めず吹き襲つて、立木一本ない廣い〳〵中をトボ〳〵歩いて行く小つぽけな輕い身一つが不安で堪らない。

「先刻見たある臺地を歩いてるのですよ」K氏は敎へて呉れる、下の澤合から仰望んだ灰色の雲の海に長く〳〵突出てゐた波止場の樣なあの臺地――臺地――高原――とそゝられる樣に心は叫ぶ。ヒヨロ高いK氏の背後に風をよけて俯き乍ら歩いて行く我眼に我が魂に荒涼たる高原の暮色がひし〳〵と滲んで來る。不圖地底から漏れて來る樣な灯影を見付けた。それは路傍の小な盆地に草屋根を伏せた救助小屋であつた。トントンと穴の樣な入口に下て行つた私達の姿が眼ざめる樣な赤い賑な焚火に照出された。盛な火は狹い小屋一ぱい低い天井に燃付きそうである。私達は草鞋の足を爐に踏込んで暖り乍ら大きな眞黒な湯釜から湯を汲んでいくらも〳〵飮んだ。私は赤い火や乳色した柔な煙を透して部屋の樣子や人々の顏を見てゐた。新庄家中言葉で頻と雪路に湯治客の危難を救つた功名話をする年寄夫婦の由緒ありげな面立――祖父祖母の肩にもたれて眠そうな眼して人々の話きいてる小な男の子――、風は遠鳴になつてか、小屋はミシとも云はぬが悲鳴の樣な谷鳴が遠く微かに聞える、丁度物語に讀んだ北歐の冬の旅に山中の獵師の小家にでも休んだ樣な按排。此家は行人の便宜に郡補助で設けてあるのだそうな。粗末だが宿る事も出來る、宿つたら？と人々が達て勸めたが行く所までは……と斷然云ふ。息子であらう若者が溫泉町には序もあるからとて松明もつて案内に立つてくれた。賑かな暖い世界から不意に戸外に出ると

寒さ暗さが一しほである、雪に折りしかれた枯萱の上を渡て行く、一足踏しめる毎ジ、と冷い雪消水が草鞋の上に泌込で來る。枯萱が盡ると泥、トロ〳〵火に光つた眞黒な泥が踝まで淖つてズル〳〵辷る心地惡さ不安さ、右側の一段高い所へ登つた。そこは雪である、が此方がずつと歩きいゝ、

私は松明のすぐ後から、ヒューと風に煽られて花片の様な美しい火花が白い雪に我が裾に前髪に吹付ける、私は長い袂を額にかざしてそれをよけ乍ら進んだ。前後から守れて「足元に注意して〳〵」を繰返されるので丁度長い暗坑を手を牽いて連れて行かれる様、窮屈で堪らない。明滅する松明に照出されて左右からチラ〳〵と太い眞黒な幹並が眼に入つて來る。道は降りになつた。澤合の林を行くのらしい。長い松明の一本目はもう盡きそうになつた。別の新しいのに火を移して舊いのこりを遠く投げる、丸い樹葉の集りを夢の様に浮し乍ら長く尾を引いて灯は深い谷底へと消えて行つた。

此の南崖は一番早くうどの萌える所さだの、此邊にすいゝめじの生へる木がある筈だなど、手探でも行ける程此山に馴れて仕舞つてるK氏は殿から若者に話かける。山の青物採りの話だ。山間の小學校教員のみじめな生活が思ひやられる――K氏は今行く溫泉町の校長T氏はその部下である――。松明が煤食ふと若者は大きく振り〳〵する、と風を得て火は一時にパッと勢づいて來る又燃過ぎそうだと道邊の雪に濕し〳〵行く。鼻の先の若者の脊のかますの中で時々鶏がバサ〳〵羽根すりつけてク、と鳴く。明朝には湯町の市に曝されるのだらう――。密と上を仰ぐと化物の手をひろげた様に樹葉が黒く重合つて被ふてゐる。



奈良二月堂

廣場に放たれた――何となくさう感じたので見廻したとたん滅えさうに細つた火に乘じて微青い薄明が身邊に忍寄て來た。廣い〳〵雪野である。微青くいて付いた雪野――夢の中を行く樣な――太い曲つた裸木が二本三本づゝ路傍に立つてゐる、その骨々しい枝に青い磨きぬいた鎌月が斜に引懸てゐる。影の樣な雲が後から〳〵と一ッ〳〵近寄て來てその面に掛ると、すぐ涙ぐんだ樣に青ざめて再暗い空に影の樣に消え果る。赤味がゝつた星が五ッ六ッばら〳〵と廣い空に滲んでゐた。松明が燃盛ると月も雪も吸込まるゝ樣に影を消す、火が弱つて來ると再、微かに繪絹の樣な野と空と浮上つて來る。

私は不意に滓つた、落ちましたかと前後の三人は同時に叫んだ。私はその聲に驚かされた。股迄はまつた、片足は雪下の河の樣な深い雲消水に浸された。氷解期の湖上でも渡る樣な――私は急に怖氣づいた。

「あれ――あれが鑛山の灯です」K氏は指した。何の灯だらう?――眞黑な宙に青い光澤のない灯が唯一つ見えてる。鑛山の灯!!……。其處から道は急に下る。雪もずつと手薄くなる。やがて角々しい固い地面に足裏がついた。「もう岩石にかゝりました」案内者が云つた。氣を付けて下さいと繰返し乍ら、右方を振照し振照し左側の崖にひつたり寄そうて行く。何かしら暗がりから柔な若葉が頬をなでる。芳烈な懷しい若葉の匂が泌みる樣に鼻を打つ。不意にふんはりした世界に入つた樣で嬉しさに胸がときめく。前行く人のうじなを踏損ひそうな急な坂道、「轉んだら最後命がないぞッ」K氏は劫やかす樣に云つて物凄い事を說出す。唯眞暗に見える右手の谷は名にし負ふ××淵の險所又絕景でつひ先の日も鑛山から夜逃げして來た坑夫が過つて轉落ちて死んだのだといふ。私はゾッとした、眼に見えぬだけ一層不安だ怖しい、足下遠くゴー〳〵ザアといふ水の音が胸を打つ。

一曲すると不意に足下に赤い灯が一ッ見え出した。續いて二ッ三ッ五ッ――澤合遠く茂つた樹木を透して賑な溫泉町の灯が花の樣に美しく明滅する……、あゝあゝ此の樂しい嬉しいときめき!!、私は子供の樣に馳け出したくなつた。吹き上げる谷風に、夢の樣に流れて來るどよめき――その中にあれ細い節面白い按摩の笛が聞える……。

いつの間にか幅廣く寛かになつた道は高い建物の間へ入つて行く。

地震の上の生活

長曾我部　菊

一　取れざる目隱し

農夫の收穫の豐凶は其の種蒔きの日から鎌を加へる日までの時を俟つのでなければ、どうして正確なる精算を得る事が出來よう。人間の生存の收穫も其の生れた日から死の最後の日までの時を經ないでは、其の豐年と凶作とを知る術はない、それは已に自明の理である。

私の此の生命、此の小かな生活が凶作か豐年であるかは、今の私の此の心で知らうとする事は、絶對に許される理由がない。生より死までをまつて、然して第三者の判斷によつて、其收穫は計られるのであらう。

既に凶作とも豐年とも知る事が出來ないのが、人間の生存の理であるとすれば、私達はまた振り出しの生からあがりの死まで豐凶に念をたつて歩いて行くより外はない。寧ろ豐凶を念にして進む事は、眞に眞摯な勇敢な心とは思はれない。

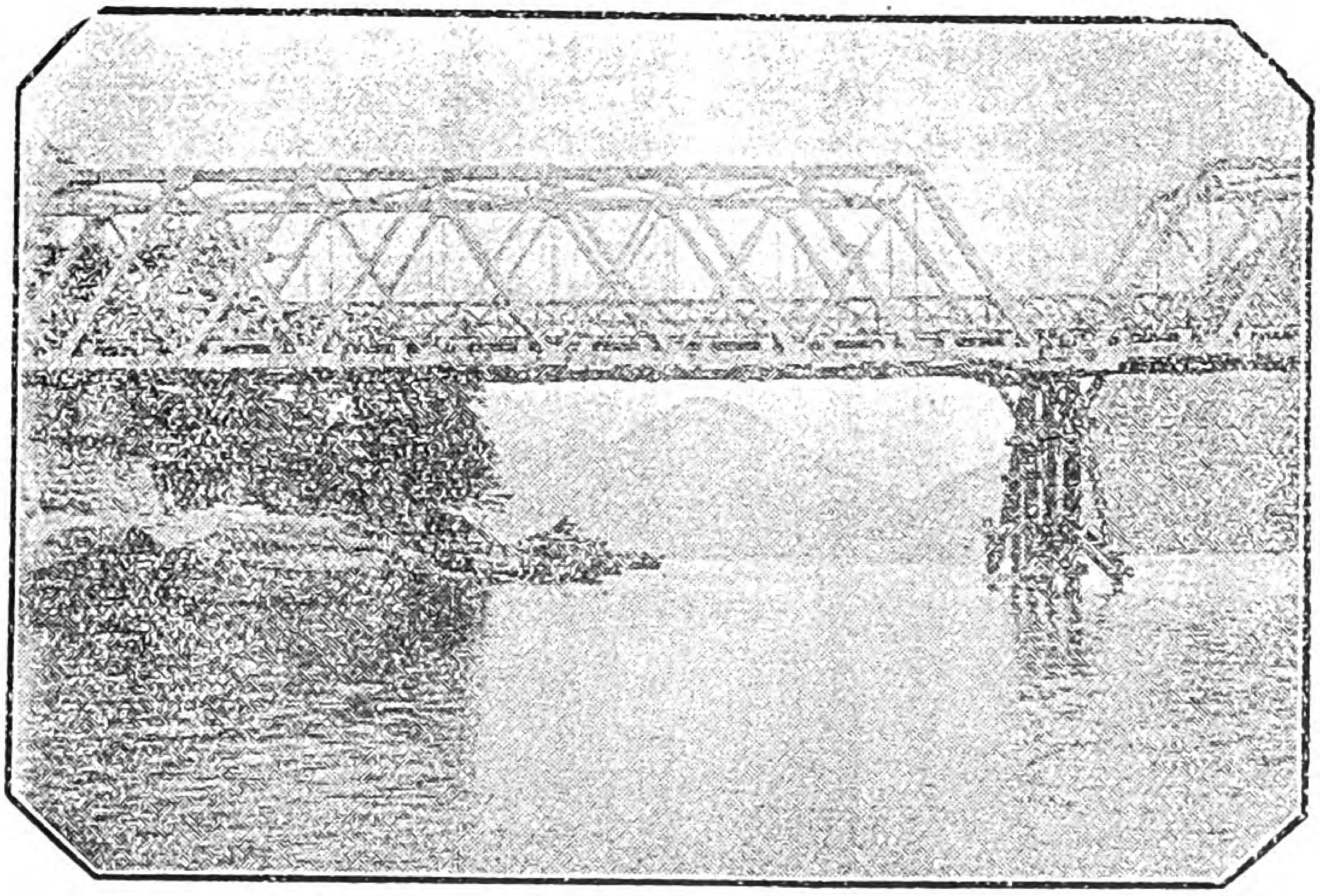
然し私たちの心はどうかすると、自分の生存中に於いて、自分の生存の豐年か凶作かを知りたがらうとしてならない心持がある。豐年をこひねがふ心に狩り立てられて、新奇蒔き直しをしたくなる事が多い。

然れども私達は是れを知らねばならない。新奇蒔き直しのそれが眞に自己の豐凶の見える明確な信念の眼によつてなされるのならばいゝ、然し私たちは絶對にさう云ふ事には、永久に取れざる目隱しをされて居る人間の悲哀は其の永久に取れざる目隱くしの裏に包まれてある。それとゝもに人間の神秘は同時に其の目隱くしの陰に生れるであらう。すでに目隱しがあり、

其れが永久に取れざる目隠しであるとするならば、私たちの生存上の收穫の凶と豐とは私の自己の外の問題ではあるまいか。

私たちは自分に對して自己の内の問題に勞する職責はあるが、自己の外の問題には何等の責任がない。

私達はたゞ出來る限り、豐年たるべき條件に對つて、自分の力のすべてをなげかけて、思ひ入つた態度で生きてゆくより外道はない、私達はつねに自己の外に勞せず、自己の内に生きて行きたいものである。


橋下の山影

二　地震の上の争ひ

私の心は今惑亂した後の疲れた獸物のやうな自分をじつと眺めてゐる。燒けた地の上に放り出された魚が集つた蟻に螫されるやうな、その自分をじつと見て震へて居る。

身のまはりには雨の多い季節のむし〳〵する暑い空氣が濁り流れる。がり〳〵と頭蓋骨をすりへらずやうな痛さが襲ふて來る。

其の時身のまはりの腐敗しかけたやうな空氣がぶる〳〵とふるえるやうなのを感じた。暑い空氣がふるえる。部屋の器物が浮いて流れ出しさうに思はれる。まるで地震の核心になつて、此の身體が獨樂のやうに狂ひ廻るのを感じた。

私達は私達の足が着いてゐる土地の震ひ動く事にさへ、しどろもどろになつて了ふ。然るに、私達の身體

は地上の地震に足を着けてゐるばかりではないのだ。より恐ろしい肉の地震の上に此の心の根を着けて生きて居る。私たちの生命は地震の上に咲いてゐる花のやうな者である。此の地震の上の生活を一刻と雖も忘れる事が出來ない。私は私の周圍の人々を見て、その人達が自らの肉の地震に極端に無頓着であるのを見て不思議でなくなる、私は終日終夜、地震の裡にあはれに震へて自分と自分の爭ひに死につゝある。

あゝ此の苦痛を逃れる刹那がほしい。

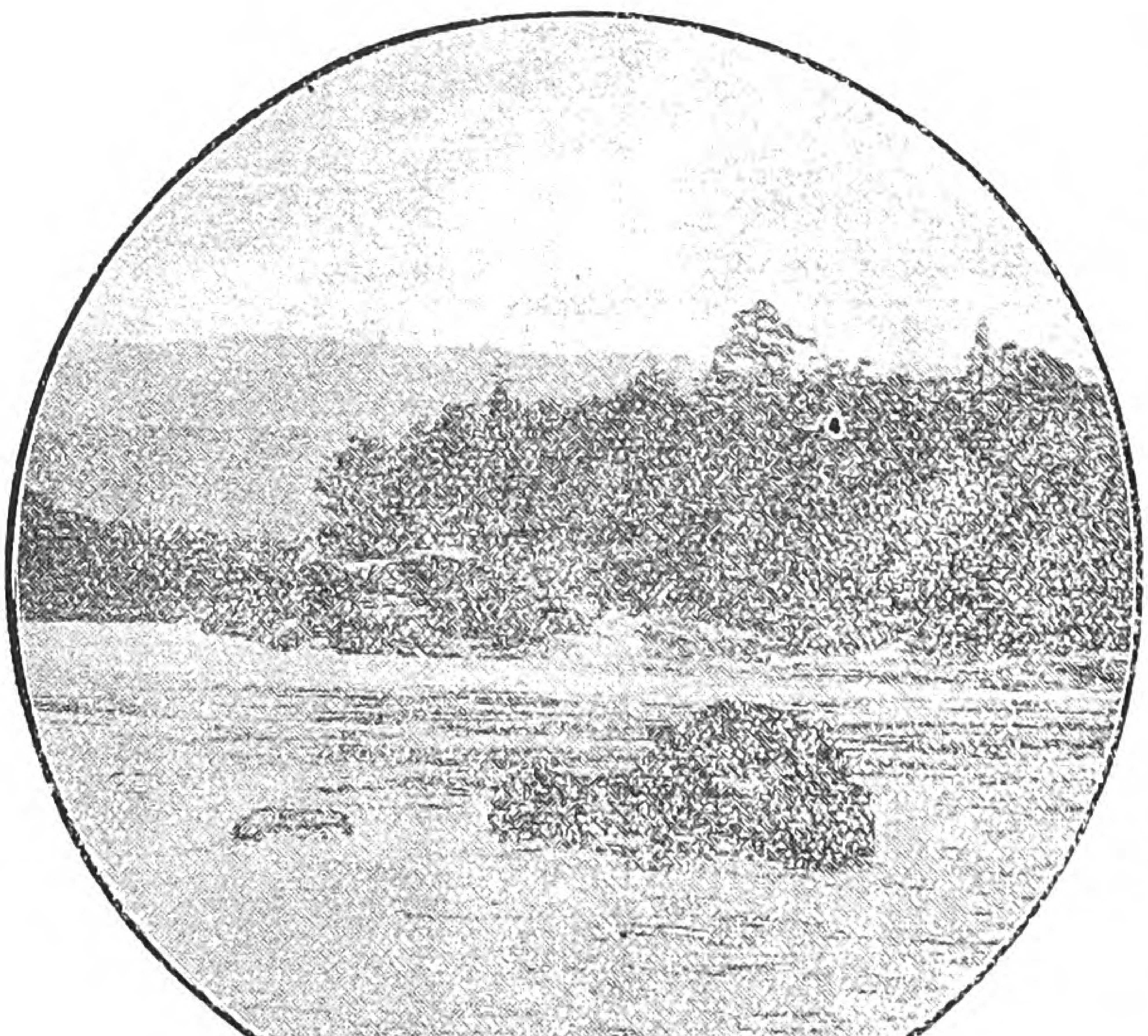
三　ふるさとの桔梗の花

曉の三時過ぎに目を覺ました。瓦斯のマントルを充分に燃して、水晶色の鋭い光が部屋に充ちた中にひたつて、火の響の嵐のやうなのを耳に聞いて、ペンを手にとつた。ペンには曉の私の生命が黑く小さな文字になつてゆくのであつた。

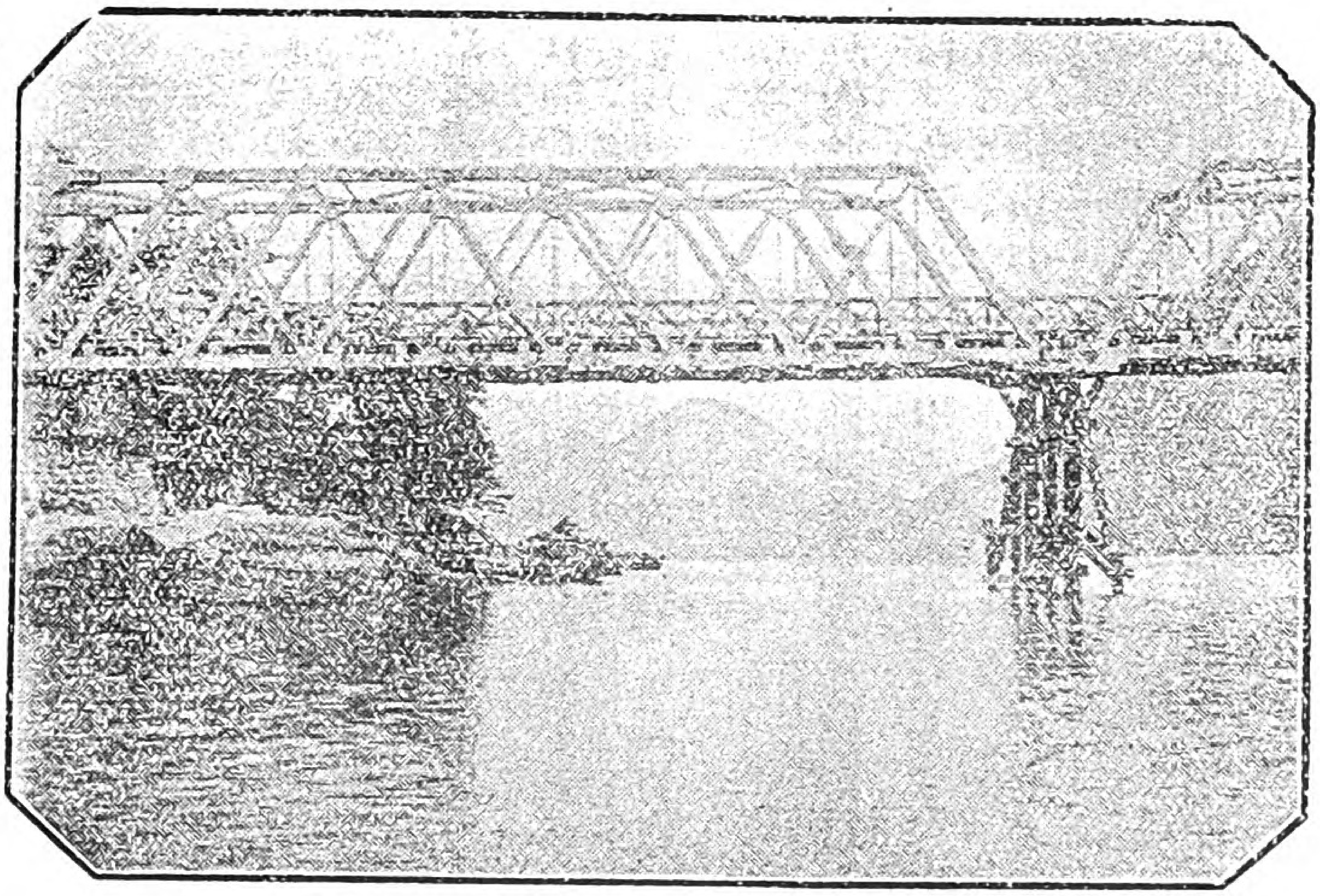
昨夜少し過した酒のために例の私の心は、赤く實の彈けたざくろのやうになつて見える。手もつけられない程感傷深くなり、眼も覺めなかつた心で已に泣いて居つた。

眼がはつきりと覺めて、火の響に心が動かうとしはじめた尖端に、愛された事のない私だつたがと私はつぶやいた。

誰れ一人にも愛された事のない私だつたのであるが私はそれ程に寂しい道を歩いて來たのではあつたが、



静かなる流



橋下の山影

其れが永久に取れざる目隠しであるとするならば、私たちの生存上の收穫の凶と豊とは私の自己の外の問題ではあるまいか。

私たちは自分に對して自己の內の問題に勞する職責はあるが、自己の外の問題には何等の責任がない。

私達はたゞ出來る限り、豐年たるべき條件に對つて、自分の力のすべてをなげかけて、思ひ入つた態度で生きてゆくより外道はない、私達はつねに自己の外に勞せず、自己の內に生きて行きたいものである。

二　地震の上の爭ひ

私の心は今惑亂した後の疲れた獸物のやうな自分をじつと眺めてゐる。燒けた地の上に放り出された魚が集つた蟻に螫されるやうな、その自分をじつと見て震へて居る。

身のまはりには雨の多い季節のむし〳〵する暑い空氣が濁り流れる。がり〳〵と頭蓋骨をすりへらすやうな痛さが襲ふて來る。

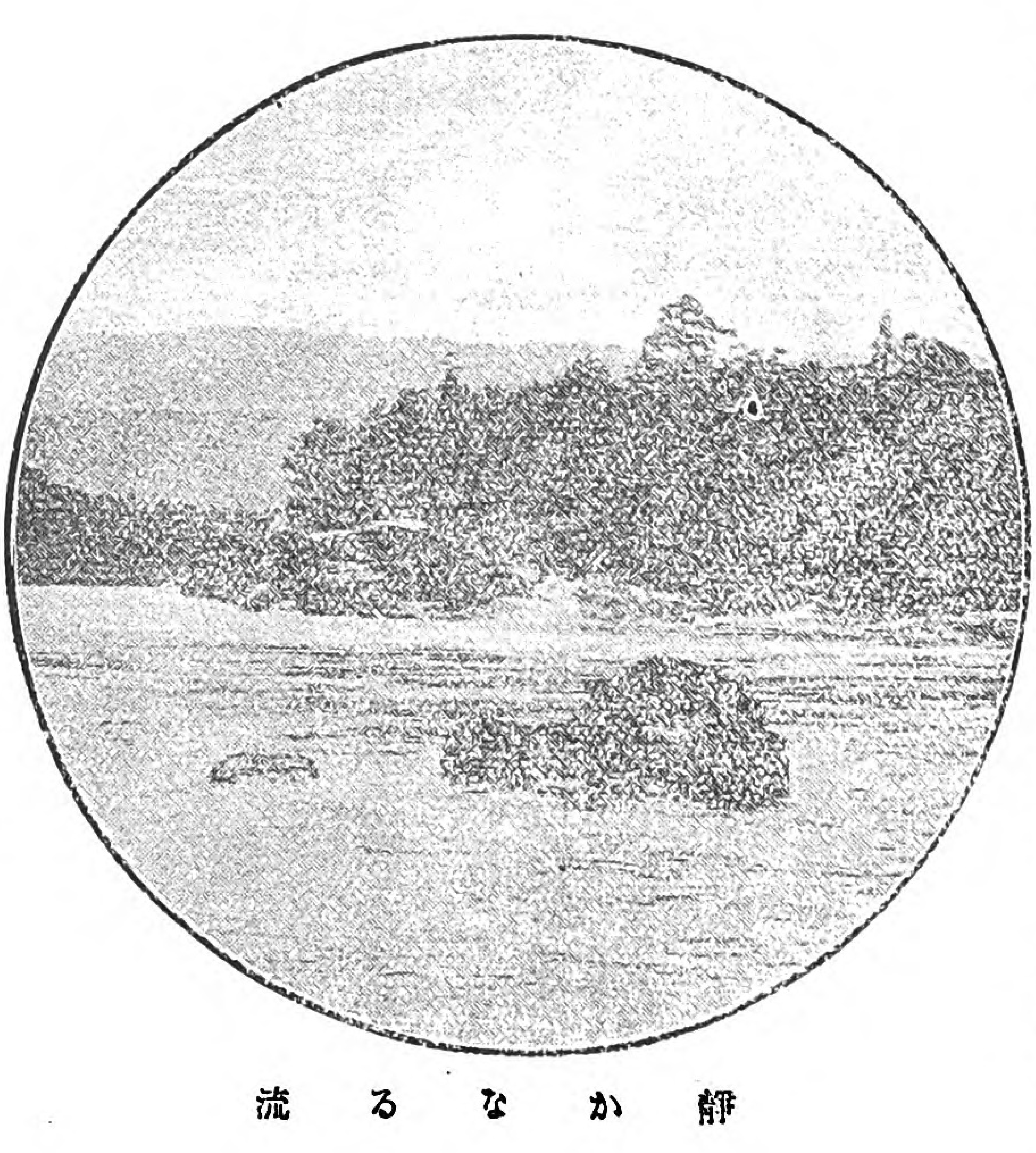
其の時身のまはりの腐敗しかけたやうな空氣がぶるぶるとふるえるやうなのを感じた。暑い空氣がふるえる。部屋の器物が浮いて流れ出しさうに思はれる。まるで地震の核心になつて、此の身體が獨樂のやうに狂ひ廻るのを感じた。

私達は私達の足が着いてゐる土地の震ひ動く事にさへ、しどろもどろになつて了ふ。然るに、私達の身體

は地上の地震に足を着けてゐるばかりではないのだ。より恐ろしい肉の地震の上に此の心の根を着けて生きて居る。私たちの生命は地震の上に咲いてゐる花のやうな者である。此の地震の上の生活を一刻と雖も忘れる事が出來ない。私は私の周圍の人々を見て、その人達が自らの肉の地震に極端に無頓着であるのを見て不思議でなくなる、私は終日終夜、地震の裡にあはれに震へて自分と自分の爭ひに死につゝある。
あゝ此の苦痛を逃れる刹那がほしい。

三　ふるさとの桔梗の花

曉の三時過ぎに目を覺ました。瓦斯のマントルを充分に燃して、水晶色の鋭い光が部屋に充ちた中にひたつて、火の響の嵐のやうなのを耳に聞いて、ペンを手にとつた。ペンには曉の私の生命が黒く小さな文字になつてゆくのであつた。
昨夜少し過した酒のために例の私の心は、赤く實の彈けたざくろのやうになつて見える。手もつけられない程感傷深くなり、眼も覺めなかつた心で已に泣いて居つた。
眼がはつきりと覺めて、火の響に心が動かうとしはじめた尖端に、愛された事のない私だつたがと私はつぶやいた。
誰れ一人にも愛された事のない私だつたのであるが私はそれ程に寂しい道を歩いて來たのではあつたが、


靜かなる流

唯一人の人が私を『死』で愛してくれた事がある。愛の凡ての表現の中で、もつとも極度の愛の『死』が私を愛してくれた事がある。それはあの可憫な祖母の臨終であつた。

祖母は祖母を打ち捨てゝ走つた私を、死ぬいまはまで逢ひたいと云つて泣いた。何故そこに居つて逢はないのだと云つて涙を流して次の間をにらめて死んでいつた。

其のあはれな祖母は、あの故郷の八月になると桔梗の花が多く咲くさゝやかな山の上に眠つてゐる。暗い地の下の、白く曝れた骨の一つ一つが聲を洩して私を呼んでゐる。私の名をよんで、私の歸つてくるのを希ふ祖母の涙があの墳墓の土を黝ませてゐる。

あはれな年とつた女の死が私に執着してはなれない私が私の青春の力を激しい勢にまかして伸ばす爲には多くの周圍のものを犧牲にした。その犧牲の尤なるものは、祖母の生活であつた。祖母は若い者に自分の生活を破壞せられて、そして死んでいつた。然し却つ

てうらまないで永久に自分の敵を待つて居るのに相違ない。待つのが死の世界の祖母の生活であるに相違ない。

歸つて來ておくれ、と其の骨屑の一つ一つが聲をあげて咽んでゐる。私は一夜としてその聲をきかない事がない。

母の慈愛は私の頭上にある。然し母の慈愛は七つに分配けた林檎の一片である。私の所有し得る母の慈愛はたゞ一片の分配である。それは不足を云ふのでないたゞ獨占する事の出來ない愛である事が、已むを得ぬ悲しみである。母の眼は分配したたゞ一つの光りを私の眼に送るのが寂しい。

私の獨占した祖母の愛、私を根にして生きてゐた祖母の生命がまことに痛ましくてならない。

私は此の夏再び國に歸つて、あのあはれな祖母のために桔梗の花を折つてあげたい。

四　ひろがる震え

此のやうにあの怜悧な濶達な人がてひしい。あの胸の大きく平な巨大な人がしたはれてならない。あの人がものを云ふと私の心がわなくとをのゝき、私の生命が震へながら笑つて來る。あの人が眼を見ると私の眼には血が射入るほどに燃えて來る。あの人の呼吸が響いて來るとき、私のあはれな筋肉は激しく爭つて死なうとする。すべて毒藥のやうに恐しいが恐しさの伴なふ身體の震へ、悲しさに充つる心の快さは、私に何事をも悔ひなからしめる力がある。



然し此の戀は私の生命の外のものではない私の生命の內のものであつて、決して現實の上に引き上げる事ではない。

烈しい欲求の苦痛と相鬩ぐ身體の震へは、燐の火のやうに上つてしまふ時はもう空しき消滅であるばかりである。然し私が此の燃えるものを、現實に引き上げる事をいとふのは決して常識の爲めではない。私の心はもすてし多く、身體の震える快感に生きてゆきたい。私の身

體はなほしばらく、心の裂りさける悲しみに戰慄してゐたいのである。

戀から受け入れる戰慄は、私の生存の高調な樂譜である。崇い樂譜を路傍に洒す程、私は痴愚となりたくはないと思ふ。

五　腐りゆく悲しみ

私は腐らうとする。私は流れねばならない。流れずにゐる此の苦しみに耐へられない。流れてゆきたい。廣い海の方へ。

『わしは谷水、出るには出たが――。

私をせく大きい岩石がある。私はその岩の根にさへぎられて、いまにも黒く腐らうとする。この苦しさに耐へられない、岩を裂き碎くてだてはないであらうか

六　新より新を追ふ態度

私は新しい世界に歩いてゆきたい。それには此の古い世界を捨てねばならない。私は新しい生活をしたい

それには此の古い生活を捨てねばならない。私は更に自分の心の滿ち充たされる人を得たい。それには此の人に別れねばならぬであらう。

より怜悧なる感情へ、より聰明なる智識へ、而してより強く命の根の光つてゐる底に沈みたい。それには今の自分のすべてのものを破壞しなくてはならない。

私たちは古い生活から離れ、古い戀人から離れ、古い智識、感情からのがれたい。それは私達の死の刹那まで變らざる努力でなくてはならないのである。低きより高きに、暗きより明みへ。一歩且一歩漸進するのは人類の性である。宇宙の本然の勢力である。その宇宙の本然の勢力、もしくは法則の上に、自分のこの微徹たる生存を順應したい。

『私は歩む事を欲する。無窮に歩む事を欲する。そして歩まないでゐる人を見るに耐へない。時間の推移に身を任せてゐる人を見るに耐へない。

私はどこまでも歩む。歩みすぎる事は毛頭ないと信じて歩む。』

ある人がさう云つた。

然しながら新より新を追ふ事は、私たちが攪亂し顚動すると云ふ意味ではない。鳥が泳ぎ、魚が翔る類の新奇ではない。まして無定見でも、輕薄でもありやうはづがない。

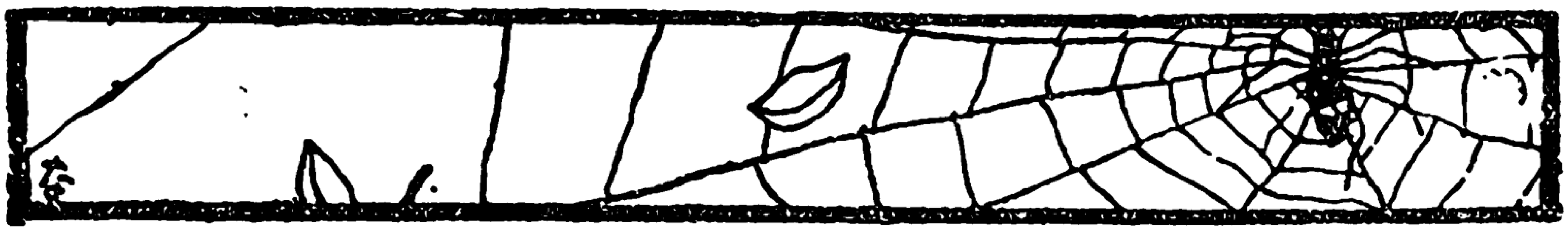
輕薄とは新より新に移る上に自己がないと云ふ謂である。自己のないところにはいつも誠實がない。眞に自己を求めて新より新に自己を打ち開いてゆく人には誠實が陽のやうに輝くのである。

どのやうな微細なものにも自己がある。田舍住居にも晝顔の花に美しさを見出すやうに、私たちの眼の前にあるものに、私たちの生命の共鳴がないものはない如何なる人の談話にも私が見出される。

見る處のもの聽く處のもの、觸るゝところのものゝすべて其の底に自分が光つて居る、その自分を發見し聚集する事が自分の快樂の源だと思ふのである。いかなる零細な事件にも、如何なる人の生活を見ても、そこにはいつも自分がある事を信じてゐる。宇宙のあらゆるものに宿つてゐる自分がある。智識博く、感情のみがゝれてゆくに從つて、自己を宇宙から受け入れる力が鋭くなるのである。自己を宇宙から受け入る力の鋭い人の生活こそ、新より新を追ふ、まことの生活である。

若し私達に共鳴のないもの、その中に自分がないと認められるものが、私達の眼のまへにある時は、つまらぬ感情に囚はれる事なく振り落して進まねばならない。それは輕薄であるとは云はれない、むしろ誠實に生活するものゝ眞劍な行爲でなくてはならない。新より新へ、それは卽ち自己より自己への生活である。私は一人でもその誠實な生活をする人が私の眼に見えて來る事がどれほど喜ばしいか知れないのである。それは私が敎へられやうと思ふからである。

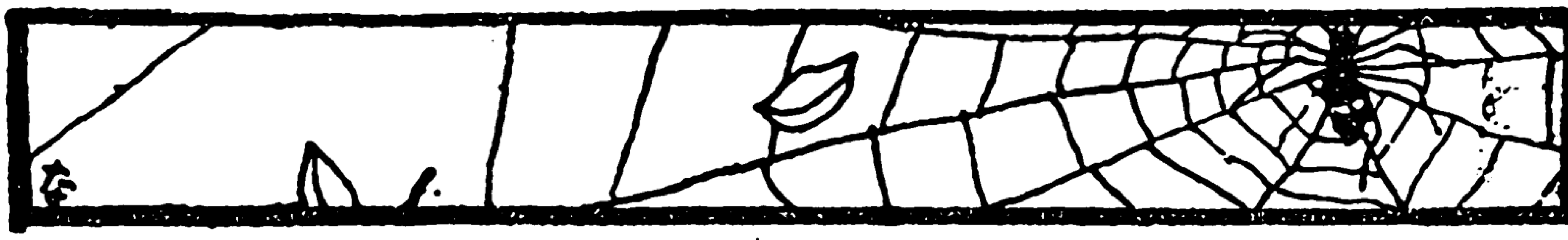
私たちは誠實であるが故にまことに寂しい。寂しい此生涯はあるひは人間の進んでゆく上の一種の約束であるかも知れない。然し出來得べくんば誠實なる人人の集り合ふ機會がほしい。必ず「天國」はそことにある。



ダリアの前

原田琴子

たゞれたる赤き心はしみ〴〵と床しきことを思ふよしなし
なほ少し甘き香のたゞよへる廢園にこそ住める人われ
いたましくたれこもりたる少女子よ何をたくむやダアリアの前
なほ少し憎き心とならましを若き少女よ紅きダリアよ
うやつらや夜は夜とて泣かるゝに晝は晝とて花ちりかゝる
青き花灰色の花黑き花わがたゝかひの野に咲きにけり
いち早く涙おぼえぬさて次に赤き花をば數へられける
思はでもあるべきものを衰へじとばかりめづる夜の黑髮
わが住みし國は大方ほろびけりまことや毒の琴をわれひく
行き行かばやがてつくべき果てあらん毒の流るゝ奈落の道も
泣きぬれてわれのありとはまことかやうたがふもよしうたがはでよし
黑髮も人にゆづらばかろからんのらりくらりと暮らしてましを
ひそやかにいとひそやかに雨ぞふるざんげの壇にあるごときかな



かなしきは少女心と人の道梅雨の晴間の危ふきに似て

青き酒紅き酒こそうれしけれわれをなみするわれを欺く　（紅吉様に）

紅萩のたゞ一本がなよ〳〵と風に吹かれてある心地かな

袖長きモス友禪を着るこゝろ風が誘へる小百合の心

うか〳〵と紅き夢をば見てありぬ七日ばかりの月とダリアと

夜となれば爪彈きをする習ひなり物思ふより人をまつより

欺くにあらねどよしや少女子は歌でやはらぐ絃でやはらぐ

あゝ遂に眠るべきかな光なしあゝ惡性の女なるかな

美しく痛き心や持て來たる水のほとりの素足の少女

いそがしく舞へる少女か美しき悲哀の人か矢車の花

いみじくも香る花かな春過ぎて悔の心に大人となりて

矢車のつやなき花を見てくらすおとろへはてし我ならなくに

かきつばたぬれて香れば夜といはず晝ともいはず泣かまほしけれ

水ぎはにひとり泣くなりかきつばた長き袂の風うらみつゝ

かきつばた女あるじのうら若く琴ばかりひく庭の池かな

ひとりにてなげく涙は拙くも机の上のちりをぬらしぬ

わが涙見る人よりは聞く人のかなしかるらんわびしかるらん

形見の日記

故　山田篠子

戸外は雨聲益々繁く、其中に蟋蟀が聲をふりたて鳴いて居る。儚い蟲と生れても、一生を歌ふて終るものは幸福ではあるまいか。波浪多い人生の行路も、歌ふて勇ましく通らねば、蟲に對しても慚かしい譯である。

—明治四十三年九月卅日—

すつかり仕度が出來てから、私は神の前に額いた（唯自分の信仰に對つてゞある）。そして此希望に滿ちた朝新生涯に入るべきこの朝、たゞ明るい前の事ばかり思ふて居られなかつた私は、過去の絲を手繰つて見た。十九年間卷いて、また絲の環を手繰りほぐして見た。あゝ濕む眸よ、とこしへに清き影のみ映せ。あゝ涙よ我十九年の穢れを洗ひてよ。其瞬間心は空であつた。唯何とも云へぬ力が胸に湧き返つて居る。二十歳の新生涯に入るの清い心の動搖であつた。

—明治四十四年一月一日—

冷罵嘲笑、皆物の結果をして美ならしめんと努むるの燃力となるかと思へば、また身に取つての尊い賜ではあるまいか。何にせよ私の今迄は平坦の生涯ではなかつた。今後は尚更さうである。それと戰ふの覺悟を今新年に當り殊に固くして置くの必要があるのである。あゝ自分は努めたい。自分の敵であつたもの皆が自分の最終の日に靜に振返つて見て、皆それが自分の恩者であつたと感謝の出來る樣な美なる結果を望む。あゝ努力又努力！。眞に私の生涯は努力を以て築かねばならぬ。

—明治四十四年一月六日—

今日も亦何やらん頻りに胸躍りて、書きたき事並々ならず。その胸を強ひて鎭めんとする苦しさ。想溢れんとする時には筆執ること能はず、筆執る時は想の半も表はすこと能はず。動かぬ筆に泣くばかりの思ひず矛盾も甚しきかな。あゝ努力よ、幾多の努力によりて力あり權威ある筆をば揮ふを得るなり。神よ、努力し

て出來得べきものならば死力を盡して爲すべし。努力してもく出來得べからざるものならば、此高鳴る胸を、此躍る胸を、此想ひを永劫に永劫に封じてよ。高鳴る胸抱きながら、一生を默して啞の如く過さんは、到底堪へがたき事なり。

あゝ高く波騷ぐ胸よ！感傷の我れ、幸か不幸か唯形骸に等しき身ならましかば……。彼のハートに何ものゝ赤き影をも見出すを得ぬものならば、生きじとこそ思へ。——明治四十四年三月廿二日——

あゝもう梅雨の時期も迫つて來た。また例の樣に負けるのか知ら?。私は此弱い心、この病勝な身以外に自分と云ふものを置いて、今年こそは奮鬪しなければならない。我が弱い心と弱い身とが戰ふのである。弱いながらも私を支配して居るのは矢張此心である此心迄も取除けたら後に何が殘らう?我ながら不可解な事を言ふ。併し自分は未だ此後に言ひあらはし難い或ものが殘りさうに思ふ。私はそれを我として他のものに戰はねばならない。私にとつて最も苦痛な此時期を通り越さねばならない。併し私の心を私の身を鍛へるの期でもあると思へば、また悅んで梅雨を迎へなけ



ればならない。

生の力の表現は夏に於いて最も著しい。それだけ弱い者は夏に於て最も自己の弱きを感ずるのではあるまいか。ふつ〳〵と熱い呼吸をして健康さうな赤い顔に、流れ出る汗を拭きながら道を行く人と並んで、蒼い顔に尠しばかり冷たい汗がにじみ、さうして消えさうな息、胸ばかり高く波打たせながら行く自分を思ふと、情けなくなる。これでも生きなければならない。否、自分はこれでも尚生きんとして努力して居るのである。私の身に取つて生きると云ふ意義はまだ分らない。此ノートの頁の終る頃迄に此解決がついて、此日記帳に記す事が出來るか知ら？。

――明治四十四年五月廿六日――

朝早く母樣と共に院長の最後の宣告を聽かうとして東洋内科病院に行つた。

「左肺を侵されて――入院六ヶ月間位――今なら治る」とは、今日で三回目の診察を乞ふた高田院長の最後の宣告であつた。私は此宣告を受けた瞬間、私の心には何事も浮ばなかつた。驚きの爲でもなく、素より歡びの爲でもない。唯院長の發した是等の數語が何の事もなく鼓膜を打つて、さうして其言葉を意識したばかり。

嬉しからざる此宣告！これらの數語が、平素敬慕して居る我が高田院長の口から發せられた時、寧ろ大慈悲の御聲のやうに聽えた。何故なら、自分にも必ず治るといふ確信があり、且又それでなくとも、私は決して恐れなかつたと思ふ。さうして院長の宣告をば「爾の脾弱なる身體を之を機として根本より改造せよ」と宣り給ふ神の託宣の樣に聽えたからである。

あゝ併し、生れて茲に二十年、其中の十年は病軀を以て生きて來た。不孝の子！院長の宣告を聽かされて此不孝なる子の爲に憫みと心配の胸を躍らせられる母樣のお心。且は南海の孤島に朝夕私の卒業を樂しみに待たれる父樣のお心を思ふと、私は泣かずには居られない。此不束なる不孝な子をも、尚此上なきものとして愛でられる親の慈悲！私はそれを今迄は、其半だにも解することの出來ない不孝な子であつた。私は之に報いねばならない、健全なる身體を以て、健全なる精神を以て、院長が半年と云はれたが、屹度三ヶ月位で治して見せる、と思ふた時、私の顏には確に一道の光明が閃いたであらう。私の泪は決して病を恐れ悲むの泪

ではない。今の處、若しも一滴でも私の瞼からこぼれたなら、それは兩親のお心を考へた時の「濟まない」と云ふ四字によつて流れる涙である。

私の信仰は未だ確立して居らない。併し、私は此時を機として充分修養する事が出來るやうに思はれる。靜かに想ふ事が出來ると思ふ。さうして何か私の心の上にも新生面を開く事が出來るであらう。――明治四十四年六月八日――

病院の十日は長いやうで早かつた。朝起きれば、この日を如何に遊ばんかと云ふ事を考へる。如何に働かんかと云ふよりも餘程むづかしい問題であると思ふ。



連日の雨では猶更である。併し連日の雨でも、話相手がなくとも少しも淋しさを感じない私は幸福である。瞑想とでも云ふのか知ら、獨でじつと考へて居るのが自分の最も樂しみだからである馬鹿騷ぎをして、それでなくとも話相手を見付て氣を紛らせ、さうして病といふ事を忘れやうなんて卑怯だと思ふ。それをして居ない中は悶々として淋しく送らねばならぬではないか。私はそんな方法でなく、眞に病を忘れ眞に樂しんで歡喜に滿ちた病院生活をして見たいと思ふ。固より病――病院

生活の樂しい事でないのは云はずと分つて居る。併し是等の境遇の中に樂しんで居られるやうにするのが私の目下の急務である。又大に修養すべき處である。私は此十日の病院生活を最も意味あるものとして見たいのである。

――明治四十四年七月一日――

九時半、例の溪流の音を耳にしながら冷たい枕に就いたら、何とはなく泪が止度もなく流れる。勿論家をも思ふた。父母をも懷ふた、又脆弱なる我身をも想ふた。併し取越苦勞の悲しみの涙などでは決してないのである。私は泣けるだけ泣かうとして涙の盡きる迄泣いた。

消えて跡形もない水沫のやうな空想のみに過ぎざるべき人の世ではない。――併し、空想をもて此頭を滿たして居る時は、せめて凡ての矛盾苦痛を感ぜずに居る時である。――さうして父母の顏を見ると、いつも私は樂しい空想の世界から、傷ましい現實の世へ引戻されゝのである。――凡ての矛盾を解き得るものは勿論多くはないと思ふ。――超越主義を取つたなら左迄むづかしい事ではなからう。併しそこには澤山の卑怯な處があるではないか。人の世は常に矛盾と謎とを以て滿たされて居るのである。

――明治四十四年九月廿一日湯河原にて――

寢る前又床の中で「停雲集」を讀む。女子の間にも此著者と著者の亡友とのやうな飾りのない潔い友情の交換をする事が出來たならと、萬事つゝましやかに眞の自己を友の前にさへ現はすことの出來ない女子のいつも寄つては、雪の樣な冷たい心を以て友に對するのが、齒痒くつてたまらぬ。女子には心友など云ふ言葉を使ふ權利はないと思ふ。自分は果して此樣なことを言ひ得る側の女であらうか。

――明治四十四年十一月七日――

（右の日記は元成女高等女學校出身の山田篠子さんの遺稿より抄出したもので、山田さんは妙齡にして逝つた不幸の婦人でした、其逸話と共に山田さんの短き一生を次の八月號の本誌上に於て紹介いたします。記者識す）

燈臺より

伊藤夕陽子



××樣、だい三日目の繪葉書、お受取りあそばして巨岩や、丈高い松、青海原、寂しい乍らも、かうした、景色に觸れるのを好む、あなたを、是非伴ひ度う御座いました。そら、あの大きい、岩と岩との間を縫ふた海原に添ふて朧ろな小島が見えるでせう。

失意の胸抱いて、流浪する、青年の双頰に北風は容赦なく吹きつけて、心は死した、骸をとゞめてゐる。

夏なれど日本海の荒潮は、からい／＼海の上を渡つて殊に夜はさむう、モスリンの袖をなぶります。

家の中からでも、湯氣に烟つた風呂場からでも、見えるものは松を透した海原ばかりですの。

白い、大きい波のうねりが、漂ふて、ゴウ／＼と、凄愴なひゞきをもたらします。

朝顏も夏菊も、何やらの西洋草花も、培養してありますけれど、私はなぜか、こんな花類にみいつてゐる氣が致しません、好まぬのではないけれど、玆は別世界だ、燈臺だ、と云ふ、なにがな印象がなくては等、さう云ふ方面に傾いて、瞳の沁む程、觀測所の青い、赤い、光を眺めて居る夜半もあります。大きく平つたい岩の上に橫ねじりに坐して、新聞や、雜誌をひろげたまゝ、キヨロ／＼あたりを見まはして、おもに晝の間はすごします。

時には、何哩か沖を仁川通ひの何丸か忘れましたが通りますの、私が坐つてる直下を通る船は小いほまへ船です。嚴原から、淺藻の方に行く、荷積船です。昨日でした、親子乘りと見えて、十二三の色の黒い、肥えた、少年が、甲板に居て烏賊よまかなんか、巻いて

ゐましたから、我知らず、オーと呼びましたの、少年は不思議相に、私の方を向いて居りましたが、ギヨロッと瞳をさせた計り。後はみむきも致しませんの、人氣の少い處に居る身の、やつぱり懷かしくて、知らぬ人に聲かけたかと、獨り。ふとさうした事を思ふて見ました。

××子樣、一人はやつぱり寂しう御座いますよ、玆に來てから十日計りになりますが、まだ、生きたおさかな一度も頂きません。平つたい石段の兩側に鐵の鎖りがついて居ります。その石段を下りて、けはしく直下する小徑を行きますと、磯するによい場所があつてさゞえや、貝類が澤山とれる相ですけれど、行く道が恐いのでいまだに參り得ません。

郵便夫は一日に一回來る位ゐ、郵便の少い時には參りませんの、洋々中に浮ぶ仙境とでも言ひたいやうです。

燈臺の人は皆一種、柔かい、溫味があります。人が少い故でせう、私のやうな者でもそれは〳〵親切にして下さいます。

申し忘れてゐました。燈臺へまゐりましてから、まだ一度も白粉を用ひませんの、全く、見る人もなければ、こんな處と思へば身姿なんぞ、どんなでもいゝやうな心持になります。俗物はやつぱり俗物ですわね、ノートと鉛筆は一時もはづしませんけれど、日每同じ眺めに、書く事もつきました。怒る濤聲に神氣溢るゝ長詩なんど到底私には出來ません。

氣象に寄りますと、まだ明日迄は晴、今夜も海の上の月影を浴び、銀星まばらに、落ちゆく方をのぞんで破れぬ昔懷かしかりし、若人の面影なりと忍び、海の歌口ずさみませう。最一週間すると舞ひもどります。電信線路に添ふた劍山を越して七里の道を歩むか、都合では淺瀨から船でかへるか、いづれにしても一人です色の黑くなつたのだけお土産に、では之で失禮致します。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

つぶやき

みほ子

男の方つてほんとに油斷が出來ないわ。綺麗な顔をして、優しい事許り仰つて、それで一寸弱味を見せるとすぐ嫌らしい事許りなさるんだもの。それに男らしくもない卑劣な策をめぐらして、ズン〲女を縛つて行くんですからね。若い男！　懷しいけれど憎いわ！

我國の美風として、女はあくまで男に服從しなければならない義務があるのです。その義務に甘んじて服す時、弱い女の心にも強い強い誇が刻みつけられるのではありませんか。

女大學など御卒業なすつたお方がさも得意らしく獨身論なんか尊重していらつしやるさうですが、何だか馬鹿〱しくて堪りませんわ。『女』といふものゝ最も大きな務も御自覺なさらないで、エラ相な事許り仰つたつて、まるで無意味な呟きとしか聞えませんものねえ。

人口の増加は喜ぶべき事だらうと思ひます。それもウジャ〱する程になつては、一寸考へ物ですけれど妾ども一代や二代や十代――百代やそこら生れ變つたつてまだ〱大丈夫だらうと思つて居ます。それに獨身だなんて仰山に、仰つても、決して感心致されませんわ。そりや學問はおありなさるし、何處へお出になつてもお金に不自由はマアなさらないし、ほんとに結構な事では御座いますが、さて、夫たる可き人は？と言ふと、世間に廣いやうで狹いものですからね。それに極めて平民的なお方は別として、雀に頭を下げる鳩の樣な眞似は、誰だつて好きませんからね。勢ひそんな心にもない事を仰つて、遣瀬ない寂しみを慰めやうとなさるお企ては、あまりに見え透いて、反感――いいえあはれみの心を呼びますわ。つまり、妾の赤裸々な心から申しますならば、妻となり得ぬマケオシミ、

母となり得ぬマケオシミとしか思へません。ほんとの親の愛にも無經驗でゐらつして、それで仰山に『親の慈愛』だなんて學校か何かで御說きなさるなんて半想像が手傳つてる……やうなものですわ。フキ出し度くなりますよ。過言かは知らないけれど。

或はマルサスの人口增加論を妨ぐる原因も、此邊にその一端を宿して居るのではないでせうか。何にしてもやるせない寂しいお心はお察し致しますわ。

田舍の娘さんは總てが純で、詩的で、赤裸々で、都會のお方のやうに醜い影が割合に少いかと思はれます譬へば戀をするにも！

五色の酒を飮んだりして盛に氣焰を上げてゐらつしやる御婦人がおありなさるさうですが、しまひにはどんな事をなさるんでせう。新しいと言ふ詞には、案外な意味が含まれてるんですわ。

『髮の香と、肉の匂とは別々な思ひ出を呼ぶ』確か女學校の寄宿舍でさん〴〵苦勞をなすつた方が、麽那事を言つて妾どもを驚した事を覺えて居ます。これなども或意味に於て所謂新しい女を連想させますわね。

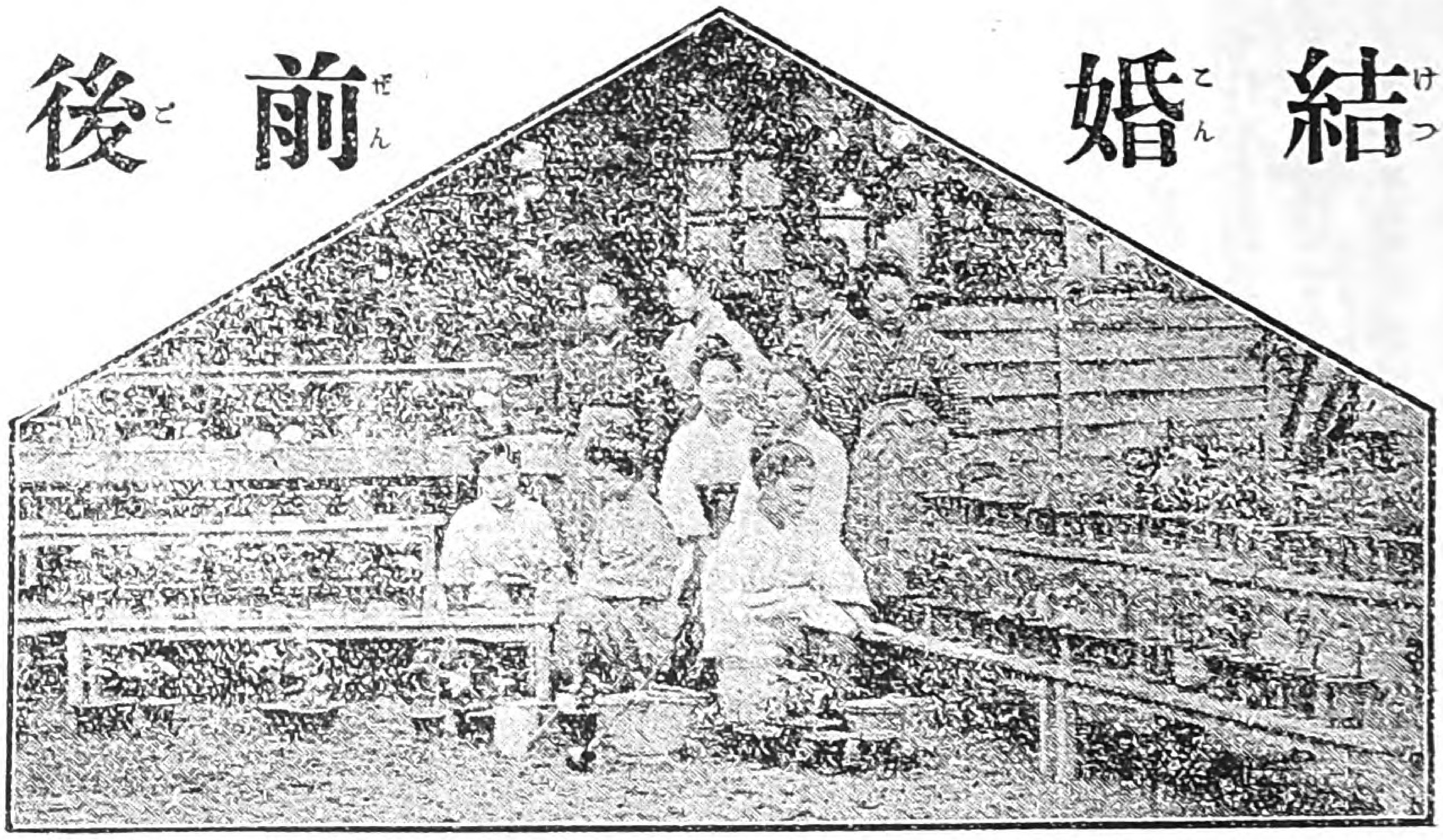
文藝に親しみ得る餘裕のおありなさる方は幸福です次第々々に本誌から遠ざかり行くお名前を拾つてみますと、寂しいお姿が伺はれるやうです。

追憶を夢みて懷しく在りし日をお慕ひなさるお方と追憶を夢みて寂しい現在をお考へなさるお方と、多血質のお方は總てが幸福にあり易いやうです。

親しかつた友達もお嫁入をすると、昔のやうに心から溶け合ふやうなお話は出來ないものですね。何物にも拘泥されない異性の力！

女程弱いものはない。
女程强いものはない。

結婚前後



待つ間の心

みどり

或日私は次の六疊の間で裁縫をしてゐましたら、御父さんが『文子や一寸おいで』とおつしやるので、私は何事であらうかと衣服の皺をなほして御父さんの居られる八疊の間に行きました。丁度御父さんは新聞をお讀みでしたが、其新聞をおいて御父さんは、御言葉を改めて言はるゝには、

お前も最早年頃だからお嫁さんにも行かなければならない。それに付て此間から、色々な所から申してまゐつた中で、よい所があるが、いつてはどうだ。

其頃は私もまだ處女心でゐましたので、私の胸には『はつ』と暗い波がたゞよひました。そして何と答へてよいか私には分らなかつたのであります。御父さんは私の俯向いてゐるのを御覽になつて、また御言葉をお繼ぎなさいました。

それはお前も知つて居るであらうが、あの姉さんの御婿さんの親戚なんだ。知つてゐるだらう、其お方今東京の大學に御通ひになつて、今二年で御卒業ださうだ。そして法科だと言ふから將來はお前には、適當だらう。どうだ。

とおつしやられたときには、私の心には何とはなしにうれしいやうな感

じがして、はづかしくたゞ『はい』と言つたきりでしたそれからと言ふものは私の心は其お方のことを、あれやこれやと考へました。考へると考へるほどよいお方と思はれて何とも言へない心持がしました。やがて御父さんはまた言葉を繼で、御安心の出來ない風に私の方を見て

それでお前が行く氣なら御父さんがよい樣にしてあげるが、どうだ。

とおつしやられましたから、私は羞かしいやうにもあり。うれしいやうにもあつてたゞ『御父さんの御意にしたがひます』と言つたきりであとは胸がいつぱいになつて何も言へませんでした。それから御安心なさつた風に御父さんは『それで俺ものぞみがかなつた』と言はれてまたさつきの新聞に目を御通しになりましたから私も起つて次の間で裁縫をしました。それからと言ふものは何の仕事をしても其方のことがおもはれてして居る仕事も手につかんやうにうれしうありましたそれから四五日たつて丁度食事のときに御父さんが一寸箸を措いて

文子やあの事は昨日きまつたよ。

とおつしやられたときに、うれしくなつて御父さんに其の話を聞きましやうと思つてゐるときに御父さんは

その事だがあのお方が此度の暑中休暇におかへりになるから、其時に結婚式をあげることにしたから。お前も其考へでゐてくれ萬事は御父さんがしてあげるから。

と言はれたときは、飛び立つやうに嬉れしかつた。其後は暑中休暇の來るのが待ち遠しくなつて、早く結婚式を擧げたい樣に思ひました。其れからは毎日々々其お方のことばかりおもつて、何事をなすのにも嬉しう御座いました。御父さんや、御母さんは其れから私の色々な衣裳について御相談をなされてゐました。其れを聞くとわたしも忍耐らなくなりましたから、御父さんのところに行つて衣裳の見本などを見ました。御母さんは是れがよい彼れがよいとおつしやられてそれぞれ注文をなされました、私が側から何と言つてよいか分りませんから、沈默してゐましたがたゞ私の胸は喜びに滿ちて居ました。此のとき他の者が見たら嬉しい風が顏にどの樣にあらはれてゐましたらう。

暑中休暇の來るのを指折り數へて見ると、まだ二三ケ月ある。ほんとに日のたつのゝ遲いのがくやしくなつて、早く日がたてばよいと思ひました。一寸女と男

が二人連れで歩いてゐるのを見ても、自分の身に引きくらべていま〳〵しくなりました。自然の景色を見ても、自分が二人連れで此景色を樂しく見るのは、近い内だと思つて、又嬉しくなりました。兎や角してゐるうちに、四五日たちましたが。御父さん、御母さんは私を一層親切に愛して呉れるやうになりました。それを思ふと、人間も些細したことから、氣の變るものかとつく〴〵感じました。眞實に私程に幸福な者はありますまい。兄弟も二三人ありますが、其兄弟も今迄とは特別に變つたあしらひになりました。そんなことで私の爛々たる戀、いえ愛……結婚……と言ふことが燃えたつて來ました。かうして色々他の事を考へてゐると月日のたつのは早いもので數十日たちました。或日私は庭園をながめてゐましたら、郵便配達夫が……郵便……と手紙と書物を包んだの投つて行きました。ふと見ると、御父さんの御話しになつた人からなのでした。それから私はあわたゞしく、御父さんのところに行きまして、『御父さん御手紙』と出しましたところ御父さんは『お前の名宛だから、あけて御覧なさい』とおつしやりましたから、あけて見ると雜誌を一冊送る、『私はあなたに滿腔の愛を捧げてゐます。其愛のしるしに是れを取つて下さい』とありました。私があのお方を思つてゐるほどあのお方も私のことを、思つて下さるかと思ふと、有難いやうに思はれて、矢も楯もたまらなくなりました。御父さんは私の方を、見ながら、

其樣にあの方がお前の事を思つて下さるから、お前もあの方と起臥を倶にする樣になつたら、其御親切を忘れないで、善く御つかへしなさいよ。

と言はれましたときには、私は『かしこまりました』とばかり言つて、次の間に引きさがつて雜誌をあけて見ましたら、女學世界でした、其中には私等に色々と參考になることが書いてありました。其手紙を見てから後は私は夫の私を思つて下さるのに、ほと〳〵感服しました、で一日も早く暑中休暇が來て、結婚式をあげて二人で暖い愛にからまれたる懷かしい夢を見るときが來ればよいと思ひました。其手紙は文箱の中にしまつて毎日々々出して繰返し繰返し讀みました。かうした氣分で居ると其お方の姿が寢ても醒めても、私の目の先にちら〳〵してゐるやうでありました。それからは氣が高まつて御飯もろくには食べられませんでした。其結果ねて〻結婚式をあげたやうな夢ばかり見て、何と

なく日のたつのが待ち遠しくなつて來ました。其お方も私のことを思つて下さるやうだが、私は其人が思ふよりもなほ、私の熱情の方が高くはありますまいか。兎やかくしてゐるうちに注文をしておいた衣裳が出來て送つて來たので、御父さん御母さんといつしよに見ました。すると御母さんは『それを着て御覽』と言はれるので、私もうれしいのやら、はづかしいやらで、少しためらひましたが、御母さんがしひてとおつしやられるので、起つて着て見ました。此れを着ると最早お嫁さんに行つたやうな感がして、羞しくなりました。御母さん方が『善く似合ふ』と言はれると、なほはづかしくなりました。心のうちでは此の着物を着て、二人揃つて結婚したらばどんなだらうとか、此着物を着て行つたならばなどゝ、私の胸はとつおいつ、色々の考が溢れ出て來ました。こんな氣分は誰にも有るでしやうか、私ばかりでしやうか。其着物を簞笥にしまつてからでも、何時か何かの次手には、其簞笥の抽出をそつとあけて、着物を見ましたことは幾度でしたらう。かうして取りまぎれてゐる中に、また其お方が女子文壇を御送り下さいました。其れを見ると、私の心は一層そゝり立つて、何とも言へない氣持になりました。

私がかうしていそ〲としてゐるのが……顔付でも異つて見えたでしやうか……御母さんや御父さんなどは、御氣に召したでしやうか。私のことゝつたら、一も二もなく御聞き届け下さるやうになりまして、其御顔やお言葉も、柔しくおつしやるのでした。其れを聞くと私は一層うれしくなつて、日のたつのがもどかしくなりました。さうしてゐる中にも其お方のことは一寸も忘れる暇はありませんでした。私も考へた末に其お方に向けて手紙を出しましたらば、其れから數日たつて、細々と手紙が來ましたので、今迄よりも以上に氣がへんな工合になつて、其お方のこと許り思つて、胸が一つぱいになりました。それから數日は時のまにたつと見えまして。丁度五月の末かと思ひますが、ふと其お方のところから愈々歸國する日を御知らせ下さいましたので、私もまた、やきもきして、こらへきれないやうな心になりました。其日を指折り數へて待つて居ります。最早あとはあます所は數十日となりました私は女子文壇を見て、あまり嬉しく御座いましたので一寸書いて見ましたが。此本の發行になる頃は、私は結婚式をあげて居るでしやう。あゝ思つて見ると實に樂しいものです。然し日のたつのは早いもの私が處

女心であつた其時から、此のやうになつた今日まで、何ヶ月たつたでしやう。……まだ三四ヶ月です。私がかうした氣分になつたのも、今から思つて見ると夢のやうです。かはればかはるものですこと。今は最早私の心は處女心ではありません。

婚禮の夜

桂華

雪に閉されて沈滞した山國の空氣も、いつとはなしに吹いてくる暖かな風に和んで、朝な〳〵の水仕事にも竈の前に立寄ることが少なくなつた。高い處に建てられた農學校の陰になつて日の當らない桑畑にはいつまでも〳〵雲が殘つて居て、やつとすつかり消えたのは二月も末の頃であつた、其頃、私の女としての運命は定まつたのである。

去年の一月三日、月圓かな夜、銀蛇のうねるが如き荒川に沿うて武藏野の平原をどこまでも〳〵走つて行く汽車の窓によつて、あゝ此麽山奥に入つて了つてはいつの日か逃れることが出來るだらう？とひそかに涙に暮れた私は愈々此山國を逃れる日が來た、餘りに早く其日が來た、或時は此の刺戟の少ない山國の空氣から、此の單調な生活からのがれたいと願つた日のないでもないけれど、今となつては流石に殘りをしい、總ての日はすべてなつかしい思出となるべきものと知つた時、今まで投げやりにすごして來た、四邊の風物まで今更のやうに顧られる、けれどさうした心持はそのをり〳〵に觸れてゆくものゝ謂はゞ淡い出來心であつて、私の心の底にはもつと強く根ざした或るものゝ影があつた、夫は、やがてわが夫として我がすべてを捧げて仕ふべき未だ見ぬ人の上であつた、世に一人なる人として身にも代へてといとほしむべき我夫は果して如何なる人であらう？、そのひとゝは同胞も及ばじと親しんだ人によつて、其性格、其生立、境遇――容貌――手腕殘るところなく知つては居るけれど、其性格についてのみは自ら知れる人ならねば、人の言を疑ふのではないけれど絶えず一つの疑問として私の心を苦しめて居た。夫は來るべき日、解くべき謎、今如何に思ひ惱めばとて凡人の我身に及ぶべき術はない。

かくて惱み多い日は暮れ、又いねがての長い夜は明日に續いて我が山國を逃るゝ日は近づいて來る。わが

家を追はるゝ日は近づいて來る、あゝわが家、茲は汝の家ではない、おゝさうだけれど、住みなれた家故に暫らくこゝを家と云はせて下さい——、住み馴れた家を離れ、兄に母に嫂に、最も親しい人々に別れるのはつらいけれど、つらいけれど、寄りどころない萍の我身にも嫁くべき家、歸くべき人のあつたことを私は祝福せねばならなかつた、それだけ尋常のをとめたちと異つた境遇に身を置く私の心を察して戴き度い、貧しい調度に對する度に『父在まさば』と母は嫂は泣いて呉れたけれど、私は此一襲ねの紋付にも母の情を泣かねばならない。

愈々私の身が定つたから母はどんなにか氣が樂になつたであらう、さう思つた私の心は餘りに淺かつた。並べて敷いた床の上に私は物思ふ故に曉まで眠れない夜が二十日許りも續いた、其間同じやうにいねがての枕をかへす母の樣子に、私は母の惱みの猶わが上にまつはれるを感じた、斯うして母はわが世にながらふる限り、母みづから世にゐます限りわが爲めに苦しみ給ふのではあるまいか。（嫁ぐまへ）

＊　＊　＊　＊　＊

かなり手間どつて、式終つた後、私は人に助けられて靜かに蓆をすべつた、そこには夜目ながら新らしい駒下駄がキチンと揃へてあつた、土地の風習とか、夫なる人の新しう調へられたものである。『いよ〳〵——』やゝ靜けさにかへつた我が胸は更に遽しう騷ぎ初めた躊躇ふ暇に後より。

『何卒、それをお穿き遊ばして！』某奧樣の御聲、今はとて夢のやうなる足蹈みしめ、一寸小褄かゝげて三臺並んだ中央の俥の前に立つたとき、初めて、紋付の羽織に鼠色の中折帽子被つた丈高からぬ人のうしろ姿を見た。物も云はで額を垂れたまゝ見送る人々を後に俥は門を軋り出づる、人の俥を先に立てゝ、某の奧樣に殿りせられて。

彌生半ばの夜、春とは云へど小袖の上にコート纒ふた襟元はつめたかつたけれど、ほてる頬をうづめては折々よぎる風も感じることが少なかつた。街路は擦れ違ふ人の顏も定かならぬまで暗かつたけれど、いと僅かな道程なれば物思ふひまもなく先刻の宿に着いてしまつた、出迎ふ姉達に顏見らるゝはづかしさに額伏せて奧樣の後につゞく。

明るい灯の下、火鉢を中に人は床を背にして、奧樣

と私とは斜に人に對して座を占める、軈て娩は茶を運んで來た、私はつゝましう膝に置いた手の遣りどころなきを感じた。
　娩は去つた、やゝあつて奥樣はまづ口を開かれた。
『幾久しう――』
それから何と仰有つたか、後も前も夢のやうな錯覺の裡に卷き込まれて何日の日にも思ひ出づることが出來ない。人は何と云つたか？私はたゞ額を垂れたまゝ。
　半時の後、奥樣は元の蓆へ列るべく座を立たれた、あとには衣がへせし人とわれと、人は元の座に腕組みして。



初めて仰いだ人の面は一盞の酒に熱して火の様に、吐く息は苦しげであつた
『ふつゝかな者で御座いますが――』
私のあらためて頭を下げた時、夫々報いた人の言葉はまだ耳に殘つて居るけれど、それもさうした錯覺のうちにとぎれ〳〵に胸に鑄つけた烙印なれば、今玆に綴り合すべきよすがもない。少年の如くに紅の頬せし人の若々しい係に、我が胸の血は初めて燃ゆるやうなあけの色にかへつて乳をつゝむ衣の微かにふるふを覺えた。
　その時只一度瞳を見交し、言葉を交へた瞬間に、さうした斷定を下すのは

餘りにはしたないと咎められるかしらないけれど、我が鋭い神經は、直覺的に今迄の杞憂に過ぎなかつたことを感受した。聊かの濁りも帯びない語尾の強いハッキリした言語に人格の一端の窺はれて、私は期待の誤たなかつたことを心密かに祝福した。

私は凡そ最初の觀念程確かなものはないと信じて居る、又其の觀念程尊いものはないのである、あゝこの人！　此の人に依つて私の結婚は初めて幸福なものであつたことを靜かに感謝した。

○

夫から二十日許りの後、夫迄人の家に預けられて居た私は愈々夫の赴任に伴はれて新らしい官舍に入ることになつた、荷馬車に輕く一臺の荷は大方新らしいものばかりだが、中に二ッ三ッ夫の自炊生活に用ゐた勝手道具もまじつて居た、軈て私は夫より一足先に俥で假家を出た、石岡から三里、坂を登つたり下つたりして漸う着いたのは筑波根の東へ三里、小さな村の一角の小高い丘の上に建てられた白壁の家であつた。

六疊の座敷、六疊の事務室、四疊半の茶の間、夫と臺所兼風呂場と、小ぢんまりした間取は二人住むには相應しいものであつたけれど、今迄各々に廣い家に住み馴れた私共には何だか窮屈な感じがしてならない、それに家の割合に押入の多い家なので、私共のやうに道具のないものは、彼方の隅に一塊、此方の隅に一塊あとは大方ガランドーに明いて居るのである。

斯うして初めて新しい家庭を形造つたのは櫻の花のやう〳〵にほころび初めた卯月の三日であつた、夫から花は咲き、花は散つて六月の天地青葉若葉に五月雨るゝ日多い此頃となつた、夫は多く出張して留守勝な官舍に私は獨り籠ることが多い、訪ふ人とては極めて稀であるけれど折々は物賣りの訪ふことのないでもない、夫等の人々は私を呼ぶのに『おかみさん』の言葉を以てする、初めて此家に入つて『官舍のお内儀さん』と呼ばれたとき、豫期しなかつた不意を打たれて狼狽の餘り頓に返事の出なかつたのは昨の私であつた、今はもう村の風俗習慣に馴れて些細のことに感情を動かすことも少なくなつた、お孃さんからお内儀さんへ—餘りに甚だしい變化に私は獨り微笑んだ、處女とひとづまと、其處には既に大いなる溝が掘られてあつて、私はもう永久にをとめの日に歸ることは出來ないのである、さうした寂しさを味ひながらも、私は處女の日の不安さの跡形もなく消えてゆく其行方を歡喜の瞳も

て見送つた、されど其處に又新らしい不安は湧いてくる。『お前は此頃大變瘦せたね、何を其麼に心配するんだい、云つてごらん、何も一人で心配して居ることはない、心配があるんなら手傳つて遣るよ、それとも手傳つて遣ふことの出來ない心配なのか』折にふれて夫は云ふ。然し私の今心配して居るのは經濟と三度々々のお菜ごしらへの他に何もないのである。不自由勝ちな新世帶、殊に僅少の生活費で上手に切廻して行かうと云ふには私は餘りに經濟に不馴れで



あつた、それと料理に拙い私は如何したら經濟に夫の口に合ふものをつくることが出來やうかと云ふことにのみ腐心して朝夫の出張を見送れば直に夕飯の支度を思ひ夕眠らんとして先づ明日の食膳を氣遣ふ、之が其日その日片時も念頭を離れぬ心配の一つであつた。夫を話すとき夫はいつも『其麼要らない心配はしない方がいゝよ、何に食つてさへ行けばいいぢやないか、誰だつて初めから先生になるものはありはしない。』と慰めて呉れる、夫は無邪氣な快活な極めて愚痴の嫌ひな人である、そして又何事をも包み隱す

ことの出來ない人であつた、少なくとも日々夫の行ひ或は語ることはすべて其の個性の表現であることを信じて居る、夫も又私の過去を知り、境遇を知り缺點を知るが故に多くの場合私は夫によつて足らぬ處を補はれることが多いのである。あゝ私共は了解し合へる夫婦である！何よりも私は夫を誇り度い、貧しい生活ではあるけれど私は最も幸福な結婚をなし得たものであると自ら固く信じて居る。

幸福

鈴蘭

丸き山、清き水、ひろき田野を有する、故郷に、父母兄の、限りなき愛を、一身にうけて何思ふ事なく、華かに豐に、純潔に生ひ立つた私は、幸福なる娘であつた。

極めて柔かく、ふつくりと、紫羅蘭の、花のやうな情緒を持つた少女……にも、人生の一大事に遇ふの時が來た。——結婚——、まだとほい所の事の如うに思つてゐた結婚といふことが、俄に差し迫まつて來た。

室の草花は今や、その戀しい、ふところから出やうとするのである。

——私等は女である——。逡巡すべきでない。凡てと別れて新らしき人……天が下に二人となき、吾が良き君に、渾身の愛を捧げやう。近江より常陸へ、移植されんとする、心は、出立の日まで、歡喜と離愁との板ばさみには遭つて、多少疲れずには居られなかつた

人生一度よりなき結婚の盛儀、は春まだ淺き如月の宵最とおごそかに、されど僅に數時にして、とり行はれた。再びなきこの大事を行ふには、あまりに短かい時間ではなからうか、今少し悠々と重大に等と思ふけど或ひは、是の方が良いのかも知れん。

人一倍長い黑髮を、光澤やかに結び上げ、淡藤色の晴衣に、つゝまれて燈の下に立つた姿を、せめて母上にだけなりとお見せ申たかつた、人に嫁ぐ私の、娘としての、最後の、最後の姿を……噫、とほき故に、お越し遊ばさゞりし母上に——と思ふと、そゞろ涙の湧くのを禁ずることが出來なかつた。人の氣分とほりに粉飾されるのを、いとふ私は、私の趣味や氣分にそふやうに、大方獨りで身拵らへをした、傍の人はたゞ

ほんの、手傳つて貰つたにすぎない位であつた。
厚い帶を、きゆつと締め終つて、鏡の前に向つた時は流石に微笑まれた、何だか、すつかり改たまつた如うな氣がした、わが華かなる娘姿……顏とも、いま……今こそ、眞に別れである、さらばよ、さらば。と鏡の我に別れを告げてゐる心中を人々は何と見て居られたらう？。

外界は寒むさうな筑波おろしが、吹いてゐても、私等は、溫かい、たのしい思ひに時をすごした、一日――二日――三日四日と、撒いた水が、すぐ後から後からと、乾いて行く如うに、たゞもう夢のやうに日はたつドリムランドにゐるのでは、なからうか……、わかい二人は時々氣がついたやうに、かう云つては笑つた

あのサブライムな筑波の姿を、見るとき、私は、いつも私達の生活の、かくあるやうにと、いのつてゐる移植さるゝ所は如何なるところか知ら、と案じたのは杞氏の憂で、此處も生ひやすき、溫室より以上に、良いところであつた。私は無上の幸福者だと、常に、神やその他、私を愛して下さる人々に心ひそかに、深かく感謝してゐる。

新らしき土の上に移された花草は、今、歡喜と、たのしみの中に、與へられたる、我がなすべき事を、成すやうに、餘念なく努力してゐる、枝繁り、花咲きみのらむことを、常に、常に、いのつてゐる。

結婚の式あつてから、早や今月で半歲、新綠の色も淸が〱しき白楊樹下に、若き二人は、健やかに、たのしく日をおくつてゐる、すぎし二月の宵を思へばとほいやうな、又でく近い頃のことのやうな氣がする。

十六

さみどり女

『お前、知つておいでだらうねえ』。母は云ふ。

知らぬと云ふには、毎日々々顏を合してゐる言譯が立たず、知つてると云はふにも、一言の會釋さへ仕あつたことの無い同志、其時少しの追問でもせられたらすぐに知つたかぶりの報いは來る筈である。

私は仕方の無い時にいつもする、曖昧な笑ひ方をして伏目になつてゐた。

母はそれ以上何共云はなかつた。

祖父は私の幼い樣子を憫然に思つたらしい。

『何、まだ十六やそこらでどこへも遣りやしないから心配せんがよいぞ』。

と優しく云つてくれた。

十六！　私は改つた心から、偶と我年を讀んで見た。人間一生の大事などと古めかしくは云はぬにしても、戀愛は神聖だの、個人の權威だのと論ずる現代に我一生の大革命に付いて、本人の私が頭腦を痛めたのは、只の之だけにすぎなかつた。

餘りに無雜作すぎ、又不見識すぎると笑ふ人もあらうけれど、未十六！　然も田舍に育つた未通さには、結句之を耻かしい目をせずに濟む位に思つてゐた。

――　十四日には祖父上お迎ひに上らる可くそれ迄に彼の物は悉皆仕立上げ下され度く、先生にも右樣おねがひなされて――

裁縫所の寄宿舍で此手紙受取つた時、相弟子の大勢は

『賴みをお貰ひなさるんでせう』。と云つた。

私はそれ程までに緣談が進んでゐやうとは、何うしても思へなかつた。

彼の話しが私の一家から好意で迎へられてゐると云ふ事は事實である。又本人の私が知る知らぬと云ふやうな事は一向に差支へがない。只、難しいと云ふ人生の、一大事件と目せられる結婚の道が然う容易に開かれるものか否かゞ疑はしかつたのである。

そして皆から

『かくしてゐらつしやる』。と笑はれて、却つてお腹の中では、

『今に分るから見ておいでなさい。』と笑ひかへしてゐた。十四日は來た。

歸宅して見ると、家の中は何かしら、でたくくしてゐる。

『明日は結納を受ける日だ。』と母は取りすまして云ふ

私は何共云はなかつた。又云へなかつた。

年から云つても、性から云つても子供々々した私は父母の膝下を離れると云ふこと以外に、嫁ぐに付いての何の悲みも起らなかつた。

それに母は

『未だ年が若いのだし、本人も勤めに出る身だちふで一年位はどちらこちらなしに、度々寄來て貰ふやうに約束してあるで。』とそれを、年若で嫁けるに付いての唯一の辯解であるらしく云ひつゞけてゐた。

それが先入主をなして、何うしても之が一生の別れ

だなど〻云ふ氣は、何を見ても起らなかつた。

まして妻と云ふ名が脊負てくる何物も、幼い心には何の愁ひも呼び出されぬ。

窮窟な小學校の修身談からすべてを律して、それで立派に一人前の女となれること〻信じてゐた。

離座敷から出て來た私と、俥から下りた許りのS小父樣と、ぱつたり臺所口で逢つた時、

『やあ』と一番に浴せかけられた言葉と、重い高髷をちらと見たお目と、それが私の胸に響いた時、はじめて嫁ぐ前の羞恥が誘ひ出す、特種なあはれを思ひ出た

『早いものですな。』小父樣は又、敎師時代に尋常二年の私の、品行點預りの事を云ひ出さうとした風な御樣子、それでも何とかお感じになつたと見えて、

『未だほんの、ねんねさんだと思つてるのに。』

私はほつとした。

『高髷を結ふものだね。』昨日から、髮結に、赤いのと多すぎるのとを何遍か不足に云はれた髮、赤かもじを入れてるやうなと母までに笑はれた束髮の名殘、其髷を小父樣は珍らしさうに、見てお出でる。

髱が支へるので頸を伸して、さぞ可笑しな恰好だつたらうと思ふ。

過ぎ行く日と、來る日との境に立つた夜、私は細いランプの燈を見詰めて、ふと來し方を振りかへつて見た。悔もなく、執着もない昨日の中から、私は何となく仕殘した或物のある樣な、感じを見付けた。

みどりの殼を離れぬひなげしの蕾が、彼のまゝでみどりの實と成り得る物なら、それは私の明日を啓示てゐる姿である。

蝶々の甘い囁や、爽かな初夏の嵐の訪れなど、花やかな情緒を唆る天の恩惠は露ほども受けないで、固い實となつてしまふひなげしの恨みは、やがて私の物足らなさを示してゐるのである。

青年と行き逢ふほどに、何しらに頰に上る若き少女のはぢらひ、柔かい胸のときめき、けれどもそれは私に取つては、或物のほんの一歩にも足らなかつた。

萬人に對して同じ價をはらふ少女の羞恥は、過ぎ去つた少女と云ふ名の紀念として、私が一生胸に抱くには餘りに價ひがなさすぎる。

世には、胸に秘める思ひと、行くべき道との距離のあまりの遠さに、迷ひ迷ふて、可惜嫁ぐ夜に花の生命を縮むる人もあると云ふ。

私は決して、少女のまゝに我が生命を捨てゝ了ふ程

の勇氣も決斷もない。
けれど、葬るべき名の終の、淋しい姿。
此淋しさのまゝにあの貴い少女の名の消えて行くのが惜しい。
捧持しつくした少女の尊嚴、其輝きは時立てば消えて了ふ。
少女と云ふ名に何の飾りも輝きも與へず、葬つて了ふ私は、やがて來る妻の名をも、徒に抱きかゝへて、小さく固く身をすぼめて、俯向て許り一生を辿るのではあるまいか。
其後、姿のあはれさが、すぎし日のみすぼらしさと並んで、瞭りと心の瞳に映る。
私は蒲團の中で寢がへりした。
邪魔になる髱を押へて起きかへる拍子に、同じに夢を結びかねた、それは若い男心の、誇と希望が朧な追憶の面影から、私のうしろ姿を強く照らした。

結婚前後の投稿は數に於て二十六篇集つた、此處には光明面のみ採用するやうな結果となつゞ、暗黑面を告白したものに、澤子さんを初め深刻な告白があつたけれど、到底紙上には發表することが出來ない。其外、すぎね、菖の花、伊藤夕陽、紫花、深雪の方々の作は宜いと思つたが、紙面限りあり、割愛するの已むを得なかつたことを謝す（一記者）

本號贈賞者の姓名

小品文　▲一等、東京牛込、新免さかえ▲二等、對馬嚴原、伊藤夕陽子▲三等、東京青山、町田靜江▲四等、德島縣美馬郡、逢坂蔦紅▲五等、京都上京、廣江曉子▲六等、大分縣中津、森山路子▲七等、廣島縣高田郡、葵の花▲八等、丹波氷上郡、木村さみどり▲九等、京都伏見、わくら葉▲十等、紀伊那賀郡、林口和歌子

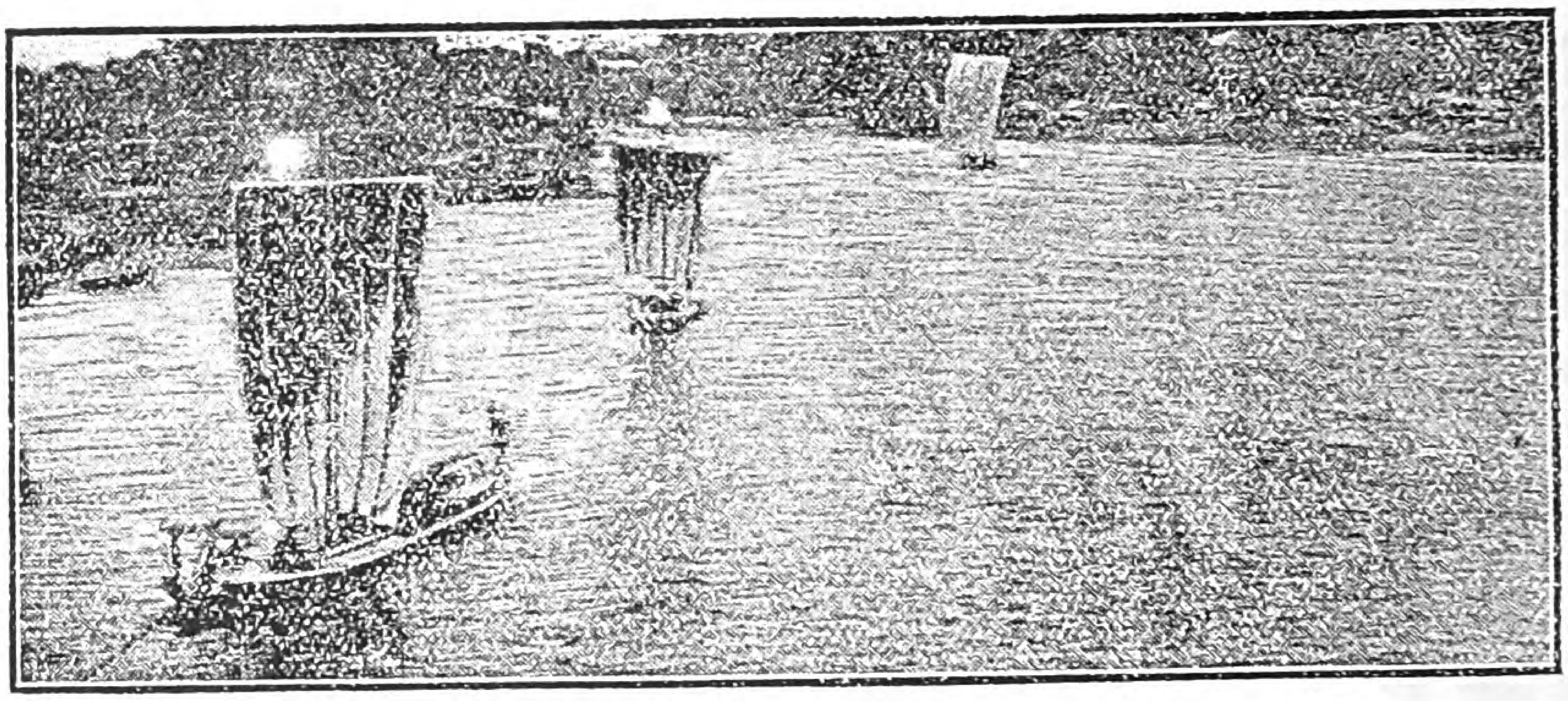
結婚前後　▲二等、福岡縣京都郡、みどり▲三等、茨城縣新治郡、石原桂葉▲四等、常陸土浦、關根鈴蘭▲五等、丹波氷上郡、木村さみどり

和歌　須磨子、松並ひさ、九十子、花守る少女、白妙女

現代十婦人　▲二等、くれなゐ子、すま子、▲三等、秋野まり

子、友子。

右の外溫泉に行く路（米澤、粒木つね）燈臺より（對馬、伊藤夕陽子）つぶやき（岡山縣、みほ子）別るゝ朝（遠江、山路るり子）。櫻實の味（東京、深雪）。下町の娘さんに（千葉、袖子）。店頭印象記（大森、川島鈴枝）。牛の行くへ（阿波、松並菜花）。帝都學生氣質（麴町、櫻木雪江）等の諸君にも薄賞品を贈呈す。



水野葉舟　澤村胡夷　河井醉茗

共選

小品文

武藏野の夜

さかえ

町端れの並木を抜けた馬車は、深い闇の内の場馴れの悪るい礫道を、烈しく動搖し乍ら眞直ぐに進んだ。

廣い武藏野は、しつとりと露ばんだ重たい空氣が流れて、星一つ無く、闇は端も無く廣がつて居た。

私等の乘た國分寺行きの馬車は、燈火の備へも無く、其の上、強い廣原の風を避ける爲に、後の帷帳を緊しく下してゐるので人の顏も解らぬ程眞暗だ。御者臺に付いてゐる、ランプの火は漸く馬の足搔きの見ゆる程、夫れも瞬き勝ちに心細く搖れてゐる。人家を洩るゝ燈火も無く、目路の行く限り此の廣い野に、火と云へば此の夜は、此の火一つで有たかも知れない。

馬車は幾町か行く。

其の間、客も御者も無言だつた。客は從兄のKと其の妹のS子と、私の三人と、夫れから馬車屋の待合室の隅で、愁はし氣に後向きに成て俯向いてゐた、若い女と夫れ切りだつた。

風は夜も知らずひどく荒れて、野とも丘とも無く吹き巻つて居た。空一面に漲つてゐる黑雲は、濃淡く、重複り合つて、其の破目から薄明りが氣味惡るく窺いて居る。其處から電光が奔りはし

ないかと思はれる程物凄い。何處か險惡な兆しが流れてゐる。

風は馬車の後に迫つたと見る間、スル〳〵と五六間先きの地を匐て、ぱつと砂塵を上る。よぢれ立つ砂ほこりは、夜目にも白々と、丁度起き立つ魔物の樣に——そして音も無く奔り去て何處とも無く消え失せる。帷帳の隙間から入る濕氣の多い生暖かい風は氣味惡るく頰を撫て行く。

「荒なきや可いがなあ」と、御者は一人言ちた。

氣まぐれにKは、御者臺の喇叭を取て吹いた。物寂びた音律は夜氣に迫つて、車内の空氣は緩く打顫ふ。軈て二度目の風は其の音を千切る樣に吹去つた。

風過ぎて御者は徐に、口を開いた。

「お客樣方何處ですね、東京ですかねえ」と聞く。

「東京だよ……あゝ」とKは輕く答へる。

東京、私は東京と云ふ語が非常に、耳新らしく感じた。都下幾里も距てぬ此の多摩の人達は、思つたより東京人を物稀らしく見てゐた。若い人達は幾分羨望の瞳で見送てくれた。其の癖都人の往來多い土地だけれど——。僅許り誇らかな感じもする。

御者の爺さんは、繼けて質朴な口吻で、在方特有の語尾の上つた言葉で、Kに何か話して居た。ともすれば、二人の話しは風に奪はれ勝に見えたが、切れ〳〵乍らも聽取れた。

「お客樣、暗闇祭りに來なすつたかね」と冒頭に、ロマンチックな、府中の祭禮の事などを話し、又二三年前、終列車に乘り込むお客を送つて行く途中、追剝がよく出てお客を脅かした事の恐しかつた追憶など、口少に飾り氣も無く語つて聽せてくれた。

話は暫時途斷た。

「馬車屋さん君の國はどこだね」とKは此麼事を尋ねた。「お客さん、此れでも江戸子のチヤキ〳〵でさ」と、爺さんは誇らかに答へたが、多く語らず默して了つた。麼うなつと過去を追憶する樣に、懷し味のある口吻だつた。

私は此の爺さんに何か面白い若い時代の情的な物語りでも有り想に思はれた。

「馬車屋さん……ねえ君」とKは夫れから、面白い話しでも引出さうと思たのか、幾度も爺さんを呼び掛けて見たが、爺さんは聞え無いのか、啞の樣に默り込んでゐる。

馬車は、右手に黑々と茂つた、大きい林の側を拔け

て、麥畑か、闇の内にも他の物より幾分か白んでゐる畑の間を馳つて居た。風が變たのか、眞向ふから襲つて來た砂塵を、馬は、ぱつと被ぶつてたぢろいだ。

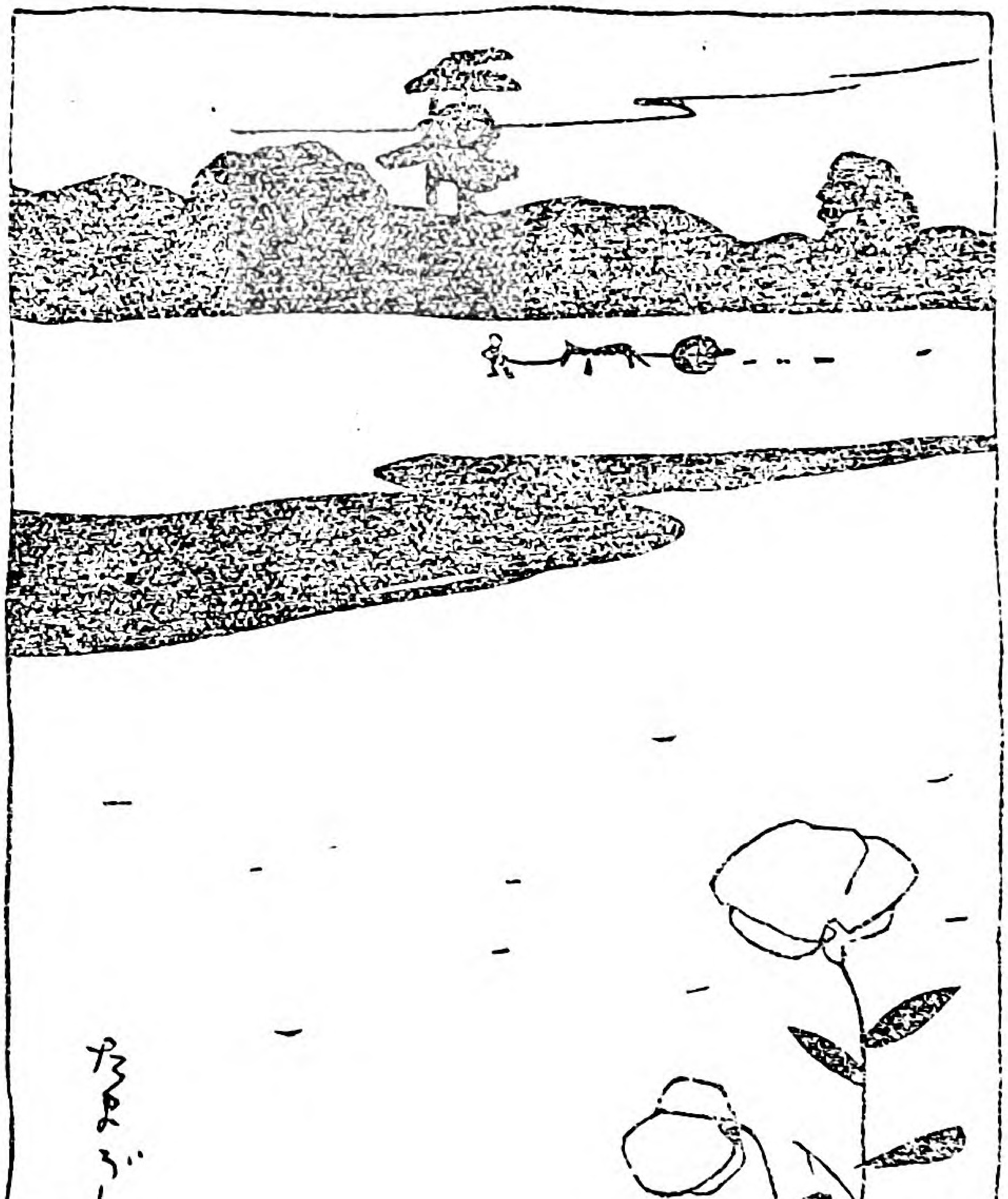
馬車は烈しく搖れた。S子と並で、向ひ側に腰掛けて居る例の女はと見れば、暗い中に着色の色丈け微白く漂はして、俯向いて居るらしく物思し氣である。

御者は鞭を上て一散に馬を馳らした。

Kはコッ／＼と洋杖で床を突つ突いて居たが、思ひ出した樣にづぼんの隱しを索つて、巻煙草を取出した。そして寸火を擦た。パッと青赤い小さい火が燃る。其明りで眞暗だつた此の車内も女の顏も朧氣乍ら覗ひ得た。其の小さい火を便りに三人の目は云ひ合した樣に、女の方へそゝがれた。とも知らず、女も顏を持上げて此方を見た。意外に三人の瞳の自分の方へ向いて居たのに、ハッとしたらしく、俯向いた。

寸火の火は消えた。けれ共Kは煙草に夫を轉して居なかつた。Kは又擦た、此度は擦そこねて、トボ／＼と燃えて直ぐ消えた。三度目には兩手で風を避て上手に付けた。夫れはほんの瞬間の出來事で有たけれど、色白な、瞳の美しい女の顏は、私の胸に強い印象を與へてくれた。Kは一服すつて煙りの下から

「姐さん何處へお歸りになるんです、東京ですか」と突然に此麼事を聽た。



「は、いゝえ」と女は微に答へる。
「そうぢやあ無いんですか、では何處へ」
「あの、八王子」と煩し氣に、然しきつぱりと答へた。
Kは煙草を爪で彈き乍ら、「僕、お送りしませうか」と猶纒つて聞く。「ほゝゝゝ」と女は義理の樣に笑つた。
何だか氣の毒な樣な氣がした。
『東京女だよ』と待合室で囁やいたKの言葉を思ひ出して、私は何が無しに女の身の上が考へられてならなかつた。
Kは詰無さ想に、煙草の吸掛を靴の先きで蹂躙つて居た。
馬車は猶凹凸の烈しい道を馳りつゞけてゐた。

眞珠

伊藤夕陽子

太陽は有明山の禿野の果に沒したけれど、暮れるにはまだ二時間もありさうな、此頃が一番日の長い時である。
繃帯したひとさし指を右の手の上に載せて幾分怖げづいた瞳を、打水した裏庭のすべてに投げたけれど、ツキツキと脈を打つやうに秒を置いて痛む小指にばかり氣を馳せて、涼やかな夕暮の風の心地はよいけれど繃帯の隙から切つた赤い肉が少し見えてゐる。爪の間に沁むやうにも思うて、何となく心細い。外來の刺戟殊に身體に受ける事に對しては、割合に臆病な私は「痛くもどんなにもない」と思へば思はれる程の傷を何もない、此頃の私にとつて捉え得た悲しみと云へばお可笑いが、痛いと叫へば、その反動でさゝやかな要求がみたされる心地がするので、無理にも不安の色を現はして椽の柱に靠れてゐた。
私があんまり大袈裟なからでもあらう、さつきは繃帯やなんかして呉れた姉に、でも少しは笑つてゐたやうにもあつた。痛みはどうだ位は尋ねてくれさうな物と思うてゐたけれど、姉は何にも云はぬ。夏の空は澄んではゐれど、何處となく夕もやが迫つて來て、隣り比に近い南天の白い花がふるえて見える。
所在なさに手を抱いたまゝ、足を疊に摺るやうにして臺所の方へ行くと、襷がけのまゝ雑巾を投げ出して板の間を這ふやうにして、姉が何か探してゐる。板の繼目々々をことさらに注意して見透してゐる、何を探

すのだらうと思つたけれど無言で見てゐる、今度は疊のへりを見まはつてゐる、姉も答へず、私も尋ねず無言の中に只二人の息のみが通つてゐる。

「最う駄目」と投遣りに云つて火鉢の側にがつくりと首を落して座つた。

「どうしたの何か落して」「之――」見れば左の指にはめてゐた指輪の花の芯が拔けてゐる。

「あら落したの」私も急に驚いて暫しみいつてゐた。

「外には出てゐないし、清チヤンが筍を切る時ね、あの時迄はあつたの」

　あるべき物がなくては淋しいもの、指を見てもいつものやうな美しさがない心地もする。

　若しみつかつたらと思つて、今度は私が中腰になつて火鉢のまはりから、板の間障子のあひ等見まはつたけれど、瞳の中に入れても痛くない程の、乳白の玉は姿を見せなかつた。

「灰の中に入つたかもしれないよ、そしたら出る事はありはしない」電燈はボンヤリと點じられて、明けはなした家の中は、うすくぼけて見える。諦めたとは云へ執着心は慥かにある。火鉢の側から大きいボッチリとした瞳を、屆く限の隅々迄送つて、さゝやかな光の跡を辿つてゐる。

　日は全く暮れて仕舞つて、硝子越見ゆる外通りは、自轉車乘りの稽古に熱心してる良さんがやうやくすわつたらしい乘り振で、幾度も鈴を鳴らして通る。

　灯の光はあざやかにみとめられるけれど、細かな物までをも射るには、やつぱり何處となく弱い。私の手の痛みは去つたらしく、抱いてゐた手がいつかひばしを持つて灰の中をかきませてゐた。

　眞珠玉は遂々見つからなかつた、姉はいつになく無言で對ひ合ひに座して、私が搔きさがす灰の中を凝視してゐた。

テントの家

しづえ

一月の裾野の住ゐは靜かであつた。

　教會史の編輯に餘念のないミスタ、スペンサーは、終日天幕に籠り切りなので、私等は其邪魔をせぬ爲め程近い山毛欅や落葉松の雜木林の、涼しい木かげにテント用の布を敷いて、思ひ〳〵の讀書や小さな針仕事

に日中をすごした。

　下女の藤は隔日に朝片づけがすむと、近くの村迄玉子や野菜るゐを買ひに出掛けた。歸りには屹度すぐテントにはゆかず、大きな籠を抱へて私等の方へ來るのだつた。粉をふいた黑いやうな葡萄や、赤い色のよい林檎や、白いキャベツの蔭から恥づかしげにのぞいてゐた。此時いつも獻立の相談をするのであつた。

　ミセス、スペンサーは多く白か空色の服を着てゐた。帽子を被らぬ髮は無造作に下の方に束ねてあつたけれど、耳の邊ですこしゆるめた髮のかげの、白い小さな形のよい耳朶には、碧い小さな玉がみえた。絲のやうに細い金の輪に、ゆら〱する其玉をみる每に、私はいつもあの忘れな草を思ふのであつた。

　ミセス、スペンサーは直徑六寸位の白い麻布に、同じ色で野菊や撫子を縫つて、美事なお皿しきを幾つもこしらへた。器用に動く手先に見とれて、よみさしの本も其儘、私は茫然してゐる事が多かつた。

　日が落ちて、涼しい風が果しない野を渡る頃、私はいつも食卓の花を摘みに出た。素足に草履をはいて、乳のあたり迄ある草の中をゆけば、さや〱さや〱と音して分れるかやは、又忽ち一つになつて前から後から私を包んでしまつた。花は多く水色がかつた薄紫の山蘿蔔で、眞紅の常夏は眼ざめる許り鮮やかに其間を彩る、背の高い淋しげな月見草は、星のやうに點々として、夢といふものを形に現したやうに思はれた。足音に止む蟲のこゑは又いつか野一杯にひろがつてゆく。晝なれば日ざしを壓して聳え立つてゐる峰も、薄もやの中に只其れかとたどらるゝ程の立づまひ月が上つたら、晝みた白雲の浮んだ邊り迄いつて見たい、月が上つたらと思つて、冷たい草の上に座つてゐた事もあつた。折り取つたさゝやかな草の花の名も知らぬのを胸かけに抱へて、袂も裾もしつとりとぬれて歸る時、霧のふる中に三つ並んだテントには、明るく灯がついて、入口に立つて私を待つミセス、スペンサーの姿が浮き出たやうに見えてゐた。私は稚い子等のするやうに走り出すのがつねであつた。

　或日の夕ぐれ、珍らしい一人の客が、此の靜かな住ゐを驚した。其れは思ひがけなくも、ミセス、スペンサーの從兄であつた。

　其夜、心許りの宴が食堂書齋兼私の寢室の眞中のテントで開かれた。純白な卓布の上にはあちこちに薄を散らし、きやしやな伊太利製の花瓶には、撫子や釣

鐘草が挿してあつた。半頃ミスタ、スペンサーはつと立つてなみ〳〵注いだカップを高く捧げながら、『健康を！』と云つて、ミスダ、ラッセルのカップに當てゝ、カチリ心地のよい音をたてた。

席にある人はさみしかつたけれど、客は若々しい眉をあげて、駝鳥におびやかされた砂漠の旅や、碧い空青い水の南國の都や、物語はいつ盡きやうとも思はれなかつた。或時は卓上の赤い花を指して、默つてゐた私に、日本の少女のやうなと云つて笑つた。又ミセス、スペンサーのヴイオリンを取り上げて、巧みに左手でゴット、セーヴ、ザ、キングを彈いた。こうした遠い異國に來て、聲を合せて故國の國歌を唱ふ人等をみて、私はいつか涙ぐんでゐた。

其人が一週日の後には横濱を發つて、晩香坡に向ふといふ事、其れは後になつて聞いた事であつた。



明けの日、客は白リンネルの上衣の胸に、メランコリーの桔梗をさして、まだ霧の深い野路を、勢よく爪先につゆをけりながら歩いていつた。路傍の短い草に混つて薊の花が淋しさうに咲いてゐた。やがて私等は細い燒砂路が石ころの多い馬車道と合ふ所に立つた。親しい別離のことばが幾度か繰りかへされた。最後に微笑ながら、白い大きな手をさしのべて『フエヤーウエル、マイ、リツトル、フレンド』と云つて私の手を振つた。けれど私は只頭を下げる許りであつた。

幾度か振りかへり〳〵帽をふる姿の、次第々々にもやに隱れてゆくのを見送りながら私の思はさみしかつた。止るもゆくも旅の情緒の動く

がまゝに、何にも囚はれないさびしくも亦自由な若い漂浪者を、其ときしみ〴〵と羨しいと思つた。其限り其人のことは聞かない、ミセス、スペンサーもミスタ、スペンサーも、もう日本を去つた。

かうして過ぎてゆく年や月や、私の知らぬ空の下、私の知らぬ星に照らされて居るであらう其人は、裾野の小路にふと遇つてふと別れた、肩上げの深かつた日本の少女を、まだ思ひ出すことがあらうか。

桐の花の頃

蔦江

河を隔てゝ一段高い地に、美しい朝日が半分程クッキリと光りを投げて居る。かげ地の方にある一本の桐が花盛りだ。未だ露を帯びて居るシットリした緑色の其若葉の茂み合つて居る中に、淡紫色の桐の花が高く色彩をはなつて居る。

見て居る中に朝日がだん〴〵桐の方へさして來た――――上の方の花がパッと明みの中に模様の様に浮出た。緑葉は先刻より濃く見えて、パッとした紫の花にうつり好く、矢張シットリした色を保つて居る。

良い花の香や高い氣をみんな集めて居る樣に思へて何時ともなく、すが〳〵しい氣になつて引入れられたぢつと見て居る瞳が次第に少しづゝ勞れて行くのを覺えて來た。とフラ〴〵して來たので私は目をつぶつてよつてゐた窓にグッタリ頭をもたせて仕舞つた。「最つと見たい」と眞から惜しい氣に充ちて幾度か頭をもたげて見たが、目は開けられなかつた。美しい今の幻影が瞑目して居る前に强い色彩をはなつて浮んで居る。劇しい熱に病み勞れた心身には此れだけの事さへに耐へられなかつたのであつた。

「さあ熱がとれてるからお眠り」母はジメ〳〵した肌の汗をふきとつて呉れてはよく斯う云つた。「えゝ」とうるみ勝ちな眼を閉ぢはしたが、病みおとろへた間にも、夢を結ぶ迄に心は平穩でなかつた。

「心のいたでを守つて涙せよ。否ものみなに對する執着心を絶ちて　刹那に生きよ。」と斯うした懊惱に、思ひ詰め兼ねては病みに奪られ〳〵した。

もの言はれ、見詰められても涙ぐむ樣になつた子はやつとゝりとめた眞劍な心の一つの叫びに、未だ身も心も抵抗爲難い、病みの力の恐ろしさに震へた。

木々の若葉が風にゆれて、白い葉裏を返へす頃譯もなく涙ぐんで懐かしい過去の追憶に心をそゝられる、しんみりした輕い氣持の五月、其れは旅をしてからであつた。

「此の山をめぐると、直ぐ其の湯の里でござんす」知らぬ人、旅の者と斯う掛け離れた心持の中に、斯う云つて若葉の山を指し幾歩を移す間、尚見守つて居て呉れた知らぬ人に親し味と快味とを覺えた私は嬉しさに胸を抱いた。

何がなしに重い樣な心を抱いて旅に出た私と母は其の鑛泉湯の里に一週日を、何物にも囚はれず落付いた朝のすが〳〵しい淸らかな湯槽の中にも、まひるの明るい湯の中にも、淡い旅愁を覺えながら、心は輕く明るかつた。知らぬ人と語つても猶然であつた。

國境を越えて、異なる地と云ふ事が、わけもなく嬉しく、何物をも考へさせなかつた。重いそして慌しい心と、全つきり掛け離れた心持に、何時も暢びりして居た。怎麽快味は何所でも味はつた事がない樣である。斯うした心持ちが胸の何所かに生きて居て、葉裏返しの風の頃を憬がれに憧れた私は、其旅の三度目の五月は、旅の追憶に涙ぐむ只に美しい涙ではなくなつた。

淸かるべき、はた深刻なるべきおきてなる戀に、ふと暗い影を認めた私は、ともすれば我が身を忘れかね心の何所かに秘む不安、恐怖におびえて、何物をも惜しまないといふ心持を自分にも缺いで居た。自分は何時も對岸に在らねばならぬとの樣に、影を其所に認めて居た。唯引きづられて行く其の味氣ない心を消す爲め怎麽に努力したか。而も遂に徒勞に歸した。

最後。あゝ美しい人は美しい形骸にとゞまつた。

而し自分はかるはづみな心のやり場であつたと悔いた許りでは許されず、其所にさらけ出された形骸、とり返しの付かない心の傷創をうけた、自分の慘めな一つの影を認めずには居られなかつた。

虛僞多き世、將休まんとせし人の胸のたのみ無きを知つて、凡ての事柄に悲哀とさびしみの伴ふ心は衝動を起しながら、人と世に撥して行かねばならなく成つて居たのである。

あゝ私は、心の叫びにつれた自分の性の表現を、世と人の前に見失つてしまつた。否、自己獨りの前にも弱くて、あらはな自分を見る事が恐ろしいのだ。

人を怨み、運命の辛き絆を呪ふよりも自分をせめなければならない事を悟つて怎麽に涙を流したか。

何所までも暖かい母の愛をうけるには、餘りに母が清くて虚僞の心を見透かされる樣に思へたが、其前にもなされる儘に、うるんだ瞳を伏せて尙默して居た。此れが何よりも苦痛なのである。

劇しい熱を痛み、母の手一つに看護られて漸く自分でに、淸い朝の氣を吸ふまでの力に復した私は夢より外に性のまゝな自分を認め得られないと云ふ心を抱いて病の床から起きたのであつた。

何にも囚はれざる、又何の擴張もない眞の自己を見む爲めに、弱い〳〵私は此れから寂しい形骸を守つて唯夢に憧れを持つて生きてゆくのである。

其所には眞の淚も微笑も許るされるのである。あゝ何所かに美しかつた自分を見出さねば濟まないのである。夢よ、幸に此の心を破らないで呉れ。

白河へ

廣江曉子

誘はれて山に入らうか、昨夕ほとゝぎすの鳴きわたつた方へ、道はおのづとつゞいて居る。

しつぽりと濡れそぼつ草の葉にも、まだ短夜の夢の殘る五月雨の朝早う新しい傘さして神樂ヶ岡の裾を行く。

雨にのみつゝまれてあるいて居る淋しさに、しほたれた袖や裾のしつとりと肌にそふのもなつかしう、うつむいてばかりあるいたのもしばらく、家々の間をぬけて、やがてその屋根を足下に見る程に坂をのぼつた頃には兩側からおほひかゝる樹々の濡れ〳〵て滴るばかりあざやかな新みどりの髪にも頬にも指先きにも、つく息、吸ふ息に迄も、さつと照り映えるやうに覺えてしめやかに湧きいづる感興のうちに、いつか淋しさも、家を出てからの道の遠さも忘れてしまつた。

昨夕何がなし切つて見たさに、紫のきれの間へ、きらと光る鋏の刄を入れた瞬間。

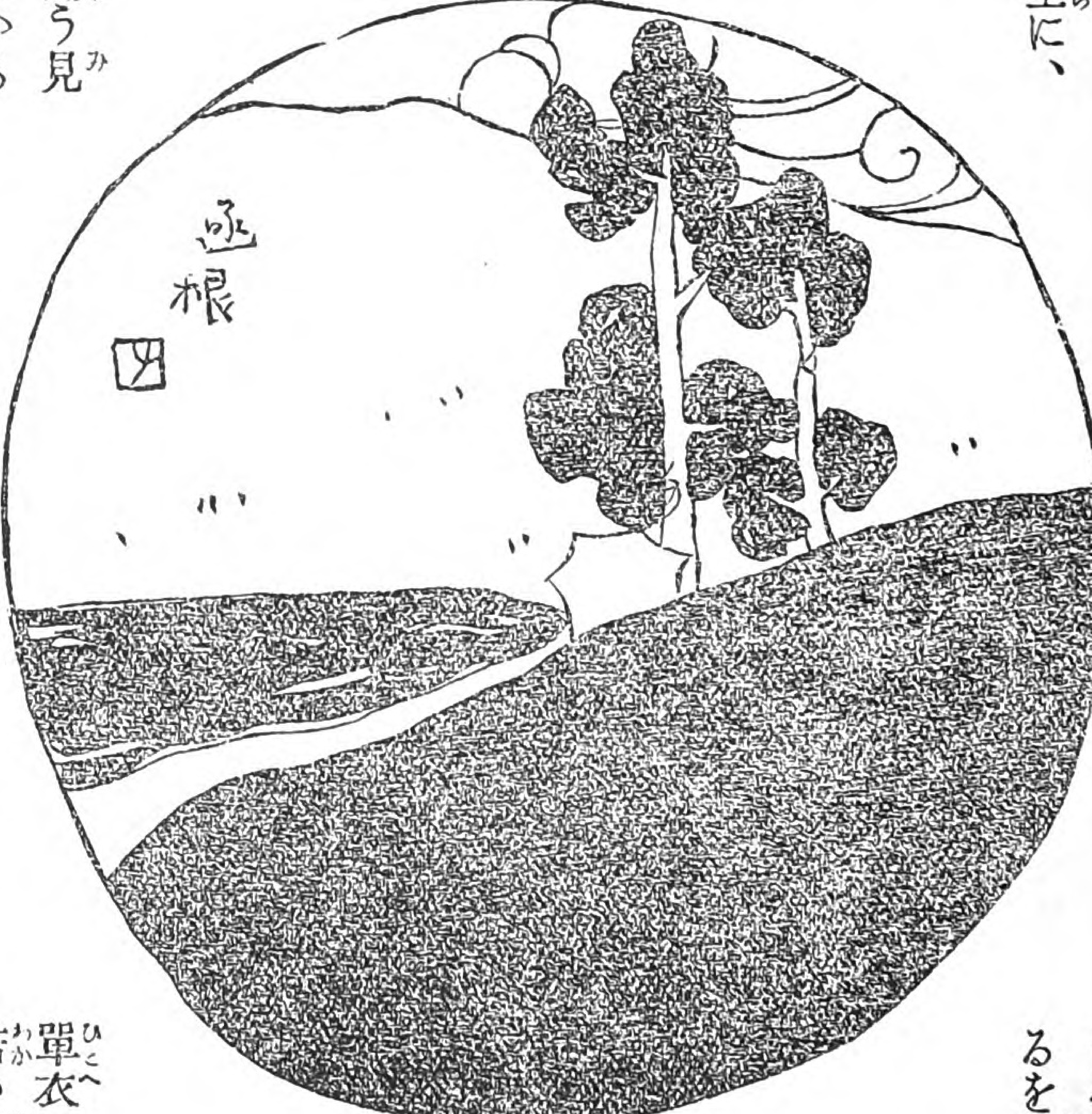
きゆーつ、と鳴くほとゝぎすの音をきいた、やゝ遠い南の空に、次いで胸にひゞきの心地よい鋏の音に、すら〳〵と濃紫の二つに分かれる刹那、また一聲、今度はつい近い屋根の上で、思はず燈火の淡い光りの漂ふ空間を見つめて、ぢつと祈るやうに待つたもう一聲は、遠く〳〵かすかに、鳴いたとも鳴かぬとも、それと思はれたのは私の耳の空音かも知れぬ。

聲は丑寅の方へと消えたのである。私はほつと息をついた、胸は云ひ知らず微妙にふるへる。

つと立つてのぞいて見た空に、月光は青味を帯びてうつすりと濡れて居た、あゝ青葉の息にくるまつたやうなこんな晩、濃みどりの琥珀の長い帯が縫ひたい、琥珀のかたい地を刺すいたみの、指先きから胸につたはるあの銀の針が持ちたい。

夜の鳥にふと誘はれたてこゝは、更くる夜を果てなく物にあくがるゝのであつた。

明日の朝は比叡も鞍馬も如意がたけも、あざやかに近う見えわたつて、どんなにか美しからうかと思はれたのに、今朝は靜やかな雨が降る。



遠方の人への心あてに町より白河の方さして、ほとゝぎす只今三聲鳴きわたり候、とかきさして、後をつゞけなかつた手紙の今もそのまゝ机の上に捨てられてあるを思ひだした。かゝりし夜の情調のかたみ、破るには惜しく、そのまゝにおけば、いつか物にまぎれてしまはう持つてくればよかつた、その白河の里川の末にでも流したかつたものを。

今こんな想へを抱いて、一歩〳〵雨霧の中に消えゆく私の姿は、淡墨の一雫よりも淡いものであらう。

しつかりした足駄の音が後から近づいておつとりと追ひこして行く、長う着た單衣の裾のすらりとした背の高い若い男の人であつた。蛇の目の傘が崖から長う手を延ばした千駄の葉にふれると、さながら水晶の環の千切れたやうに、ばら〳〵と重さうな

美しい雫が散つた。

崖をめぐつて白河女があらはれた、風雅やかな姿に似ず、額にしわの跡の深い骨太な五十女の、鐵漿かけた齒のみがめだつて黒々と光る、雨はおのづからいただく花笈によけて、苦もなげにさつさと行きかけたがふと後を見かへると急に足をゆるめて、ぼつ〱と人を待ち合はすらしい。

間もなく水溜りを除け〱同じ姿に桃色のたすき花やかな娘が來た、美しい娘だ、やう〱追ひついて何か二言三言話しかけながら、婆の早い足に後れまい後れまいと、せか〱してまたしても草鞋ばきの足下のみだれ勝ちなのもしほらしい。

飛白の三巾前垂れに細くしまつた腰のあたり、紅友禪の太紐が眼さむるばかりはでやかに、白い脚絆も清清しい、無雜作に冠つた手拭が自然に品やう、その端をこぼれて黒髪の一すぢ二すぢ、白い頰にみだれかゝるのも艶な、雨をいとうて合羽はかけてあれど、その端洩れて香ひいづる黄菊のあざやかさ。

摺れ違ひしなに、傘の動いた先の人は、行き過ぎたかと思ふと、つと立ちどまつて振りかへつた。

おい、その菊買はう、……　……

はつきりした聲が私の胸にもさわやかに感ぜられた二人の花賣りは同時にふりかへつたが娘はうつくしい眼にちらと、傘の中なる人のりゝしい眉を仰ぐと、つとそらしてその眼にまた婆の厚面しげな顔を窺がふ。

あいやい買うておくれやす。

太い聲と共に、道端の石の上にやつてこらしよと花笈を下ろして婆は早や人もなげに合羽をとりかける。

千鳥草、百合撫子、矢車草、いづれもあざやかな六月の花の行儀よく寢て居る上に、黄菊の花はぱつと明るく擴げられた。紫や白や紅や、色樣々な花片に、銀の雨の絲がすい〱と落ちる、見えぬ程のか細い蕊に降りかゝるのはいたましい。

かゞんで枝を分ける間、娘はかたはらにたゝずんでいたゞく花笈のこぼれかゝる黄菊の間に、白い手をかけて、にごりのない純な眼を、雨霧のけぶる遠くに馳せて居る。

高からぬ岡も頂は見えず、つい向ふの黒谷山もおぼろげに、眞如堂の塔が夢のやう。

年よりの人もなげな振舞の小憎さ、娘の髪を押さへて重さうな、そしてあの白い手に思ひなげにもたれかかる花があはれになつかしい、我も人も同じこゝろか

たけ高き人の眉がそれらしく動いた、その間に私はゆる〳〵と通り過ぎた。

　あの娘の呼び聲がきゝたい、寂しい道の岡のはづれに盡きて町に入る頃、二人は別れるのだらう。

　花や番茶いりまへんか、美くしい餘韻の何時迄も耳にのこるあの聲、主は知らねど朝毎にきゝなれて、忘れ難き聲の一つを、そつと今見た可愛い紅い唇に合はして見る、憎い程心にのこつたあの姿を抱へゐやうに思ひつゝ行く。

　何時か道は崖をめぐつてさゝやかな雨のひゞきが深く深く胸に沁み入る、如意も見えず、華頂も見えず、同じ程な圓い小さい山と山との一つは盡きて、如意の裾迄遠く麥かりさした畑がけぶつてつゞいて居る寂しさはいよ〳〵さびしい、やがて後から先の人が傘の柄に花束をそへて靜かにきた、何か知らゐがく面影あるらしう、濃い眉の下の男らしい眼がいつ迄も雨の地上を見つめて、外に眼に入る物のない道、さびしい道の長ければ長いだけ、若い花賣女は忘れられずに居よう。

　雨の音、落ちついた足音、細い路は靜かに岡の裾をうねつて白河の里へとつゞく。

ひとり

森山路子

　町づくつては居るがこゝら邊りは、もう郊外に近いので闇は大きく、軒燈は疎らに灯は寂しう街の兩側を縫うて居る。

　さつ〳〵と行き過ぎやうとすると「新築の方は早くから門を閉ぢますから、此所からどうぞ、」と、姐が後から言ふので、其まゝ默つて旅館らしくもない嚴丈な御影石の門を入つた。隨分廣い庭が、青味を帶びた輝かしい星に一層深みを增して、硝子戸を洩るゝ幾十の電燈の光りは、よく茂つた庭木を、淺う美しう透かしては居るが、中ほどの大きいアーク燈の光りさへ、數多い木の黒い幹に薄つすりとした明るみさへ匂はせないのである。新しい木履は打水にしつとりと濕ふた敷石の上に客らしい音をならして、晝間初めて來た時には目にも着かなかつた、石の兩側に並んだ圓うつまれた草黄楊の白い花が、小米のやうにほろ〳〵とこぼれて居る。

　花電燈の灯は金泥美しい塗縁の衝立に滑つて、ひつ

そりと人の影も見えない、女は勝手にまはつたのか傍には居なかつた。

敷臺に上ると、何の氣もなしに足袋を脱いではたはたとはたき合せて、はつと邊りを見廻した。歩み疲れて重い足を引ずつて家に歸へり着いた時、まち構へて埃りつぽい足袋をぬぐのが癖になつて、其麽習慣がこうした場合無意識に表はれるのが、何となく賤しいやうな氣がして急いで廊下へ出た。

客室は長い廊下に沿うて、明々と障子を染めて人の話聲も聞えぬ。此家の客は、湯治ではなくつて氣保養が多いので、街に一つ二つづゝ灯が見え初めると、美しう髮を梳つて、何處ともなく蝙蝠のやうに出て行くと言ふ。

紙を透した明るみは、水を流したやうな眞直い艶やかな上にほんのりと一樣に浮いて、暗い庭へと漂うて居る。歩む度の、唯一人の衣ずれの音は、上履の底にしみて素足に觸るゝ、すつきりとした冷たさは。先刻から云ひ樣のない壓迫に强硬つた唇をゆるめて、時々忘れたやうにぼんやり立ち止つてはあたりを見た。人つ氣のないやうに靜かである。部屋に入るまで誰にも會はねばよいと譯もなく其麽事を願ふた。

溫泉の湧く港の町の夜は、暗う上を蓋ふた空が堪へられなさ相に思はれるまでに、まぶしい灯の中に、てんで生國の異つた若い男と女と、聞き分け得ない雜音とは、一寸も佇んで居られないやうに混亂し熱狂し動搖して、新しう其渦卷きに入つた私を、とりてにすゞやうに、胸苦しう官能を襲うて來た。町の三分も行かない内に、總ての色目は、濡紙を隔てたやうに形もなう滲んで、音響は遠くの後の方からたえ〴〵聞えるやうになつた。

今頃影のない明るい顏をして、未だ親しみもない宿の姐と一所に、若い心の泳ぐまゝに足も空に、人波に押され〳〵て歩て居る友を想うて、そしてこうして別れて一人かへつて。感覺の靜平にかへらうとする間の物憂い我儘な？氣分を、人に交つて居ずに靜かに一人味ふのがどれほど心安う懷しい事であらうか。

さら〳〵と、どつかの湯槽から新しい湯の溢れて、樋を流るゝ音が聞える。一段高くなつて新築の家に入ると、木の香は輕う匂うて、明るさは增すのである。廣い階段を、重い足に上履が歩み苦しく登つて、右手の離れた明るい室の前へ行つて障子を明けた。と可笑しいやうに鋭どく視線が習慣的に四角う走つて、

留守中誰も入つた人はないと確めると、それと同時に受けた直覺的な腹立しい感じに、改めて見直した。出たきり、誰もさへぎりてのなかつた電燈の光りは、十疊の室に餘るやうに、見れば見るほど未だ親しみのない部屋の總べてが憎い樣に輝いて居る、それが照れかくしにかくしてかくし終せなかつたやうなくすぐつたい輝しさである。

手にもつた小さい包みを落すと、から〱と姪への土産の葉鐵の玩具は箱の中になつて轉んだ。

何とはなし、湯にも入る氣にならずそのまゝ緣のはしの籐の寢臺に腰かけて、二尺計り明いた間から見える黄色い部屋壁を見詰めて居た。



ばた〱と足音が續いて、階段の口から先刻一所にかへつた女の晴々しい顔が覗いた時、此行つまつた樣な靜けさを破つて呉れた嬉しさに、目まで動して美しい笑をみせた。「晩くなりまして…………」と笑ひ乍ら汲んで呉れた熱い茶の淡い香に心好う一口含むと物言はなかつた暫時に生溫う變な味になつて舌を流れた。姐は可也暇どつて二つの床を敷き終ると手持無沙汰に硝子戸の傍へ佇んだ。こんな時、何か話して見たいと思ふ心はもや〱して居るけども、旅馴れない爲と、ともすれば出る聞き苦しい方言に、ためらうて居る間に

女も間が惡る相に「お靜に」と、終りの言葉を殘して去つた。下際に隱るゝ紅入りの大模樣の帶、桃割の髮と順々に見送つてなほ聞えずなるまで足音を追ふた。そして目をあげた時には前と全然異つた情調の靜けさは又襲うて居た。

水の中の樣に透き通つた靜けさ！其靜けさの底にふと半日餘りではあるが、全然忘れてた「家」を見出した、古い大きい四方明けはなした家！、眉をひそめて居る間に、××、△△、と交渉の多い人から現れて、蒼白い造物のやうな顏を並べて凝つと此方を見た。あの、私が振り離してまた砂の交つたやうな生活！目を蓋うてつと立上つた。旅と云ふ者に依つて珍らしく味ひ得た今迄の靜平、今迄の餘裕、それを皆破られて泣きたいやうな氣分で、無闇とそこらの廊下を歩んだ。明日はもう終る短い此度の旅行！その間だけでもあの見倦いた人の顏を思ふまいとは、思ひ立つた日からの願ひであつたけれども。

むらさきのダリアと黃なるダリアとの
日にうつぶしぬ花の重さに
ひた〱と波うちぎはに寄せられし
海草の 葉は 遠くより 來ぬ

ちぬ男

郭公

葵の花

「桐の花は何月頃咲くですか？」と白雪の小止みなく降る日きかれて「さあいつですか多分五月でせう！」と曖昧な答に疑はしい面して其まゝ去つた都の友に、あの色も床しい薄紫の一輪二輪を封じ込めてお送りしようか知らなど思ひ乍ら、裏の野菜畑を通りぬけて雜木林に續く桑畑とすく〱と氣持よく伸びた麥畑の間の、細い草道をあゆんで居た。蒼い大空に薄紙をはつた樣な雲の色と境して、曲線を引いた樣な前後の山の頂から頂迄山も森も、丘も野も河も、見ゆる限りは綠の色が漂うてゐる、初夏の活々した太陽の光りが其の邊りの木々の一葉一葉に宿つて、纖細な葉脈が紗の樣に透いて見える。

芳烈なる薰と新綠の歡樂とにみたされた林の中に、私はいつか足を止めてゐた。四面みなあをいガラス板もて作られた室に這入つた樣な、暗い心持に周圍の重つ苦るしい空氣に壓迫せられて、全身が綠化しはすまいかと思はるゝまで、私はみどりに吸はれて居た。そ

して偉大なる自然の力にうたれて、呆然偶像の如くつ
つ立つて了つた、幾重か重なつた青葉は、天幕の樣に
頭上を掩ふてゐる、微細な光線は葉と葉、枝〻枝との
僅なすきからも洩れて、雜草の上にこぼれてゐる。優
しい衣ずれの樣な音立てゝ、そよ風が梢に訪れ、地を
見舞ふ時、萱草の丈長い穗先が忙しく躍る。三味線草
の多い草原には、鬼あざみや、乳草や、蛇苺などが、
淡紫や、赤いインクを點々ちらした樣にこぼれ咲い
てゐる。稀にはおくれ咲きの紫雲英が青草のかげから
愛らしく覗いてゐるのもあつた、みどりにつかれて痛
くなつた私の頭は、フラ〳〵と淡い眩暈を覺えた。私
は木にもたれて暫し憩ふた。

盛りをすぎつゝも尙處女の誇に執着して、若々しい
笑を面にたゝへ乍ら、一歩々々暗い間の淵に足をふみ
入れて居る女を、私はふと思ひ出さずには居られなか
つた。

陰鬱に沈める森よ、丘よ、お前の胸にはたへがたい
表面に見せてゐる歡樂よりも、もつともつと深い暗い
淋しい悶を包んでゐるであらうねえ、遣る瀨ない憂愁
と痛苦とを包んで居るであらうねえ、ふとほの暗い森
の中からカッコウ鳥の聲が起つた、私は何んとも云へ
ぬ懷しいものを見付けた時の樣な嬉しい氣分になつて
ふら〳〵と其の方面に二足三足歩を移した。丁度一年
振りに……いゝえ、いゝえ、もつとずつと以前から、
私の腦裡にあの悲し相な聲と、そして或一つの物語と
は深く鮮明に刻み込まれてあるのだ。其の時は七八ッ
計りの少女であつたと憶ふ、眉のあとの青い若い母は
親切に語つてくれた、德坊と勝坊と云ふ二人の仲のい
い異母姉妹があつた、母は實子の勝坊を强く愛してゐ
た、それ丈繼子の德坊にはつらく當つた、德坊は繼母
の虐待にたへかねてふと家出して了つた、勝坊はなか
のいゝ姉の德坊が居なくなつたので、淋しさと姉戀し
さの情にたへかね、是れも無斷家をのがれ出でた、母
は悲しみの極み身を鳥と化して我愛子の行方を求めて
ゐるのだ、と。

幼い少女の純なる心には、此の悲哀のこもつた傳說
が如何に深く鮮に刻み込まれたであらう？近き過去に
實現されてゐた事實の樣に思つて、樣々に想像しては
其聲をきいてゐた。そして其の哀れつぽい懷しみのこ
もる聲と、寂しい私の心とは、いつとはなしにはなれ
がたない氣脈が通じて、何者を持つてするも引き分く
る事の出來ない程親しく密着してゐるのであつた。其

の聲！、私の心に響く其の聲は、口にも筆にも表す事の出來ない一種の親しみがあつて、それに依つて慰められた事も決してまれな事ではなかつた。母に取り殘された寂しさも、人知れず抱く處女の悶も……かの聲はよく私の心を了解して、其時折りに應はしい響をつたへてくれた。さうした内に幾年かへて、私のハートを流るゝ血の色も幾度か變遷して、幼い記憶の一つ一つは煙の樣にまた水泡の樣に消えてゆく内に、これのみは何者かによつて固くくゝりつけられてあるかの樣に周圍の印象の消滅する程鮮明に浮び出て來るのであつた。いつか或る書物の中に、此事が「郭公」とかいてほとゝぎすの事だと記してあつた。私は私の確信をそがれた時の樣で何んだかあつけないものたりない感が起つた、だがほとゝぎす其の名は私には矢張り懷しいものゝ一つであつた。

　それに先刻の傳説が、先入主となつてゐるので、私の氣分を轉化さす事はどうしても出來なかつた。

沈鬱なる青葉と、悲哀の聲の郭公と、荒漠たる私の心とを十して＝何者かを得ざれば止まないわたしの心が、いつの年も此の頃になると盛んに動搖するのであつた。

飛行機

さみどり女

天王寺公園の木立を縫ふてゐた日光は、なゝめになつた。大てまるの白い花が崩れる樣に咲いてる側の電信柱には、飛行機墜落武石氏危篤との、號外が張付けられた。

　京都深草にて下降の際としてあるのを見ると、人は皆今日の彼の飛行振の目ざましさを思ひ出して、ある筈のない事の樣に思合つた。

　足許の池水は、代らぬまゝに黒く澱んで、てでまるの白い花がこぼれて浮き、つゝじの花が崩れてたゞよひ、それらも大方は色がうつらふてゐる。

　人々は其水の中へ目を落した。

　居ると云ふ緋鯉も浮いて來ねば、水は平に落着いてしみの樣な落花さへ、ちらとも動かない。

　澱んだ水、灰色のしみ、人々の目には明かに、今日の彼の空の氣色が浮んで來た。

　落着きに落着いた此水の面に、こばり付いた此花のやうに、飛行機は少しの微動をも、意識させなかつた

それは神術のやうに、迅き運行の最中である。
灰色に煙が重なつた西南の天空から、蜻蛉大の機體が目に入つたと思ふ間に、早や機械の音は手に取るやうにきてえて來た。
人々には夢想兵衛が乘つてゐた、凧の畫がはつきり思ひ出せた。翼、尾、彼のまゝの恰好である。
機體は少しの搖ぎもなく裕然と靜止した形を、人々の目に送つて來た。
そして機體自身は、世の人々を包みめぐる、すべての速力の中で、最も急激な極度を持つて、空を半週した。仰げる人の鼻の先には輕い壓迫を感じた。
つばさの色が黒と赤と、日光を受けて人々の目に映つた。段々大きくなる機體の尾の上に、丸い小さい乘者の姿が、黒く輝やくやうに人々



の目を射た。
人々の鼻の先には、急に又輕快な感じを覺えた。皆無意識に足を爪立たゝ
機體は後半週の間に、輕妙に上昇する。
翼や尾や、大きかつた形は、漸々小さくなつて、銃丸のやうな一個の黒い影がやがて人々の目を突離した時、皆はほつと息をついた
すべての雜念から逃れ得た！強烈な酒精にも勝る―
彼の感興の醉心地を人人は夢見る樣に思ひかへしてゐる。
幾萬と云ふ人々の目を悉く引寄て、其心まで一つ洩さず、同じ色の感興に包み込んで了つた。
彼の飛行機の操縱者の君、其君に對して、人々は清い醉心地を感謝し合つた。

飛行機に乘つてゐる人ではない。飛行機を引張つて上る人だつた。

人々は茲まで追憶して、怯えたやうに電柱を見直した。墜落と云ふ字と、危篤と云ふ字とが、痛い光りで目を直射する

人々は耐へられぬやうに、池へ目を反らした。

花は矢張動かずにゐる。

鯉も深くひそんだまゝでゐる。

空のどこかで、彼の飛行機が、ふうはりと浮んでゐるやうな感じが何うしても人々の頭腦を去らない。

嘘のやうだ。夢のやうだ。

此時、人々のあたまの中では、今朝からの慌だしい心地と、彼の醉心地と、今の夢の心地とが、巴になつて風車のやうに激しく廻り出した。

門

わくらば

朝から、晴れやうとして頻りに動いてゐた雲は、未だ、空の大部分を漂ふてゐる。所々の裂目からは淡いコバルト色が洩れて、時々、すーと、頼りない調子に日光が覗くかと思ふと又直ぐ、すーと、隱れて了ふ。川の音が、どー〳〵と聞える計りで靜かな日だ。

ぼつてりと茂つた新緑の葉蔭に、黒い板塀を高く廻らして、乳色の丸い軒燈を掲げた嚴めしい門構へが存る。其の柱には、黒々と、凜とした文字を書いた白い表札が懸かつてゐる。門の中は奥の方迄石疊を敷き込んで有つて、其の兩側には、八ッ手が光つて居り、紫陽花が未だ白つぽいちんまり花をつけて居、月草が在り、百合があり、雛罌粟があり、白芍藥があつて、奥の方にはしつとりした紫の菖蒲も見える。ずつと此方門際には、すら〳〵延びた一番勢の好さゝうな草葵が星の如な、冷やかな小さい花を澤山着けてゐて、そこには白い蝶の群が絶えずひら〳〵、ひら〳〵と、狂ほし氣に亂れて居る。

門の外には、塀から續いて彼方に高い木柵がある、其處には、一人の貧しい姿の女が、細い指に、薄い唇を弄り乍ら、既う先刻から、しよんぼりと凭れてゐる。其の顏は蒼黄な、燻んだ皮膚が、げつそりと頰の肉を落した細長い骨ばつた輪廓を備へて、薄い長い眉の下に凹んで並んだ二重瞼の大きな眼が、絶えず、其の濁

つた視線を、彼の門構へ注いでゐる。髮は、埃つぽい赤い細い毛がふうわりと、腦天高の頭を包んで無雜作にとぐろに卷いた根が、がつくりと頸元へ辷つてゐる色は褪せてるが汚れ目の些しも分らない洗ひたての如な、紫つぽい絣の單衣を着て、赤い色の入つたメリンス友仙の地が痛んでる、幅狹の帶を、細い體に小さな引つ懸けに結んで……。

思ひ出したやうに微溫い風が緩い調子にむーつと、何處からか湧いて來て、何處かへ消えて行くと、ハラハラと小やかな呟きを殘して何やら、柔かい粒が、其の女の邊りへ落ちて來た。女は彈かれた如に偶と、柵を放れつゝ塀を仰いだ、塀からは、たわ〳〵と櫻の枝が溢れてゐて、青暗い葉の蔭には、黑ずんだ丸こい實が豐かにぶら下つてゐる。

その隣りには、明るい綠葉の中に、露に潤ふて一入燃ゆる如な眞赤な花をつぶらに、浮かした柘榴の一樹が、華艶に覗いてゐた。梢を拂はれた雫が塀を傳ふて黑い線を垂れてゐた。

女は眉を顰めて俯向いた、而して、其の視線が再び上ると今度は、凝乎、門の內を見据ゑた、而して、吸ひ寄せられる如に思はずつか〳〵と進むだが、又、ハタと踵を止めて、猶もしうねく奧の方を、首を曲げたり延ばしたりして透し見た。さん〴〵透し見た上句、目は不安さうに、くる〳〵と、四方を顧みて光つた。が又、直ぐ、長い溜息と共に首垂れて、ぶらり、ぶらりと、踵は門前を退いた。さうしてまた向ふの方へ行つて門を顧みた。顧みては何か深く考へ込み、考へては袖を飜して、門へ進む。一時、決心の色を現はして進んで來乍ら、門迄來ると、必乎、或強い物に遮られでもする如に、躊躇つて了ふ。さうしては矢鱈に眉をぴりぴりさせた。

幾度か同じことを繰り返して執念く、周邊を彷徨いてゐたが最後に、最う充分の決心の如に又、すた〳〵と進むだが、依然、依然、門の構へ迄來ると妙にパッタリと立ちすくむで了つた。而してそこでもう一度、念入りに內を透かし見た。門內は依然として靜かであつた。

と、最う殆ど堪へ難きもの丶やうに、くるりと、袖を返すと、じり〳〵と退つて、しさつて。

塀の橫から、ひよこ〳〵と、點燈夫が走つて現はれたつけが、其女を見ると、探ぐる如な、異樣な眼つきをして、凝つと眺め乍ら、其門の軒燈へ灯を入れた。

女の眼は底の鋭い針を含んで、咎める如に屹乎、其の男のずゞ黒い顔を射ると直ぐ、あらぬ方へ外らして了つて、故意と、茫乎した、平氣な如な表情をしてゐた。點燈夫は灯を入れて終ふと早々と驅け出したが、向ふの方へ行つてから再、凝乎、顧て行つた。女は夫を横目で睨んでゐたが、其の視線を續いてくる／＼と廻轉さして、密かに、四方をひがむ如な樣子で睨め廻すと、ぴり／＼と幽かに唇を慄はして、じつと、足元を見つめた、乾固まつた如な足には太い、摺れた華緒が絡んでゐた。其の足は、しびれたやうな運びを、自づと彼の木柵へ向けた。

女は再び、木柵へ縋つた。而して、沁々遣瀬なげな、僅かに疳の上つた顔つきで、その柵の外側の草の底によどんでる濁流を見詰めた。對ふの崖には高い所に、草苺の數株が枝垂れ群がつて、赤く熟れた實が、點々と、暗い葉の上に浮いてゐた。

燕がチヽッと叫んで突然、女の頰を掠めてペン／＼と黒い羽ばたきの影を止めて素早く向ふの空へ、溶け込んで行つた。女はしぶ／＼其處を脱れやうとした拍子に、少しよろめくと、麓のアザミ草が、チクリと女の足を刺した。女は、ビクとして夫を見ると、顔を顰めて「チヨッ……」と舌打ちして、忌々し氣に夫を、下駄の齒で踏みにじつた。而して何かなし深い／＼吐息を洩しつゝ、最う一度、彼の門構へを睨んでもう／＼力が盡きて了つた如に、やがて、とぼ／＼と、町の方へと踵を向けた、そして、少し距ると、又未練氣に、亂れ毛を弄りつゝ顧みた。そしては辿り、そしては顧みつゝ、如何にも澁々と退去つて、漸く、彼方の樹蔭へ消えて行つた。

周圍は飽迄も靜かであつた。門も依然としてひつそりしてゐた。蛙が氣魂しく啼いて、空は又一杯に雨雲の灰色が擴がつて來た。

みどりの丘

林口和歌

なつかしい思出の綠の丘よ、つや／＼しい木の葉ははつ夏のやゝ強い光線を浴びて、しづかに深呼吸でもして居る如く、かすかに青い香りをたゞよはせて居る病を養ふ身に、淡い悲哀と倦怠を覺えた私はまた此處へ來た。さわがしき世の汚れた塵を些も止めぬ純な

るみどりの空氣の抱擁にあこがれて——。少女十六、懐しいこの丘の家に別れて放浪の旅に出でし子は可成長く丘の家に歸らなかつた。親鳥の懐にはぐゝまれし雛のまだ延びそろはぬ、弱々しい羽で覺束なくもまれ揉れた。五とせ振に歸つた故郷、病を得し身にも、荒んだ心にも丘の家は唯一の慰安所であつた。

かうして自然の偉大なる抱擁と、美しい綠色のキッスを快よく受ける私は何と言ふ幸福兒であらう!。いたましい病も傷ついた胸の苦しみも刻々に癒えて行く樣に思はれて、私の心は限りない歡喜に漲つた。

丘は高低の甚だしい土地の中でも殊に高い我家の後に負ふて居る、眼にさへぎる物もなく心地よい見はらしである、よく冴えた日は和歌の浦に浮ぶ白帆が、かもめとまがふても見えよう。

私は今柔かい芝生の中に坐つて居る、素足に觸るゝ若草が快よい冷たさを與へて呉れる、風もないのにハラ／＼と白いものが肩に髮にこぼれて來た。私は無意識にそれを拾つた。甘い香がプンと鼻をうつ。それはやゝ黄味がゝつた柿の花であつた。綠の葉かげにつゝましく咲いて居た小さい花も大方散つたのだらう、見上げる枝には、もうそれらしいものは見當らなかつたけば〲しい色彩を持たぬこんな花を私は愛する。

馬乘にまたがつて遊ぶに都合よかつた柿の木の葉が紅に燃ゆる頃は、それを拾つて、紙を圓めて頭をこしらへた人形に着せて、おぎんちやんとか、おてるちやんとか名をつけて喜んだ、今はもう人の子の親となつて居る友と私のお煙草盆に結つた姿を其儘に、みどりの丘に發見して私はたまらなく懐しい心持がした。

其頃は村の人達がよく今頃になると草刈車を肩にして丘の前の白い道を話しつ笑ひつ上つて行つた。夏も半になると、活々とした青草の中に、交つて一しほ色はゆる撫子や桔梗を女郎花が心なき草刈女の車の上にやさしい姿を横たへてゐた。

「あ、その花一つちやうだいな」と呼止めると、面倒も厭はず車を狹い溝に止めて私等が拔取るに任せて呉れたのはおきさゝんと言ふ娘であつた。汗ばんだ額を被ふた手拭の色や、新らしい手甲の紺の香もなつかしい記憶の一つである、一直線の坂道の上りつくした所一つづゝ見え出す小さな車の數をよみながら、おきささんの來るのを待つた、あどけない其頃の心を、もう一度私は味つて見たかつた。

小品文選評

小品文點數表

等位	題名	葉舟(採點)	胡夷(採點)	醉茗(採點)	平均點
一等	武藏野の夜	八五	八五	八五	二五五
二等	眞珠	八五	七三	七五	二三三
三等	テントの家	七五	七七	八〇	二三二
四等	桐の花の頃	六五	八二	七五	二二二
五等	白河へ	五五	八四	八〇	二一九
六等	ひとり	六〇	八七	七〇	二一七
七等	郭公	七〇	七九	六五	二一四
八等	飛行機	七〇	七五	六五	二一〇
九等	門	五五	八〇	六五	二〇〇
十等	みどりの丘	六〇	七〇	六〇	一九〇
	初夏	六〇	七〇		一三〇
	希望	七〇		五五	一二五
	子のない人		六五	五五	一二〇
	なつめの木	五五		五五	一一〇

五十點以下の優れし作

▲手紙(日本橋、みどり)▲執拗な少女(神田、都夜子)▲おまつりと友(越路、百合子)▲在米の友に(佐多柄)▲賃仕事(佐渡、萩香)▲春の思ひ(羽後、その子)▲おしろい花(廣島縣、美津子)▲もの言はぬ少女(青森縣、上野禮子)▲水無月の夜に(長崎、うたかた)▲深夜(富久子)▲ある女の手紙(與志多黍江)▲廿歲を病みて(久美の女)▲風呂(深雪)▲逝く春の思ひ出(舞鶴、波上の櫻)▲父の顏(伯耆、美子)▲すぎし日(讃岐、流葉子)▲五月頃(上毛、姫百合)▲五月雨の日に(德島縣、菫の花)▲雨の日(長野縣、雪子)▲思ひ出の淚(横濱、和歌葉)▲生と死の戰慄(石川縣、明星)▲女敎師(岡山、新妻みほ子)▲あやめ咲く頃の思ひ出(新潟縣、菊子)▲淚の瞳(紀伊、ますみ)▲あゝ少女(廣島縣、葉蘭子)▲月の夜(茨城、葉守子)▲春草籠(和歌山縣、中村君代)▲同じ思(新潟縣、村田けん子)▲豌豆畑(山形縣、睡蓮)▲初夏の朝(八王子、久保田たけ子)▲長夜(北海道、貴美香)

☆　☆　☆

水野葉舟

△この共選と言ふことは、考へやうに依ると面白い事である。選をする人の標準、趣味、及び態度が現はれて來るので、書いた方の人は、それに依つて一人の選者の言葉よりも更らに自分に隱れて居るものを敎へられることになると思ふ。しかしこれは極く都合よく考へた場合の事である。

△今度は、小品の選をすることに成つた。この中で、優秀な十二三篇に對しては、便宜上點をつけるやうにと言ふことである。自分には如何して點と言ふものをつけていゝか解らない。第一にその標準がない。藝術を數字で計算することは出來ないことだ。(しかし、それは共選と言ふ

ことの便宜上の方法として仕方がないものではあるが）一寸學校の作文の先生の仕事のやうだ。一體選と言ふことに、現在の樣子ではその性質が澤山ある。

△で、自分は、まだ讀まない中から、この點の基本を五十點ときめた。五十點だけはおまけのつもりで、たゞあげることにした。それから順々に讀んで行き、第一に心に觸れたのにまづ標準として點をつけた。それを價値の標準にして目分量の點をつけた。斯うするより外には方法がなかつたのである。

△その點數から書くことにする。自分は以下の十三篇に對して點をつけた△飛行機（七十）△眞珠（八十五）△みどりの丘（六十）△門（五十五）△武藏野の夜（八十五）△テントの家（七十五）△白河へ（五十五）△なつめの木（五十五）△郭公（七十）△ひとり（六十）△希望（七十）△初夏（六十）△桐の花の頃（六十五）自分の點はひどい。しかしこの中で、少しで見られると思つたのは、第二と第五の二篇にすぎなかつた。

△で、簡單な批評をする。

——桐の花の頃（蔦紅）　文章が堅い殼に入つて居るものを見る感じがする心が如何にも幼稚な狀態に居る。少しも、眞實に人間の生きてる姿がない。たゞ習慣的に文章がすら／＼出て來て居るだけである。それが多くは人の使つた言葉を習つて出來たものである。

——初夏（紅い子）　この種の文章は男の投書家がよく書く型である。

——希望（白妙女）　じみちに丁寧に書いてある。だが、その心はたゞものが映ると言ふだけである。もつと尖銳な力が心にひそんで居てほしいものだと思ふ。

——ひとり（森山路子）　堅つくるしい。そのくせ心は眠つて居る。

——郭公（葵の花）　細々と書いて行く處にこの人の心のスペエスが見える。たゞ地が如何にも、肥沃して居ないのが淋しい。あまりに古びた儘の地である。心は常に沃土でなければならぬ。常に生の力で湧き立つて居なければならぬ。

——なつめの木の思ひ出（散殘る花）　幼稚な、センテイメンタリズムですう／＼と他愛なくものを言つてると思はれる。確とした繪の面ではない。さなければ又競ひ立つて湧き上る生の力でもない。斯う言ふ境から早く進んで行けない事は耻である。

——白河へ（廣江曉子）　すつかりクラシックな文章である。しかし眞に新しい心でものを言つて居ると言ふ譯でもない。斯ういふ心持には價値が乏しい。

——テントの家（しづゑ）　何故歌をつけないのか。たゞ記憶と書いてもいゝではないか。これも、「散殘る花」に言つた批評と同じである。たゞし材料にいゝ處がある。それはこの人の心が立派である爲めではなく、この人の生活の現象が敎へたものである。こゝをこの人は考へてほしい。これだけでも、人が步き進まねばならぬと言ふ上に、大きいサゼッションがある。

——武藏野の夜（さかえ）　言葉にひどい處がある。その上によく目を定めてものを見、それを描くと言ふ心が足りぬ。その方に大きい力があるのを知らないで居る。すぐ自分の感情でものを言つてしまはうとするそこが缺點である。しかし、この小篇は面白いものと思つた。

——門（わくらば）　たゞ言葉が多いだけである。

——みどりの丘（林口和歌子）　これもセンテイメンタルなもの。

——眞珠（伊藤夕陽子）　この中には光つて居るものがある。巧でない中に鋭くもれて出た生きたものがある。

——飛行機（さみどり女）　描き方がきちんと進んで行つて居る。形とし

てはいゝが、心が無理にその境に押しつけられて居る。

☆　☆　☆

澤村胡夷

▲●●郭公（葵の花）　讀んでゆうちに人を惹つけるだけの力は充分にある郭公と云ふことを題としたことが不利であつたかも知れないが、力の籠つた作である。作者の事象に對する粘着力はこの作をしてなかなかに面白い意味を持たしめてゐるやうだ。

▲●●●武藏野の夜（さかえ）　夜の廣原を進みゆく氣分は可成現はれてゐる唯少局の技巧に無頓着であつた爲めか、情趣のともすれば斷たれんとする傾きのあるを憾みとする、佳い作だ。

▲●●●眞珠（伊藤夕陽子）　技巧の上にほこるべきものがあるのではない、何とはなしにすて難いのは、柔らかな女性の感受力を故意に破らうとしてゐない純な點があるからであらう、幼稚なと云ふやうな非難をかゝる作になげたくないのだが。

▲●●●子のない人（すぎね）　説明に流れてゐるのが眼立つので、事實を傳へる事の急が胸中に往來する、筆をとる以前に充分に考へるべきある事柄を忘れたやうでもある。

▲●●●ひとり（森山路子）　旅の心持が可成深く寫されてゐた、動もすると女性に有勝ちなはか無い『我』を歌ひながら沈んで行く……やうな事も無く、其情趣を整へながら投現する力の强さを充分に感じさせられた、そこに技巧の多量がある、けれども自分はそれを善い意味に理解したいのである。

▲●●●桐の花の頃（薫紅）　わき目もふらずに自分を表はしながら、何處となくふつくらした感情が流れてゐる、傷ましい思が含まれてはゐるも、或距離をとつて自分を觀るだけの餘裕を持つてゐるので、作者は實感による嫌味を味はせる事なしに、すつきりかきあげる事が出來たのであらう。

▲●●●白河へ（廣江曉子）　ものを捉へて離なさない力、それが能く全篇をまとめてゐる、些細なことにまで興味の眼を投げてそれを想化してゆくのは此作者の長所であるが、その爲めに動もすると技巧に溺れはしないかと危ぶまれぬでもない、けれども京のかうした景情をうつすにはかゝるスタイルは寧ろ適當なものゝ一ではあるまいか。

▲●●●テントの家（しづえ）　達者に書きこなされてゐる。けれども若し强ひて缺點はと云はれゝば面白い出來事を平板に書いて了つたと云ふ點であらう。眞面目な態度で書かれてゐる事だけは尤もよい事の一だと自分は此作に就いて信じてゐる。

▲●●●初夏（紅い子）　この作には殊に粘着力を缺くが故に、内容の上にも形式の上にも統合力を缺いゐる、爲めに鋭敏な觀察も徒勞の結果に終つてゐるのは遺憾である。

▲●●●門（わくらば）　筆の方がずんずん先きへ歩んでゐる所爲か、作意の方が眼にたつ所爲か、全篇にながるべき柔らかな感情はとぎれてゐる、この作の統理の缺けたことが客觀描寫としての不備の大なる點となつてゐるやうである。けれども客觀描寫をこゝまでものしてゆく技倆だけは容易の事でない。

▲●●●みどりの丘（林口和歌）　悶々たどたどしい書振がほの見える、それにも拘らず一種の情調だけは受けとる事が出來る。

▲●●●飛行機（さみどり女）　故意らしい點が私には殊に眼だつのでこの作をしつくり味ふ事を妨害せらるのは頗る憾みである。とかく理におちた

がるのはとらないが、閃々たる才分だけは充分に認めねばなるまい。

點數●

△ひとり（森山路子）八七　△桐の花の頃（蔦紅）八二
△白河へ（廣江曉子）八四　△門（わくらば）八〇
△みどりの丘（林口和歌）七〇　△飛行機（さみどり女）七五
△テントの家（しづゑ）七七　△郭公（葵の花）七九
△武藏野の夜（さかえ）八五　△眞珠（伊藤夕陽子）七三
△初戀（紅い子）七〇　△子のない人（すぎね）六五

☆　☆　☆

河井醉茗

▲門（わくらば）（六五點）　背景の方は明かに浮いて見えるが、人の方の印象がはつきりと映つて來ない、每も靜かな心持で物を見てゐる人であらう、從つて作の上にも流動の影は映らない。

▲飛行機（さみどり）（六五）　一息ついては物を言ひ、一息ついては物を言つてるやうで、甚だ苦しい、兎に角これ丈けの感じを持つてるのだから、例へば飛行機の飛んでゐる印象を、すうつと一息に書いて了へばもつとらくに讀めたらう。

▲テントの家（町田靜江）（八〇）　題材負けがしてゐる、實に好い題材だが、日本のお膳で西洋料理を食べてゐるやうな物なれない調子がある、何の爲か深く究めたら分るだらうが、一つは此作者が餘りに智識的なからであらう、識るとか、分るとか云ふことが先に立つて、感じるとか味ふとか云ふことに自己の所有が乏しいからであらう。と云つて私は此作を排斥するのではない、尊敬した心で再讀した。

▲みどりの丘（林口和歌）（六〇）　むだが多い、田舍の家の建て方を見るやうで、何の爲とも分らぬ處に、ごて〳〵と餘計なものがあつて面倒くさい、此人は能く此邊に氣をつけて進まねばならぬ。

▲白河へ（廣江曉子）（八〇）　誰が見てもクラシックな文章だが、クラシックだからとて強ち劣つたものとは斷定は出來ない。自分は此作者が今まで步いて來た道に同情して、每も此作者の書いたものに同情してゐる、それで此作も初めから同情して讀んで見たが、別にそれを裏切るほどの反感も起らず快く讀了した。

▲桐の花の頃（蔦紅）（七五）　此作者は妙な事で自分の記憶にある、それは此作者は一二年前から每月必ず投稿する人で、而かも多くの場合沒書の憂き目に遭つて居るので、大抵の婦人なら此んなに根氣は續くまいと思はれるほど、此作者は繼續の努力を示してゐたので、此作者に取つては紙上に出る出ないは殆ど問題でないかと思はれる許りであつた。然るに此作を見ると初めて眞劍に物を書いてゐる、蓋し此度の選に入つたと云ふことは作者の幸ひにして又記者の幸ひであらう。

▲ひとり（森山路子）（七〇）　癖のあるのは疵だが、非常に注意深く物を見やうとする心構へは、女性としては珍しい方で、自分は此作者をぼんやりだとは思はぬ。たが只一生懸命に心を張りつめてゐると云ふだけでは物にならぬ。

▲眞珠（伊藤夕陽子）（七五）　純な小品文だ、此の純にして自然な心持を表はす呼吸を大切に育てゝ行きたい、作者は最も新しく進んで來た一人で、此作は散文の形で、心持は柔かな歌のやうだ。

▲武藏野の闇夜（さかえ）（八五）　乾いた土の上をしつとりと濕ほして行くやうな味ひがある、小說の書ける人といふことが分る。

▲郭公（葵の花）（六五）　自然の感化は容易に女性の上に及ばないものだ、此作を見ても然う思ふが併し細心に書いてある。

▲子のない人、棗の木、希望の批評は紙面に餘地なき爲め省略す。

『ふるへる花』の著者に

吉田常夏

河井酔茗先生に拜借した貴女の歌集『ふるへる花』を讀むで非常に感激した私は、唯此まゝ默しては居られないやうな氣がした。私は今言葉の花束を以て貴女に頌讃の辭を捧げやうと思ふ。

其の前に當つて一言申したい事がある。それは外でもない、私は最早詩壇から遠ざかつて既に五ヶ年、其間殆ど文學には親しまなかつた。それであるから變轉日々に新たなる文壇に對する私の批判力は餘程舊いに相違ない。そして又兎もすれば極端に走り易い私の考へは餘程偏見であるかも知れない。と同時に斯る企てをする事が既に潜越であるとも思ふ。

私が現文壇に暗い一例を擧げて恥を晒せば、此程の事、或る人から當今の新進閨秀歌人として三ヶ島よし子、岡本かの子の二人と貴女の名とを聞いたが三ヶ島さんの歌は折々諸雜誌で散見して唯地味な淋しい底の冷い歌と思つたに過ぬし、岡本さんのは失禮ながら一度も拜見した事がない程の迂愚である。併しながら與謝野晶子さんと内藤千代子さんとは何らが豪いかと云ふやうな問を發する程の迂濶でもない。何にせよ恁な者から百萬陀羅の讃辭を並べられたとて毒焔をふくんだ惡罵をされたとて貴女は何等の痛痒も感じないであらうが、私はこれに敢て構はず眞劍にそして忌憚なく書いて見やうと思ふ。

私が貴女のお名前を聞知したのは可成古い事である私共が河井先生など丶一緒に詩草社を創立して『詩人』を發行した頃のやうに覺えて居る。貴女も社友の一人であつた。其年の夏私は伊勢から志摩へ旅行した歸途名古屋に立寄つて社友の四五人と相會した時、貴女へも案内狀を出したが生憎當日は大雷雨であつた爲め、貴女は出席せられず其の詫び狀を受取つた。（其の會合の事は後で河井先生から非常に叱られた、それは私は未だ二十歳にも足らぬ子供の癖に生意氣だと云ふのであつた）兎に角こんな記憶がある事ではあ

るし、其後折々雑誌などで貴女の隆々たる芳名を見る度に何となく微笑を禁じ得なかつた。今その貴女の歌集を拝見する事は私にとつては人一倍なつかしく且嬉しく感じるのである。

河井先生から『ふるへる』花は薦められたのである、そして通讀後私は非常に愕いた、感奮した、當今第一の歌だと叫んだ、之れはあながち興奮し易い私の單純な感情の聲ではない筈である。

河井先生は恁う云はれた。琴子さんの歌は恰度晶子さんの『亂髪』時代の強烈な感情を現代的な新しい形式に盛つたものであると、そして亦福田夕咲君に逢つた時も同じやうな事を聞いた。此の短かい評言が最もよく適中して居ると私も思ふた。

私は尚一歩進んで『亂髪』よりも勝れては居ないかと思ふのである。それは『亂髪』に見るやうな強くて熱狂を衒つたやうな誇張や、生半可な熟語や、文字で脅かすやうな遊戯的氣分などがなく、飽くまで眞摯に、緊張した感情や、ふるへる情緒が痛切に胸を刺す處は慥かに一歩勝れて居ると思ふ。それが亦何處までも女性的で且つ貴女の個性が顯れて居る處が尊いと思ふ。新しいと思ふ。私は殆ど一首毎に驚異の眼を睜き、感嘆の聲を洩して讀んだのである。

人は第二の晶子だと云ふが、私は第二の琴子が出る事を切望するのである。

君が手にまかれし朝は黒髪の尺も長けたる心地するかな

少女子のをどる心の惜からば匂ふ花をもすべて葬れ

火の中に遊べるをのみ女ぞとわれかぎらましみづからの爲め

若き日に見ればなつかし獅子の子も無頼の友も死ぬる樂も

心中か戀煩ひかこのほかにわが死ぬすべはあらじと思へる

胸には火が渦巻いて、その焔が舌となり唇となつて吻づける者を燬き爛らさずには置かないやうな強い熱い戀の歌を愛するのである。斯る歌を歌ひ得る貴女の感情が羨しいと共に心憎くもある。

兄といひ夫と呼ばんもあぢきなし初戀人のたふときものを

冬の夜のうす紫の寒き頬を吸はれしことのは

づかしきかな
つと立ちて白き牡丹をくづしけり物思ひせぬ
花のにくさに
歌ならでものいふことを許されぬ戀の掟の美
くしきかな
美くしと君がながむるもの皆をあつめてわれ
の心つくらん
いと弱き少女とわれを世に生みし償ひとして
人を戀しめ
うちつけにわが惡口をよくいひて笑ふ君なり
それを好みぬ
さかしまに君よりわれを死ぬばかり戀せられ
なばいかにしてまし
しめやかに人と泣きしを忘れかね似たる戀を
ばつくらんとする
泣かれけりわがくちづけに足るごとくことや
すげにも君のいふ時
思ひ出のうつくしさよりはた彼をゆるす心と
なりにけるかな
氣まぐれの君が心のさまよひにふるゝ女を思
ひやるかな
腕白の弟こそはうれしけれこのあさましきわ
れをよく打つ
わが名をば呼ぶ人はなしたらちねの母より外
に呼ぶ人はなし

之等の歌を讀むと貴女の生活だの性格が目に見えるやうである。強いやうで女性的なやさしみ、藝術的な氣分、戀より外に命はいらないといふやうな若々しさ或は淋しさ、いらだゝしさ、其の刹那々々の心持が遺憾なく現れて居る。

■少女子は戀の香爐に身を投げておのれよりこ
そかをらんとすれ
くちびるを君に任せてありしかばわが心をも
吸ひ給ひけん
死なんなどたやすくいへど黑髮を切るとはい
まだ誓はでありぬ
おもしろしつゝきものなど聞くごとく明日明
日の誓言をまつ
七人を思へる君と聞きしより遊ぶ心となりに
けるかな

恁な皮肉な感情を歌つた中に貴女の閃く如き才氣を認める事が出來る。河井先生から聞いた話に貴女は久しい間殆ど盲目同樣に病める年月を送られたとかその間に默考し修養されたのであらう、貴女の眼病は苦痛を與へた代りに得難い土産を置いて行つたのであらう

■茲で貴女に申したい事がある。それは迸るやうな才

氣でもそれを愼むと云ふ事である。之れは隨分六ヶ敷い事に相違ない。けれどもその才分を餘りに弄ぶやうになれば自然に僞り歌も出來誇張して脅かして見たくもなる、所謂遊戲になる皮肉も過ぎれば嫌味になると同様だ、私は次のやうな歌を見出した事を悲しむ。

花をみな黒きものぞと見給へるあやしき眼鏡捨てゝ來給へ
殺斷の山法師より戀の果を食まさる予等の衰へを見よ
白玉もあたひなかりき算盤と時計の中におかれたる時
みやび男は心をあまた持つと聞く少女子われも諸向にせん
おぼえけり甲斐なきものに云ひなして男の前に身を投ぐる事
物古りし道をたどるはあじきなしおのれ開きて人を誘はん
ひと言を別れにのぞみわれいはん戀にかりたる君なりしとぞ
戀すれどいまだ君をばたのますと云はゞ怒りて別れ給ふや
おところへて櫛にかゝりし黒髪の捨てわびたるを男にぞやる
浅草の少年のごとわが前にとんぼがへりをする男見ゆ
ダアリアのふるへてありぬ戀人を殺さんといふ夢のかたはら

以上のやうな誇張だの、新らしがりだの、强がりだの、或は理窟や賢者振つた歌は排斥すべきである。貴女は何處までも女だと云ふ事を忘れてはならぬ。若しこんな情緒が湧いたのが事實にせよ、それは匧底に秘めて貴女の人格を保たれよ、それは僞れと云ふのではない。何時までも若く、醒め給ふなと云ふのである。

■惡口を云つた序に今二三言注意したい、第一はあまりに文字が貧弱ではないかと思ふ。例へば『寒き男』と云ふ言葉を四五ヶ所に見た。私にはその意味がよく解らないけれども左程よい言葉とも思はれない。新らしい文字、難解な文字を使へと云ふのではない、平易な文字で今少し適切なものがあるやうに思ふ、殊に寒き男などゝ云ふ字は珍らしい丈け更に目を惹くのだ。

それから例は擧げぬが同じ思想を唯形式や文字を變へて歌つたのも數ヶ所に見た、之れなども思想の貧弱な事を顯はすやうで決してよくない。それは一つの思想を色々に試作するのはよい事だが、その最上なもの

を選んで他は捨てる事だ。

水野葉舟さんのお話に歌は一首で纏つてなくてはならない、二首三首、連絡して一つの思想を顯はすとか或は關聯してるやうなものは短歌ではないと云ふ事を聞いた。それから誰もよくやる事だが「いたましきかな」「あはれなるかな」と云ふやうな說明を後に添へる事は其の歌の餘韻を沒すのみでなく全體を壞すといふ事、之れは全くその通りである。序でなれば云ひ添へて置く。

嘗て私が詩作に熱中して居た頃、矢張り河井先生が比喩の巧みな事は詩人の一要素である、見よ晶子さんを、北原白秋君をと敎はつた事がある。これは今尙ほ耳底から消えない。今貴女の歌集を繙いて貴女も亦比喩の巧みな人と感服した。

いひまどひ思ひあまりし事どもを捨つるが如く花の散るかな
天つ日の滅ぶるあるに似てをかし匂ふ少女の死を思ふ時
わが戀に人のねたみのかゝれるは花の影する水に似てよし
この君の氣まぐれもよし夕ぐれの花をそよがす風のごとくに
美くしき男に來よといふごとく雨にかたぶきひなげしの咲く
櫻花はら〱散れば覺えある罪を問はるゝ心地するかな

兎に角『ふるへる花』一卷は近來の傑作である。砂中から玉ばかり選り集めたやうな歌集である。誰よりも傑出して居る。斯く云へば私の偏見を笑ふ人があるかも知れない、それでもよい、私は唯信じるまゝを語るのである。貴女も亦冷罵する人があつたら冷罵を甘じて受るがよい、貴女の歌を解し同情する者が私一人でも結構ではないか。併しながら私が歌はんとして居る情緒を貴女は全部歌つて居る。私には殆どもう歌ふべきものがなくなつた。何となく悲哀と寂寞を感じる、そして羨やましいと同時に心の一隅に嫉しくもある。それだけ一倍同情があるのであらう。

併し貴女のその燃えるやうな感情も何時か停滯する時が必らず來る、其の時移るべき道が六ケ敷い、だから今の間に修養するがよい、そして不安な心を抱かずに何處までも其の若い熱情と力とを以つて進み延びるがよい。決して後をふり返つてはならぬ。

別るゝ朝

山路るり子

其日は陰鬱な鈍色の雲が空いつぱいに流れて、野にも山にも明るく光の一筋も見出せぬ朝であつた。昨日夕日に輝いた土藏の白壁もけさは包みきれぬ悲哀に永久の沈默をつゞけて居る。如月の薄寒い風が黄八丈の襟を通してひや／＼と肌にしむ。

「常陸はよほどお寒うございますのね」と私は獨言の樣にひくゝ言ふて、けふで三日目の束髮のくずれかゝるのをかきあげ乍ら、柱によりかゝつて、じつと沈んでゐらつしやるものいはぬ君をあふぎみた。

けさになつてから二人はものいふ事も少くなつた。絶頂の悲哀に疲勞しきつた官能は、涙さへしみ／＼と流れ出ぬのに、わあ――つて聲はりあげて、泣きたくて泣きたくて、一寸さはればもう破裂する如に胸は、いつぱいになつて居た。わあ――つと聲はりあげて、あたりかまはず思ふ程泣いたら、このいひ現す事の出來ぬ胸いつぱいの苦しさが幾分か薄れるやうでならなかつたのである。

女中が朝のお膳をもつて來たのでお箸はとつたけれど、此悲哀のみなぎつた胸に如何して、他のものゝ入る餘裕があらう。しひて女中を退ぞけて義理許りにすましてしまつた。おそらくは其君も同じ思ひだつたらう。

神經のふるえの甚しさに胸の鼓動の餘りはげしさに私は語る事をようしなかつた。丁度信玄袋の中には美しい繪葉書が數葉散らばつてたので、そをとりだして薄いエンピツの走りがきで、私は何か書いて無言の御手に渡した。其君も又何をかかいて示された。

かうした交換が數度つゞけられてる間にだん／＼時間が迫つて來た。さうだ！あゝ私は歸らなければ、ならないのだ！私は一昨日の朝まだきに、五ツ年の其イルージョン追ふ、やるせない心にたへかねて、家を出たのだつた。よくもわからぬ旅乍ら、夢中でどこを、如何してか、〇〇驛について。それから三里の道を車にゆられて、人の顔の、ほの白くみゆる夕方、其廣い寂しい家にたどりついたのであつた。――そしてたゞちに此朝は目前に迫つて居る。別れまゐらする、去らねばならぬ此朝――。

「お目にかゝるのもこれが最初で、かつ最後でござい

ませう！」まつげにたまつた涙はほろりと、黄色い縞のひざの上に落ちて大きいしみになつた。

それから私は矢張無言で、うなだれ乍ら淋しさうにてそ／＼と細かい道具を信玄袋の中に入れ初めた。二枚折の屏風にかゝつてある、黒いお召の羽織を肩にかけやうとした時、今迄だまつてらした、其君が「車やがきてコートを着る迄、さうして帶をしめたまゝにしときなさい」と仰有たので「ハイ」とおとなしく又、羽織をぬいで傍においた。コートとショールと小さいカバンと信玄袋、それだけを傍において、私はきちんと坐つたまゝ、言葉もなく、悲しい思ひにうつむいて居た。目前に迫つた來た、歸る……といふ事を思ふと襲はれるやうな氣がしてならない。ならば此まゝ人にも世にもかくれてたゞ其君の御傍に、寂しく靜かな、清い日を送りたい……いつそ……と思ふと。いつか目の前に母が乳房を海の球とおひすがる肉をそぎ、血をわけた、天にも地にもかへがたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「もうぢきに歸ります！何か、何か仰有つて下さい！

もう二度とお目にはかゝれないんだから、お互に、言ひ殘す事のないやうに、ね……」やゝ興奮して、かういつてもたゞ寂しい笑をみせられたのみで、じい——つとみつめられる目！其瞳をみかへして、まあ何といふ寂しさだらう……。（孤兒のものほしげなる色よりも寂しき眼やと母の悲しむ）……かつての御歌がつと胸に浮んで、又胸がいつぱいになつてしまつた。無言の悲しみにうたれて二人は、永久から永久につゞくやうな、長い沈默におちいつてた時、ばた／＼と廊下に足音がして母君が來られた。

「あの車やがまゐりました、お仕度は？」此言葉にふと顔をあげられたせつな！暗い幽鬱な悲しみの雲がみる／＼君の面をつゝんだ。私はみるに忍びず背いてしまつた。そして羽織の紐の白い細いのをいぢり乍ら母君と二言三言話してる内に、暗い空からは悲しげにみぞれがボタ／＼とおち出して來た。

「まあ……」「まあてんなものが、丁度おあひにくにね」

「えゝえゝ、北國に育ちましたからこの位のものには平氣なんでございますよホヽヽ」と私は強ひて元氣をつけていつたが、笑ひが妙にふるへてきえて了つて、寂しさが室いつぱいにたゞよふた。無言で、空をみつ

めて居られた君は、「こりや大變だ、此夜一晩とまつて御出なさい」といはれたが、もう其時私は母君に丁寧に御禮をいつて居た。「さうですか、それぢや…どうせお歸りになるのなら一時も早く……。その方がよろしうございませう…」私の境遇やきのふからのしまつをうすく悟り給へる世なれた母君は、私の安全をはかるためにさういはれた——。「では…先生……」と本意なく頭丈をさげて、亦母君に「何卒、何卒、先生の御身體をお大事に遊して…よろしく仰有て下いませ…」と廊下に出てしまつた。



長い廊下を曲る時、ふりかへり〳〵みたけれど、人の影さへみえなかつた。車が一臺寂しげに先程からまつてゐたらしい。みぞれは後から〳〵とおちて來る。冷い廊下に坐つて亦母君にあいさつをした時、私は涙をそう——つと知られぬやうに拭ふた。其うつむいた頭を見乍ら母君は「まあいゝ、お髪だこと、驚く程いゝお髪だ」と仰有る親切な母君は車の横から、後から入りこむ霙を氣にして、暖かいふくふくした、どてらを遠慮する自分に、しひてきせて下すつた。

舊の正月の七日頃で、まだおしめをはつて、おかゞみも飾つてある。隣りではカルタの音がした。ふと障

子の内に其君の御姿をみとめた。私は無言に、かつ深く長い無量の思ひをこめて頭をさげた時、ゆるく車はうごき出して、とう〳〵門を出た。再びくゞらぬ門を出た！もうふりかへつても〳〵、ほろに包まれて何物もみえなかつた…。

彼の寂しい靜かな悲しい野の家を出た、苦しい涙の女をのせた、たつた一臺の車は、灰色の空のもとを、とぼ〳〵と、どこ迄もゆく……、女は——自分は、そ——つとほろの一部をとりのけて右手にそびゆる月波をしみ〴〵とみ入つた。寂しくかんだ唇からは少しく血がにじんで居た。山も空も野も人も、何といふ寂しさだらう……、それよりも、それよりも！殘れる一人の君は、今頃、どんな寂寥に襲はれてゐらつしやるのだらう…。

はるか前をゆく木の葉を山とつんだ荷車からは、寂しさうにもみぢの葉が一ひら一ひらとこぼれておちる馬は悲しさうな聲でないた——。空にはたつた一つの凧があがつて居た（舊の正月故であらう）。

〇〇驛について汽車をまつ一時間、自分は、昨夕から一昨夜からの事を思ひ〳〵、あたりの人に氣を配り乍ら幾度か涙を拭ふた。

汽車の中でも、上野について車にのつてからでも、心は——北風の寒い朝、白のショールに顔を埋めて、追はれるやうに停車場に走つた時から、けさまでの事其三日間、連續して、日も夜も忘れはてた、悲しい事實の上にのみはせて。五年のイルージョン。まぼろしの奥の眞に、近づいたけれど、矢張、苦しさと、なつかしさは、消えやらぬ。却て、寂しさと悲しさに其君をいたむ心がましゆくのみである。泣きたい〳〵……情の高潮に、私は幼兒の如に泣きたい心がみなぎつて居る——。さるにても……、一昨日の朝、言葉もなく出てきた家——それに如何いふて歸られやう……。然も……。けれど……これが罪といふのであらうか。あまりに清く寂しい罪ではないか——。と、こんな、とりとめもない、あれやこれやを思ふ間に、車は永代橋をすぎた。曇つた川風は、涙にぬれた、頬を冷くふいていつてしまふ。橋の兩傍に、かたい等は、しきりに手を合して拜んで居る——何といふ悲哀にみちた、みじめな生であらう——。

……私は一たいどこに行くつもりであつたらう——車は思ふ事もなさゝうにすゝんでゆく。

櫻實の味

深雪

久子樣。又夏が參りました、濃い綠は包まれた麥の香高い彼の高原の家を思ひ出さずには居られません、あの鈴なりに實のる赤い可愛い櫻んぼ。昨日私は水菓子屋の前に思はず立ちつくしました、指を折つてみましたらもう足掛四年になります、彼の日貴女の白いネルの單衣が、青い葉の茂みにムラ〳〵して銀の針の樣に降り灑ぐ日光に、貴女の若やかな頰と共に輝やいて居りました「お鹽をつけて食べると死人の味がする、お砂糖をつけて食べると戀人の味がする」と貴女がお言ひ遊ばしたわね。そして私が一生懸命お砂糖の方ばつかり頂くつて、くすぐつたい樣なお顏でお笑ひ遊ばしたわね。あの時私はおない年の十五でした、青い衣服の好く似合ふお轉婆な女でした。私はツト椅子を離れて窓を開きました。仰げば遠く〳〵暗雲閉ざす北國の空、小さい星が一ツしきりに。またゝいて居ります、丁度あの貴女のお部屋の右手に見える高い楢の林の梢の邊りによく見かけた、それの樣に、乳の香を含んだ風がスーッと參りますと、青葉の香りがユラユラとたゞよひます、私の目は何時か泣いて居りましたでも切なる悲の極みの涙ではございません、私自ら自らの涙に浸る淡々しい哀愁を持つて居りました。しかも涙はいくらでも流れます、久子樣、私は何故國を捨てたのでございませうね。

久子樣、思ひ出して下さいませ。あの八橋の原に何とやらいふ白い野花を摘みに參りました時のことを。五彩の繪の具をぶちまけて、やけにかき廻した樣な空の色、赤くたゞれた太陽が、西連寺の森の梢をすべり落ちて、高い草屋根や、まだ生新らしい石塔、青い蛇頭、さては右手に聳え立つ鐘樓など、目に入るもの皆金色に輝やいて居りました。折しも何鳥でございませうか、黒一點佇める私等の頭を越えて、深い〳〵底しれぬかのクリムソン色の夕映えを指して遠く遠く消え失せました。二人は茫然としてその神々しい永遠の思ひに少時煩雜なこの世に身をおく事を忘れて居りました

Uainly the fowler's eye
might mark they distant flight to do thee wrong,
As, darkly painted on the crimson skey,
Thy figure floots along

何時か二人は歌つて居りました、溺々たる青田を縫うて見えかくれ、幾里の想ひを海へと急ぐかの松川は我等に取つては此上なきギターでございました。世は次第に黒ずんで參ります、ほの白い野花の香りに口づけして夕陽に向つて歸り行く飾りつ氣無い私等の姿は如何に仕合せに見えたでございませう、又如何に自由に見えたでございませう、嗚呼久子樣私は泣きません悶えません、私等の生涯はどうして、そんな平坦な穩やかな古沼の面の樣な者でございませうぞ。我が世の春は夢見る私等を、ひしと捉へて驚き慌てる間に落でつべき流れに放ちました。ハッと氣付いた時はもう遲うございます、右に左に前に後に苦しみ悶ゆる人々は岩にせかれ岸に碎けて骨も露はに、いこふべき葉蔭すらなく、明日は明日はと甲斐なき想ひに心も空の悲しき旅を續けて居ります。耳を聾して聞ゆるは嘆きの音悲しみの涙、あゝこれが我が世の聲と悟つた時、我が小さき胸は如何に荒れ狂うたでございませう。それでも注意して見ますれば、兩岸には花も咲いて居ります慰め顔に涙さへ湛えて居ります、空には星が輝やいて居つて、頬笑みながら我等の行く手を導いて居りますけれど、この無慘な我が世はかゝるながめに見惚れる事すら十分に許してくれません。消えにし昔の夢をくり返し、せめてもの心やりに頬笑む間に性急な道伴れはグン／＼と先に行つてしまひます。かくてこの弱き旅人は、方角すら熟知せず、しかも一人の知己すら無き眞の孤獨に、ともすれば見返り勝ちなる遲き足を一歩々々辛くもたどりつゝあるのでございます。私等の前途は如何になるべきか、その樣な事はどうでも宜いと思ひます、たとへ此の旅が早からうが又遲からうがそんな事に頓着しまいと思ひます、唯この一歩々々をして出來得るだけ趣味あらせ、氣高き色を染めつけんとのみ考へて居ります、故らに未來の幸を願ひません黄金の光りは我等がライフの絶對ではございません、私は泣く事をやめます、徒らに悶ゆる事をやめます、草叢に、ソッと咲いて人知れずあせて行く白い菫は、したり顔に大きい面を眞正にさらせる日輪草より尊くないといふ理由はございますまい、私は泣くまいと思ひます、かく思つて今故らに私の周圍を見返りますと格別失望するにも當らないことを見出します、涙に浸せる意氣地ない私の姿を美くしと見る餘裕も出て參ります、此の樣な長たらしいお手紙を書く時間も出て參ります、久子樣お許し下さいませ。

下町の娘さんに

ねるの着物にあかいおみ帶、おしまだゞつてどのやうによくお似合ひあそばすでせう。

帳場にお坐りになつて、お客さま方のお出入に、あたまを下げたりなさるのが重いやうな氣持ぢやなくつて?袖は山の手のお孃さまより下町娘の方が好きでございます。

町人の家に生れ、町人の家にそだつたせいかもしれません。東京にをりました時、毎日お夕飯後は三十分間くらゐ、からだのよわいをばと、ふたりであたりの通りを運動がてら散歩するのがつねでした。夏のよるなぞ、新内のながしが、牛肉やなんかの二階から投げる紙包みに、たち止まつて語る蘭蝶や、あけがらすをくらいどぶ板の上にたゝずんできくのがすきで、立つてゐると腰がひえていけないといふをばに、いつも一足さきに家へかへつてもらうのでしたつけ。

一段すむとすぐまたきれいに身仕舞した女中がお客さまのおつかひで包みをなげる、かたり手はめくらのおぢいさんでした。おかみさんがうしろからうちわでもつてあふいでやつてます。その時、てすりの間から、太い字でいろ〳〵なたべ物の名をかいたはり紙が、あかるい瓦斯のあかりに、暗いところからはつきりと見えたのをおぼえてゐます。

うちの母はわたくしに、自分の娘時代のやうな、さうね、芝居に出てくるお染のやうなお七のやうな風姿がさせてみたいんですよ、だけどわたくしがきゝませんものですから、母はみじめなつて云つたやうな顔つきしてますけれどだまつてますの。

みにくいものには似合はないとおもつてますので、しぶい、まつくろな風ばつかりしてをります。髪も、學校にゐる時分からあんな不性な束髪にしてゐたくせがついて、いまでも時々めんだうになつちやあ櫛まきにしたり、引つゝめにくびのところへくる〳〵と巻いておいたりするんですの、はゝの眉がひそむのは知つて知らぬふり。

そで子より

○（入賞）　信濃　須磨子

誰人か水晶宮に案内すと來るをまてり悲しき女
空しくも來ぬ人を待つ心より輕きねたみを覺えける哉
いぶかしさ我に背きし人こひて流す涙のなにとて熱き

○（入賞）　兵庫　松並ひさ

濱邊なる異人屋敷の船倉に赤き帆をほす六月まひる
戀になれ世になれ語る其の時も面そめぬまでたけたる心
やるせなくとぎし米をばなげやればすかさずゑばむ鳥もはかなし
君の戀我する戀と異りてほそき道をもべつ〴〵に行く

○（入賞）　姫路　九十子

逢ひそめしそのゝきをもて今君に語らば君は何となすらむ
若人の默せるまゝに二人あることは恐ろし何を思ふや

○（入賞）　花守る少女

わが心君が心となりてこの淋しきことをのがれむとする
淋しきは君が心とわが心はなればなれになるといふとき
梅雨に入る今日といふ日はかなしけれ雨はふたりをつゝみぬるかな

○（入賞）　千住　白妙女

けふも又きのふの心そのまゝに君と別れし街を歩めり

此の心世のこと〴〵く男等を呪ひても尚あきたらぬかな

○　越後　菊子

八重がすみとざす野路ゆき花野ゆきよろこび多き春の空かな

湯のやどの水白きを見すがれたる赤き花みしさびしき夕

月見草くさぶへとりて我戀をかたらまほしと思ふ宵かな

○　神戸　綠髪子

晝をいね夜をさまよひあさましき獸に似たる變り性の子

梅雨は來ぬいとしめやかに梅の實のうれし一つを土に落して

火ともせば心あかるし我かげの壁に映るもなつかしくして

○　埼玉　柏舟操子

つゝましく胸に手あてゝたゞずめる末の妹の大人びしさま

泣きぬれし瞳をはなちふと見やる海の面の白う光れる

君が顏見れば悲しもさめ〴〵と心行くまで泣かまほしかり

○　鹿兒島　華子

太陽のあないとはしき一室にこもるひねもすさびしき性かな

つまれてもつまれてもなほ芽をのばす青桐のごとわが命を思ふ

○　府下　鈴枝

いつよりか人のなげきに喜びにかゝはりもなき淋しさに居ぬ

さびしければ俳優となり我好む人に扮して泣いて見たけれ

ふと夕べはしやぐ少女の群に入りてこの悲しみを知り初めしかな

○　青森　上野禮子

ほとゝぎすうぐひすさては閑呼鳥日毎に來鳴くこの山里よ

さみだれや君がなさけの合傘に道もはるけき杉並木かな

○　静岡縣　山路るり子

雨ふらば門邊にまてよ紫の傘さしゆきて君にあひなむ

夕ぐれをいと悲しげにひろにあまる文かきをへぬ誰におくらず

山みれば心よ暗くなりまさるふもとに人と別れ來しより

○　紅子

ひとしきり君の憎さにわが心ふるへてありぬ悲しきことよ

ひさ〴〵に町のどよみの中行けば見る人毎に恐ろしきかな

○　若紫

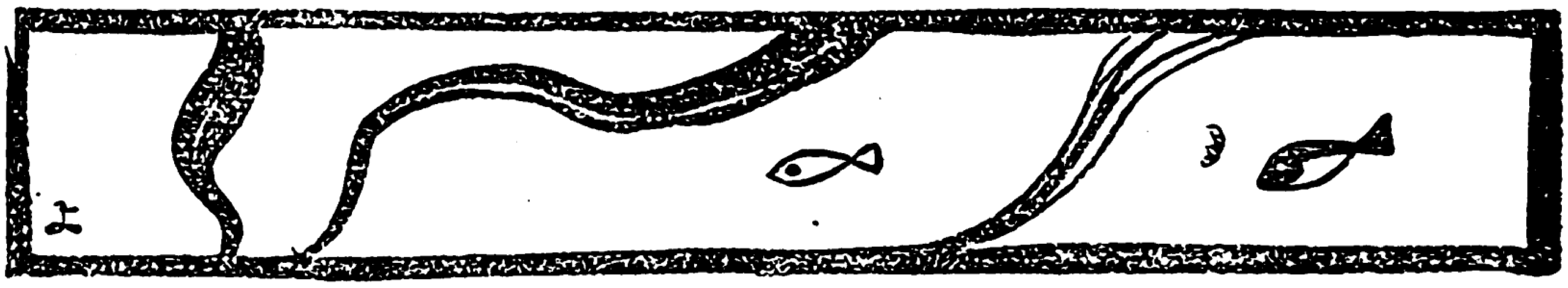
蠟燭を二つともしてピアノ彈く西の少女の繪をなつかしむ

うつとりと立琴もちて立つ姫の白きもすそに花のこぼるゝ

洋館の窓はなやかに灯ともりてギタラのもるゝ夜のたのしさ

○　大阪　貞子

逢ひし夜に逢はぬ幾日もまじりきぬこのわりなさに戀は果つらむ



灰色の壁はる室にすむ人のそのかたはらに微息を吸ふ

○　そよ子

わかれとはかなしきものと聞く故になほはげしくもなかれけるかな

何となくわすれはてけり三とせのちあひにける日も別れたる日も

○　新潟　村田けん子

ばら咲けば血潮の如き美しき少女の戀の燃ゆる思ほゆ

ちら〳〵と空に輝やく棕櫚の葉に我悲しみの六月に入る

○　秋野たか子

西の宮海に舟あり蓬ふける舟に人あり煙たつ見ゆ

夕ざれば大みこ小みこ津田の磯藻の花香ひ潮みちにけり

○　豊後　散殘る花

きざはしを一つ一つに昇る如君と相みむ日の近づきぬ

この頃のわれのわびしさいさかひてわかれし君のしのばるゝかな

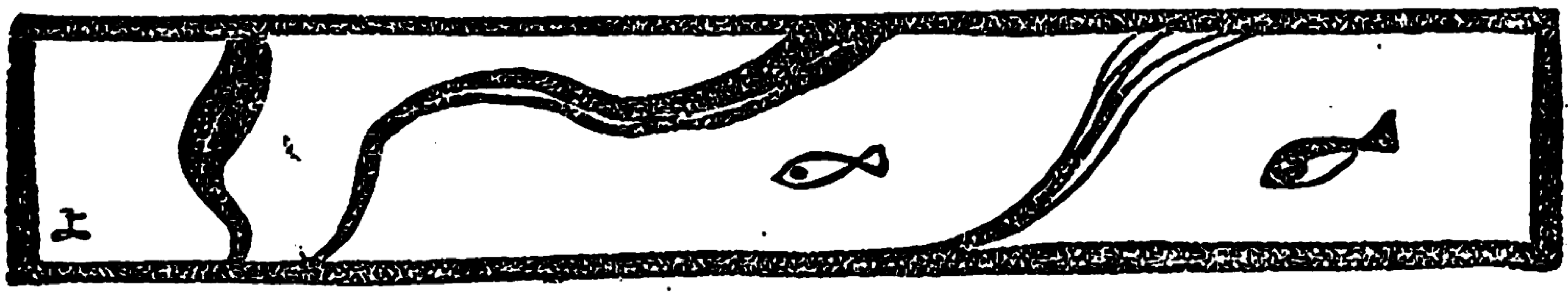
○　東京　葦邊影子

白き肌やかんとしたる日は沈みいとおごそかに星あらはれぬ

うれしきは夕雨吸へる草葉から青々としてわれを見るとき

○　兵庫　速水得子

逢ひたくば又新町へ來やしやんせ泣く夕霧に五月雨の降る



手をとりて別を惜む停車場の悲しき夜をば泣きあかさなむ

○　長崎　うたかた

潦に桶の山吹こぼれ行きて青き小鳥の首かしげ居る

歩み來し靈の二つは默しけり尊き自己の誇の前に

○　苔の花

若き日にあらがひもなくおとなしう別れてこしを悔ゆるかひなさ

かなしくも優しき母の心にぞしらず〳〵にわれはなりゆく

○　福岡　林まつゐ

明がたのはとばに行けば我を待つ船の夜すがら燈ながら

みんなみのつばくろ巣ぐむ御家の旅の情も寢心もよき

かはる〳〵寫りに來る大鏡わが次に來る隣を思ふ

○　佐渡　わくら葉

悲しみに得たへで今日も我こゝろたゞ默然と死にしたしむ

湯浴みして君をひたまつ夕ぐれの室にたゞよふ白粉の香よ

○　藻の花

緋葵のあかき小さきそのまゝをみ胸のうちに咲かせばやなど

疲れはて死など夢見るあかつきに鷄鳴きゝぬ君あらずして

此の命何に生くべきわれ知らずたゞ太息しぬひるすぎの頃

店頭印象記

川島鈴枝

是非一度行て見たいと思つてた艶ちやんの家へ、やう〳〵遊びにゆける事になつたので、仕度もそは〳〵と二時何分かの大森發に乘り込むだ。

Y市に着て車が店につけられた時はもうそろ〳〵灯ともし頃だつたけれど、賣品の鏡や玻璃器が店を明るく見せて一鉢の白躑躅が鏡に幾つもになつて映つてるのが目についた、何とはなし初夏らしい氣分がした。帳場で何か書いてた艶ちやんが『いらつしやい』斯云つて筆を置いて顏を上ると、私だつたので吃驚したがもう抑へきれぬ嬉しさが溢れて居た。素早くたつて洋傘と荷物を引たくるやうにして、さあ〳〵奧へとずんずん先にゆく、宅に居た時より大きく一層綺麗になつた艶ちやんも氣は相變らずだと思ひ乍ら後について這入る。長火鉢の側に煙草ふかして居た小母樣が、まあよくねえと嫣然に迎へてくれる、お茶が出るお菓子が出る中に草助樣が仕事から歸つて來た。

話に花が咲てる時でも店へお客が來るので、艶ちやんは度々座をたゝなければならない、で小母樣が、お店も珍らしいでせうからお店でお話しやうぢやありませんかと座蒲團を運び始めた、お店は瓦斯の光が紅や水色の玻璃に美しう輝いてまばゆい程明るい、菓子器やコップが危つかしく飾られて、一寸觸つたらがらがらと崩れて終ひさう、それで大抵の地震では何ともないさうだ、よくあんなに上手に積まれたものと思ふ。此處は東京で云へば銀座といふやうな通りだし、今は時候がよいから人出が多い、皆飾窓を見たりしてゆく、その安物を手にとつたり、少し長く見てゐる時は『いらつしやい』と誰かゞ聲をかける。そして出て行く中には、ずつと行つて終ふ人が多い、私なら腹がたつけれど誰も平氣で居る。私は又斯して居るのが羞かしくてならない、極端に云へば裸の處を人に見られたやうな氣がする、だつても門を這入つてそれから玄關があつて、其玄關は閉切で外から奧が見えるやうな事はめつたになくても、生垣でも透いてると目隱しをつけなければ……と思込むでる私だから。

十一時頃からそろ〳〵店をしまひ始て、床についたのが十二時、それでも翌朝は床がなれないので早く眼が覺めたけれど、每晩其頃まで起き慣れない私は、或

朝九時過、もうお稽古から歸つた艶ちやんが帳場に坐り込む頃まで寢込むで、階下へ降りてくのが體裁が惡くて困つた事があつた。

逗子へ一度遊びに行たきり家に許り居たので、退屈でせうと云はれる其度に、イヽエ往來を通る人を見てるだけでも倦きないと云つては笑はれた。お店にも少しは慣れてきた、はづかしいやうな事も薄らいで、お客の込む時は戸棚から品物を出したりして手傳つたけれどあの『いらつしやい』といふ言葉は怎してもロから出なかつた、若し一度でも云へたら此店にある氣に入つた物を上ると皆に云はれてから、お客の來る毎につつ突かれるけれど、もぢ〳〵してるので間に合はなくて艶ちやんが云つて終ふ。艶ちやんのはまた特別調子が好い、買物に來たお客でない時も『いらつしやい』と云つて終つて首をすくめる。

艶ちやんは本當に商賣上手だ、何々を見せて下さいといふと、大儀がらずに種々出して見せる、お客が何とかかとか難をつけると甘く打消してゆく、あつちてつちいぢり廻してやう〳〵買ふ事になると、それを動かないやうに器用にくる〳〵と新聞紙に包むで紐で結へてさげるやうに拵へる、さうしてる間にお客があとから〳〵來ると手も口もなか〳〵忙がしい。

おい齒磨コップが有かいと横柄に云つて、書生ともつかず妙な男が這入つて來た事があつた、それでも大人しくはいございますと並べて出すと、長い間見ちらかして置てまた懷中鏡を見せろといふ。それもこれは顏が曲つて見えるとか黄色く見えるとか何とか云つてさん〴〵見ちらして高いから駄目だと云つてぷいと出てゆく。其麽時でも艶ちやんは好いかげんに待遇つてるけれど、後で商賣して居ればこそ此方では大人しくしてるけれど、彼麽のは初めから買ふ氣ではないの冷かす積りで來たのは分りきつてるのつて悔しがる。豆ランプのホヤ一つ買ひに來る人にも、有難う御座いますと頭を下げる、殆ど習慣でするやうなもの〻考へると嫌になるだらうと思つた。

或暮方に職工風の人が來て陳列棚からコップを手にとつて見て居たが、如何したのかがら〳〵と落して砂糖壺だの一寸一圓餘の物を破て終つたら、慌てゝ一歩店を踏み出して逃げやうとした、『もし一寸と』艶ちやんが呼びとめて、『宅でもそれを商賣にしてるのですから少しは何とかして頂かなければ』と靜かに云たので仕方なく戻つて、『それだつてないものは仕樣がない己

等は毎日食ふや食はずで居るんだからお氣の毒樣とも云はず横柄にいふので、小母樣が出て少し強く云つたら、文句を云ひ〳〵投げるやうに白銅一つ置いて逃げて終つた、『先方の出やうで此方では一文だつて貰はふとは思はない此間は奥樣らしい人が金魚鉢を買ひに來てつひ手が辷つて壞したら、お金を置いて買はずに出て行くので追かけて品物を渡さうとしても如何してもとらない、其麽時は家が分つてれば屆け度と思ふ程だけれど、今のは本當に憎らしいそれに宅では草助樣が人が好いから何程損するか知れない、』と艶ちやんがじれるのも無理はない其時草助樣は、『今日一日まるつきり損になつて宅でも困りますから……』と氣のないやうに云つた許りだつた。少しまかりませんかと云はれると斷りきれなくて直にまけて終ふ程人が好い、隨分くどくまけろといふ人がある買物上手といふのか知らないがあんまりくどいと卑しく見える、中には何方が賣方だか買方だか分らない程丁寧な人もある立派な風をして居て五厘一錢を爭ふお客もある。また『此方では此位大きさの板硝子は何程ですかまた磨ればどの位でせう』と聞きに來て、直段をいふと、それでは又と云つて出てゆく、其麽のはY市中の硝子屋を悉皆きいて歩いて、假令一厘でも五厘でも安い家から買ふのださうである。『だから商賣も骨が折れる、家なんぞは小父樣が死んでから斯して地味に小僧も置かずに働いてるからある財産で怎か斯かやつてるやうなもの、此通りで借金してる家も少なくない』と小母さんはしみ〴〵云つた。



本當に此家では皆がよく働く、草助樣は重に硝子の嵌込にゆく、たつた一枚でも遠くても寸法をとりに行つて來てそれから切つて嵌めにゆく、氣の毒のやうだ、ダイヤモンドの見えない程小さいのが尖端についてる小刀で硝子きるのは小母樣の役だ、これは一寸失敗るともうダイヤが駄目になつて終ふさうである。艶ちやんは大抵お店番である。らんぷの需用が減つてから閑になつたけれど、今頃から夏期中と暮はなか〳〵忙しいさうである。磨硝子は草助樣一人で間にあはないと家内中でする、全體に磨るのはまだ好いけれど中をあけて、一寸位の幅だけ磨るのや、隅を殘して磨つたりするのが面倒で本當に嫌だと艶ちやんはこぼす、私が仕て見たいと云つたら、これ許りは手があれるからさせられないと云はれた。

斯して暫く居る間に可笑しかつたのは店頭を通りながら鏡に映る自分の姿を十人が十人見てゆく事だつた見ない樣な風して横目でちよいと見てゆく人もあるしづう〳〵しく帶の格好や衣紋を直してゆく人も有る。驚いたのは病人の便器を取替に來た事だ。外のお品と違つてこれ許りは不可といくら斷つても、病人が嫌だと云つて一度も使はないのだからと云つてきかない其癖使つたらしい形迹がある、結局直段を何程か引いて取つてもらつた、隨分馬鹿々々しい。

商賣つて實際骨が折て餘程氣が練れてなければ出來る事でない、面白やうにどん〳〵賣れてゆく時は見て居ても愉快である。もつと面白い商賣も嫌な商賣もあらう、恁麽店でも自分で出して賣れたら面白からうけれど、到底私等には出來さうにも思へない、それに郊外に住なれてはあの塵埃が何より辛い、殊に風の吹く日は撒いた水が直に乾いて、息がつまりさうである。



牛のゆくへ

松葩紫花

丁度舊六月十五日が其村の夏祭りで、終日久留米絣や白絣の人々が往來して何となく村が動いてゐる樣な甦つてゐる樣な、けれども旅の私、殊に夫が處用あつて歸省中であるし私の家には何の興もない、私は一人で夕飯を仕舞つてまだ洋燈もつけずに坐つてゐる時であつた、グワサリ〳〵と妙な音が上の畑の方から聞えて來る、初は母家の人が畑へ何かとりに來てゐるのだらうと思つてゐたが、音はいつまでも依然として絶え間もない、ふと疑うたのは祭の夜の混雜に紛れて乞食が玉蜀黍の實をとりに忍んで來てゐるのではないか、と兎も角も見に出て見ると、月代の漸くほの白い薄暗の生え繁つた玉蜀黍の中で黑い〳〵大きなものが動いてゐる、動く度にグワサリ〳〵と音がする、母家の牛であらう、誰に許されて畑の中で恣に作物を食つてゐるのであらうか、恰も公然あてがはれた馳走の樣に落ち着て食べてゐる、まさか食べさしてあるのではあるまいと直ぐ母家へ右の次第を告げると夕飯最中の母家の家族は吃驚して、お爺さんが跣足のまゝ驅けつけて來て漸ととりおさへて牛小家へつれ込んで繫いだ、餘程以前から食べてゐたのか大分廣い面積の作物を路傍の雜草の樣に無慘に食ひ荒してある、お爺さんは小家へ連れ込むと一しきり牛を相手に作物を荒した罪を責めて、散々に惡たいを吐いて仕舞うと私に禮を云つて歸つて行つた。

其後で牛はさも怨めしさうにモウリ〳〵と騷々しく泣きたてゝゐる、不平なのだらう、怒れたのが不平なのだらう、否私が見つけて秘に母家へ告げたのが不平なのだらう、餘計なお世話だと私に云つてゐるのかも知れぬ、私はあの牛に怨れてゐるのだ。

然しながら人間ならどうとかして主人に知れぬ前に忠告もしやうし、主人の手前も庇護しても進ぜるし、手をとつて連れて歸りもして上る、けれどもそれ等の事を一切不可能で到底私の力では及ばぬ場合、飼主のためにも、牛のためにも私は告げねばならぬではないか、私は決して〳〵お前を主人に怒らせやうと思つて告げたのではない、けれども告げたのは私である、それはお前が大きな獸であるからである。

こんなことを思つてゐる内も牛は矢張り情ない樣な

泣き聲で小家中を荒れ廻つてゐる。

祭りのお客も歸りつくしたが村中は靜になつて滿月は涼しい光に輝いてゐた。

其夜の夜中過ぎ、午前一時頃であつた。

『四ツ辻のお爺さん、……こゝの牛でないのかい、牛が往來を歩き廻つとるぞい。』

寢耳に斯んな聲が聞える、四ツ辻といふのは母家の呼び名である、又牛が出たのだ、母家は急がしさうに戸を開けて騷いでゐる。

『宅の牛は早宵に出とつてお爺さんが繋いだんぢやのに』と息子のお内儀さんが甲聲で叫んでゐる内に私の窓の下をお爺さんだらう、跣足らしい音で、テン〳〵テンと牛小家の方へ走つて行つたが、直ぐ引き返して來て『宅のぢや〳〵〳〵、秀よお前東さがせ、己ア西さがすけに、』云ひ捨てゝ西へひた走る、秀はんは家を飛び出すとお爺さんの命に從ふて東へ走つた。

『お爺さんたらどんな繋ぎやうしてあつたんだらう、一晩に二へんも牛逃がす阿呆があるもんか』とお内儀さんは裸の子供を抱いて家のぐるりを行つたり來たりしてゐる、私が出て行つた頃には近所の人々も漸く聞き傳へて夜着のまゝで手足の達者なものは思ひ〳〵の見當の方角へさがしに出た。

私はもしやお爺さんの見違ひではないかなど思つて牛小家を靜にのぞいて見た、成程如何にも牛は留守である。

無事に早く捕へられりやいゝが、人に怪我などなければいゝが、斯う思ひつゝ其近邊を氣をつけて見たけれど今度は遠方へ行つたのか見つかりさうにもない、

牛はどこを歩いてゐるのだらう、黒い大きな獸は何と思つて小家を出たのだらう、人に飼はるゝが運命の身が運命に逆つて開放の世界に脊延びしたとて仕舞がつかぬではないか。

黒い大きな獸よお前には深切な主人もあり、安心な小家もあるではないか、宵と云ひ、二度までも、今夜はなぜそんなに反抗するのだ、こんな事を思ひながらそこに立ちつくしてゐると、後から誰れか來て、

『母家の牛が走つたつて申しますが、あぶない事でしたなア』と云ふので振り向くとそれは私の直ぐ隣の車屋（人力車屋）の菊さんであつた。

『牛小家毎にようさがしたんか知らん』菊さんは吸ひがらを手の上ではたき落しながら私に尋ねる。

『どうか存じませんけれど……、貫があつても、外か

らはひれるでせうか』と私が云ふと、
『牛は妙に他の牛小家へ遊びにはひるものです』斯う云ひながら菊さんは信ずるところある如くスタ〳〵と小一丁引き上つた隣家の牛小家へ一人はひつてゆくので私はその四ッ辻の月下に彳んで待つてゐると、
ゴト〳〵ドタン〳〵、と隣家の牛小家には變つた事が起つてゐるらしい、オ――オ――、コラッ、オ――オ――、と牛を牽き出してゐる樣な菊さんの聲。
私は無意識に五六間歩いて行つた。
『居つたのですか』と底音に聞いて見た、其の聲は我ながら誠に忍びやかな聲であつた。
オ――、オ――、シイ、シイ、と菊さんは漬物桶から澤庵でもとり出して來る調子で容易く牛を見つけ出して、例のくはへ煙管のまゝ悠然と歩いて出て來た。
私はそれが可笑くて仕方がない、不斷から萬事可笑い人だからでもあらうが、皆で一生懸命になつてゐる處へ、一番後から出かけて來て、くわへ煙管で行方不明になつた牛を、暗黑からそつと連れ出して來た調子が、如何にも昔の狂言か何かにありさうで、何處までも人を笑はせる菊さんであると、私も可笑かつた。皆山草でも刈つて來――い、序に蕨も採つたりなア――、夜が明けたら辨當持つて行つてやるぞ、牛は牛小屋へ遊びに入るもんぢやア――と言つてゐる。
やがて菊さんは牛の無事を告げ知らして歩いた。
居つたんかア――、オ――イ皆牛居つたぞ――、居つたわ――イ、居つたぞ――!、々々・・・。
沈默のまゝさがしてゐた人々がそれから〳〵と傳へるので思はぬ方角からも返事が起る。
私は母家へ走つて行つてうろ〳〵してゐるお内儀さんに告げた。
ヘエ――マア〳〵、〳〵〳〵と只呆れ返つて居る、『菊さんお世話になりました、上の小家に居つたつて云ふかい、マア有難う存じます』と非常に喜んでゐる、勞して効なき人々はぞろ〳〵と集つて來て皆口々に菊さんの功名を賞讃した。
どうしてはひつたのか、牛は隣家の牛小家へ遊びにはひつて二疋で穩に遊んでゐたさうである。
『それにしても牡牛同士が喧嘩もせずに不思議な事があるもんぢやなア、可笑しいなア、妙だなア』と遂には一つの笑ひ話になつてドッと笑ひ崩れて午前の月下を人々は散つて行つた、あとには蛙の聲ばかり――、草葉の露が光つてゐる!!

帝都學生氣質

櫻木雪江

▲赤門

K兄樣！、法科の秀才とうたはれて、風采は御頓着なきあどけなさ、鐵縁の御眼鏡に茫々たる濃いお髯、懐ろには金文字入りの部厚の洋書三四冊、黒く汚れたボールのミットまですらりと顏を並べて、御胸の高さ正に尺餘り、薩摩下駄の緒の太さ、日本晴れのあしたにも雨の夕べにも引き摺り歩く其の蠻勇さ、奇拔さ、向陵時代の面影そのまゝ、濃き一の字の眉の當り犯し難き威風そなはる、來年は榮えある學士の月桂冠と共に恩賜の時計を戴く方かと、普通人の眼にはをかしくも思はれましやう、驚かれも致しましやう、俊才も跣足で逃げて行きさうに……。

一つには端艇界に選手の榮譽を荷つて、春は櫻堤十里、墨田川に競走の眼ざましさ、オール持つ手に花吹雪、勇勢なる青組、法科の勝利は兄樣の御手に……義理ある兄樣とはいへ、私を子供のやうに劬り可愛がつて下さる兄樣、私は一番好きでございます、よくお友達が入らしつては、「雪江君は良い兄樣を持つて嬉しいでしやう」なんて仰る、全くですわ、全くですわ、まして兄樣の虚飾のない蠻カラが尚奥床しく思はせてどんなに私の肩身がひろいことでしやう……

やれ香水のレゾールの絹手巾のと、學生時代から浮身をやつして、蜻蛉のやうに頭ばかり光らせて入らつしやる現代の男方達、ちと御反省遊ばせや。

▲三田

三田山上の秋月高し、輝く選手のそのいさをしフレー／＼ケーオー……。

野球部のキャピテインとして、遊擊の難關を引受けて驍名を斯界に馳せた茂也樣、慶應野球部の花形――眼さむるやうな紺色の洋服に、金釦の輝き、ペン大の徽章床しく、御脊のすらりと高く見惚れるやうなスタイル、小形の洋書を御手にして、日々の御通學振りいき／＼とした御顏、正しく几帳面な御性質、今年度優等で御卒業なすつた呉樣とは御親戚同士、理財科の秀才として、茂也さんの御名は三田の町に高うひゞいてをります。

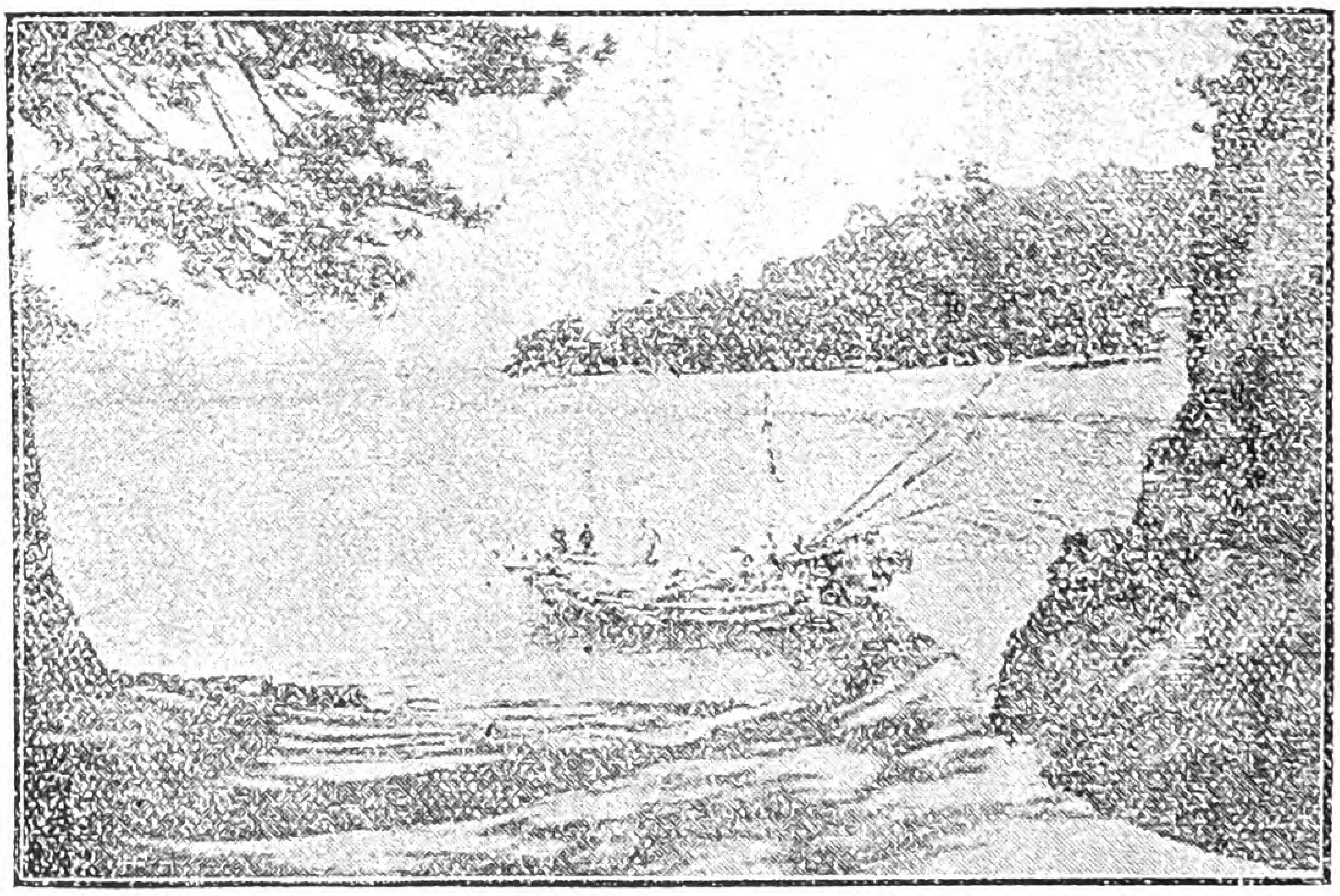
新樹ハ緑り深き間、白壁に朝の日榮ゆる櫻田門外に電車を乘換へて、札の辻行の電車にひらりと輕く：：元氣に滿ちくした紅顔の茂也樣、虎の門外幾多の女生徒の視線を集めて、海老茶に紫に、春日光りあふるゝの時、廣やかな三田のグラウンドに盛大なる運動會の一日、興深き競技數十番、美しく輝ける異性の應援旗は茂也樣の一身に百蝶と亂れ散りて、來賓席の正面紅紫の花とりぐにゆらめく：：

まことや三田の俊才、塾花とも稱えましやう。

▲向陵

春まだ淺き武香陵、濟世利民の城高く、塵雲濁流せきとめて、聳えしまゝの十餘年、榮光永久にうごきなき、北斗の光り自治の旗。

懷しき蠻聲、胸そゝらるゝ北寮々歌、仰ぎ見れば星座は百光を放ちて、さらくと青葉の葉ずれ、柔い夜風は快く肌に沁みる。袂に入れたる寮歌集、そと擴げて靜かに頁を繰れば、いつか眼は熱い涙に曇つて、勇ましい歌字も見えなくなりました。生氣の充實した熱血の溢れた若々しい歌の主聲の主、堪らなくなつかしくて：：：：：：。



岩打つ波

秀　才の榮譽を細き双肩に荷つて、向陵の健兒、樂しき寮舍生活三年、未だ成らず、落花しきりに春泥にうづもれて、花の悲哀を偲び合ふ夕べ、道夫樣は胸に病を持つやうになりました、生來蒲柳の性は過度の勉强に勝ち得ることが出來ませんでした、最初輕い病と思つたのは遂に强烈な肋膜炎に冒されて、南湖院の冷たいベッドに横たはり、眞白なシーツの上にあかず、學校の事や寮舍のことを云ひ續けて居られました。

丁度去年の蟲の音細る頃、暗い冥府路に明るい此の世を捨てゝ逝つてしまはれました、私はどんなに悲しんだでしやう、殘念だつたでしやう、あの若々しい貴公子的な眼鼻だち、蠻勇揃ひな一高には餘り相應はしくなかつたのも當然だつたのでしやう、人生の不可解は藤村さんの巖頭の感ばかりではありません、生のもろさ死の悲哀さを沁み〴〵感じて、涙は止め度なく流れました、あゝ道夫さん！　自由に進むべき幸福の中にありながら、儚い運命に囚はれて、まだ二十歳の若さで此の世から離れてしまひました、さぞ冷たい地下に世を呪つてゐることでしやう、二十三私は涙の女となつてしまひました。

▲上野

晝なほ暗き青葉若葉の木下道、觸るれば綠りの雫、袂をそめん、新しき藝術風は上野より流るべし。

上野公園を前景に日暮里根岸の靜けさを背景に、宏大なる美術學校の大建物、若き藝術家の集りは美しくも淸くも匂ふてをります。

西洋畫科の公篤様、英國に於て日本の油繪師として認められた、BKH（撫松熊太郎原）で名の通つた、肖像畫專門の其の原さんを大變崇拜して入らつしやいました、先頃原さんはお亡くなりになりましたので、其の遺物として、パレツトしかも繪の具のついてゐます、其の携帶箱を命よりも大切に、どこへ行くにも持つて居られます。原さんは素敵な勉强家でしたから「僕も大いに努力して、パレツトや箱に對しても奮發して絕體のものにならなくてはならない」つて大變意氣込んで居られました、畫板の上に染め出した繪の具のさま〴〵の色彩、筆の運びのあざやかに、植物園の春色や青い芝生の柔かの、霧深き日比谷の夜景、アーク灯の明るき線、皆美しく拜見いたしました、お部屋に供へたいろ〳〵なお道具、裸體の半像、壁に掛けたる明眸の少女の額、サフランの淡き紫の色、何れも美事なのに感心致しました、未來の大美術家養成所の美術學校の新しい空氣が私は大好きでございます、藝術！、何んてなつかしい名でしやう。

公篤様の御前途に光明あれかしと祈つて・・・・

▲一つ橋

青柳づたひお堀の水の淸さをうけて、一つ橋の洋館帽子に卷きたる黑きレース、蛇の徽章の氣高さ、高等

商業學校の治一樣、お郷里は佐賀と承りました。
　高商を御卒業になつたのは一昨年でした、今は三菱に敏腕家の聞え高く、

　　高商出てから十餘年今ぢや滿鐵取締り、秋の小鹿の鳴く頃は賞與の金が二萬圓……。

よくお二階の窓で歌つて居らしつた、其御名譽を現實に見る御喜悦のお顏が拜見致したい、何れ近き日に於て……、有望なるかな好青年、私はそれを一日も早かれと期待してをります。

治一樣とは親身のやうに隔てなく御交際致しましたけれども、私はいつも尊敬してをりました、お年は二十七私とは四つ違ひ、奧樣が御郷里に入らつしやるとか入らつしやらぬとか、人の噂さ、私は其の眞僞を聞く勇氣もなく、心にかゝりながら聞きもしませんでした。快活な邪氣のない優しい御氣立、よく母がお立派な方つて賞めてをりました、只今は赤坂にお住ひとか先日路上で上村さん（高商出）にお眼にかゝりました時、「Hから便りがありますか、近頃獨りで寂しがつてますぜ」なんて仰しやつた、獨り、馬鹿に強く其の二字が私の胸に響きました。

それゆゑに自由戀愛にせよ、合法戀愛に（譯者曰、結婚を意味す）せよ、醜惡に、復讐的に、又殺人的になつたものと、たとへ自己の生命を奪はうとも、愛人の生命は斷じて奪はぬものとの間には、自然差別の大なるものがある。併し生命增大の見地から見れば、熱切な、勇敢な、自己犧牲的な、忠實な自由戀愛と——合法的戀愛でも——全く人間最良の性質を働かないものとの間にも大なる價値の差別がある。これと同樣に、賤しき虛榮の不生產な性欲的冒險卽ち感覺に對する下劣な飢渇と、人間が新創造力をそれによつて得る情熱との間にも亦差別の大なるものがある。情的の嵐に身を任せるといふことは、一方の場合に於ては、旆旗の如きもので、今一方の場合に於ては帆の如きものである。

エレン、ケイ——ちいてう譯

○
折り〳〵は笑みにも出でゝなつかしき我初戀の甘き思ひ出
美しき青葉のもとにかゞやけるルビーに似たる木いちごの實
金澤　畔の花

○
昨夜の夢まさ夢ならばよからましとひそかに思ふ寄宿舍の窓
強烈な酒の匂ひに魂も腐りて死なば足れりと思ふ
濱松市　嵐　敏子

○
ほろ〳〵と白き李の花のちる窓にわびしく物思ふとき
夕ぐれは淋しきものをましてかく小雨ふる日は堪へがたきかな
近江　愛子

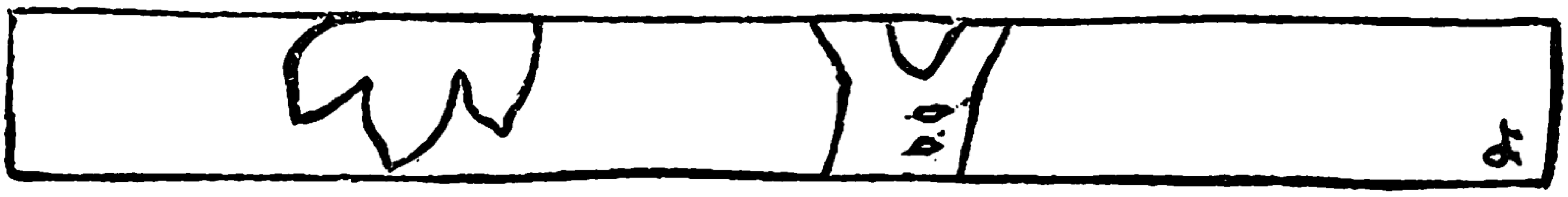
○
藝人が門邊にうたふ戀のうた好むといはゞ君うとまむか
悲しくも小膽ものとなりはてぬ君に見えしあゝ其日より
下總　浮舟女

○
いふ言の思ふに足らぬ不甲斐なきかゝる女にあきたまひけむ
逢ふことは難し別れはいと易し二つ思へば淋しくなりぬ
麹町　櫻木雪江

○
スヰートピーくれなゐ小さく燃え出でゝ若き心の歡樂うたふ
野を行けば夜はほの〲と明けそめぬ露おもたげに月見草さく
鳥取縣　水無瀨百合

○
飽食のひとゝきも尙もの足らぬ寂しきこゝろ何を戀ふるや
よどみたる青葉いきれのさゆらぎを鳥ほろゝうつ五月夜の森
岡山市　新妻みほ子

○
六月の入陽の空のあか〳〵ともゆるを見ればわが胸も燃ゆ
日に青み日に青み行く樹々の色ながめてひとり吾はかなしむ
大分縣　花村翠子



○
さびしさのひゞけばやがて歌となりその歌よりはなみだはてなし
語るべき心ゆくまで語るべきあひゞきの夜のながき沈默
橫濱市　與志多奉枝

○
ほとゝぎす君と逢ふ夜はうれしさに歌もつくらず月は西する
青桐の葉影なつかしこのまどに君いまさねば泣きにこし哉
牛込　田鶴子

○
一ツ二ツともりゆく灯を高樓のおばしまによりまたゝきて見し
しとゞぬれし衣の裾はきつはりし草の泪の雫なるらむ
日向　小池優花

○
夕ざれば紅き灯ともるわがまちの濁れる中に瞳を閉ぢてあり
もの思ふことのかなしくなりぬれどなやめる身にはせん術もなし
神戶市　垣口富美子

○
きんぽうげは黃の花さきぬ生溫き六月頃のとある暗がり
男等はなべてわれらを愛すらむ赤き唇もてるが故に
熊本縣　本島とよみ

○
鳥のかたち花の香を知りそめていつか文かく吾となりけり
石川縣　明星

○
音もなく靜かに降れるさみだれの雫になやむなでしこの花
姬路　靜子

○
我胸は透明なれど君が瞳の謎を解きえぬおろかなりけり
茨城　葉守子

○
今日も又彼の眞砂路に捨てたりし命の跡の深く殘れる
對馬　伊藤夕陽子

○
和歌山　中村君代

紀の國の波散る和歌の浦のべに眞砂地づたひ歌思ふ子よ
○　東京　河岸の女

わかれては又の日とてはなきものを心づよくも行きたまふ君
○　京都府　薗田久

大木立みどりに匂ふ夏の空に寂しさみせて默してありぬ
○　松山市　佐多榮

はま路行く少女のよさの七色や夏の光りにかゞやきてあり
○　みゆき

淋しさは夕の闇の色に似て主なき家に擴ごれる哉
○　鳥取縣　糸井衣子

我名をばよばれし時はおそろしくにげ來しものを君のこひしき
○　月島　綾乃

夕野路や白衣の人の袂にも秘めてあらむか喜びの歌
○　德島縣　蔦紅

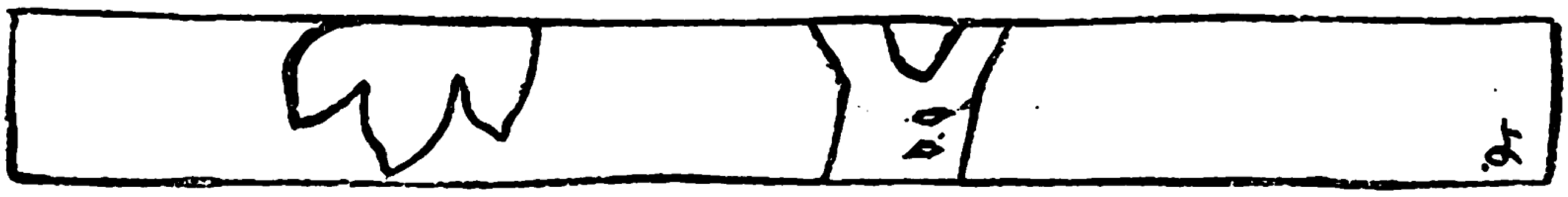
白き葉裏返へして風に亂る頃五月は京の人も偲ばる
○　上毛　姬百合

春の野に萌え出でそめし若草の父の好みに摘みて進ぜん
○　茨城縣　田村はつ子

まきそめし合歡のひと葉をつみとりぬ君まつ心やゝつかれきて
○　越後　みよの

指先のやゝ疲れたりこの夕定まらぬ戀にネルの袖ぬる
○　佐賀市　彩子

紅の灯一つ高くつく月なき宵のみさきの燈臺



雨の日に幼き時の手文庫のふたあくること君がふみ見ぬ
○　伯耆　ふみ子

ゆめさめし後のこゝろの淋しさやみだるゝ胸に雨の聲きく
○　みどり

伏しまろび又も居なほりつくづくと持てあましたる此の心哉
○　廣島縣　葵の花

野に咲ける撫子つみて君は目に涙浮べてうつ向きてある
○　千葉　伊東花蝶

いとほしや姉の消息をよまんとて眼鏡召しますあゝ吾が母君
○　久美の女

來ぬ人をしばし待つ間の術なさに皷草などちぎりては吹く
○　埼玉　渡邊積翠

初夏のみどりしたゝるその日より君も人夫われも人妻
○　福田紅花

春の夕苦吟の窓によりそへば櫻亂れぬ詩集の上に
○　札幌　赤坂すみれ

はなれ行く悲し心を熟々と思ひて泣きぬ五月雨の夕
○　越後　俠香

三千の美女にもにたるかきつばた水かゞみして色きそひ咲く
○　横濱　わかば

たづねんと誓ひたまひし日はすぎて今日も空しく暮れてゆくかな
○　紀伊　大澤古幽

婦人の歌集二種

歌集『水仙咲く日』

山頭火

歌集『水仙咲く日』の著者、杉野照子と云ふ婦人は本誌でお馴染の深い白木いと子さんの令妹であるといふことだ、私は然ういふことから此歌集を注意して讀んで見た。

全體に此歌集からは強い感動を受けなかつたけれど眞面目で、感情的な、若い女の或る一人の生活を受取ることが出來た。

此作者の心は未だ眞に覺めて居らないかも知れぬがなべての女がするやうに覺めやうとする弱々しい悶が能く分る。

先づ初めに早春の歌が少しある、皆淡々とした早春の情調が流れて居て、少女の胸に映る若き春の自然は如何にも柔かなものである。

春のけはひそことしもなく起りきて身にしむ夜を歌うたひけり

早春の日の春空が靜かなる光を見せて暮れてゆきけり

次に六歳の時に別れたといふ母を思ふ歌がある、すなほに其心持を幾首かの歌に平らかに抒べてゆくといふだけで、心から悲痛を訴へる大きな叫びがない、僅に次の二首を私は好いと思つた。

疑は親にまでさへのびて行く悲しきはわが荒みし心

我をして母あらしめよかくいひて願へど神も術を知らなく

それから教會に通つて信仰を得やうとした時の歌がある、此にも私は勝れた歌を見出し得なかつたが、

教會を出づれば夜の風さむく冷たき空に星は光れり

月はのぼる我の心はヱスの前にひざまづきをれば淸しといはん

などを稍好いと思つた。秋の末の歌がある。

秋晴の空を仰ぎてふと思ふ我戀ふる人も歌ひてありや

秋なれやもの語り讀み七日ほど姿かくしゝ友が今朝來ぬ

冬の來た歌がある。

眼の前の疊を夕のうすれゆく日が這ひてあり何が悲しや

それから旅の歌がある。

越後路のとある古驛に男ゐて我をみつむる悲しき眼かな

ひとり旅人無き道にふと出でゝ涙こぼれて泣いてゐるかな

海草はさびしき色にしをたれて岸の砂地にまろびゐるかな

旅の歌は多くもなかつたが、概して旅情の動いてゐる歌が多く、女の旅の心細さなどが灰かに思ひやられるのであつた。

祖父の病床に附添ひて居た時、及び祖父の亡くなら

れた時の作がある。

何々の神につかふる心にもなりて靜に御柩を守る

の歌に新しい心持があるやうに思はれた。

愛の花と題した戀の歌が澤山ある、作者の戀は空想的の美しいものだ、處女式のものだ、つきつめた善良なもので、弄んだり、慰んで居る戀とは違ふやうだ、それだけ抽象的の作や、動きの取れぬ作が多い。

思ふ人ありと思ひてしめやかに見上る空はなつかしきかな

やはらかう君に抱かれ子と思ふ此まゝにしも命絶えよと

君を戀ふる心はあれどみだらなる女となるが心悲しも

春の夜や我を思ひて寢る人のありと思ひてほゝ笑みて寢る

我が靈は野越え山越え君の住む家に至りてほと息づくか

この刹那々々の喜びに生くることにもうみそめにける

偖て此歌集は、一首々々拔いてみるといふよりも、全體から受ける反映に、何人かの姿が表はれて來るといふ方であらう。私は其處におとなしい心の若き婦人を見る、手ざはりの柔かな女を想ふ、熱し易い、されど盲目的にならぬ、感じ易い、されど苦しまぬ、然う云つた女の姿を思ひ浮べ、然うして此の『水仙咲く日』の著者、杉野照子さんの――歌――生活――のますます淸く、美しからんことを祈るのである、妄批多謝。

『涙痕』を讀む

はなよ

一

流れ落つる涙のひゞきおのづから歌となれるや阿佐緒が歌と

吉井勇

阿佐緒さんの歌集『涙痕』を私が讀んだ時、僞はらぬ私の心は同じ波動に生きて來た思を再び蘇生らしました、阿佐緒さんの歌は、才人の歌であると云ないかも知れません。またさう激越な感情を火の塊のやうに旋轉させた歌でもないと思はれます。近代の肉感的なそれとも異つてゐるやうです。然しそれであつて、阿佐緒さんの歌が、才人でもなく官能の人でもない普通の女である、私どもに同感の多い譯であると思ひます。私は阿佐緒さんの歌を批評する事が出來る程歌に慣て來たものではありません。私はたゞ自分の過去が同感し得られる程度で阿佐緒さんの歌からうける印象を紹介するやうに、何か云つて見たいと思ひました。

二

すべての文藝上の作品と作者の容貌との間には、消す事の出來ない強い約束であると思はれます。此の歌

集にをさめられてある阿佐緒さんの肖像が、それを證據立て居ります。重氣に見える程多い黑髮や、伏目勝に、然し思ひ入るゝ涙のあふれさうな、圓い美しい瞳に、『涙痕』四百首の歌が、一粒々々の露を溜めてゐると思はれます。

「宮城野に住むたをやめ」阿佐緒さんの戀に似た淵に身を投げ出した女は自分の聲を『涙痕』に聞く事が出來ませう

白玉を見出しごとく君を見し此のよろこびを長くねがはん
恨みつゝ蛇となるより戀ひわびし石となりける人にならはん

然し『涙痕』全體に歌ひ出されたものは、人を慈しみ相思ふ涙ではなく、別れた後の苦しい涙なのでありまず。其の涙も歡樂の果てに倦いて別れたのではなかつた、多くの戀にはありがちのつまづきに、二人の心が離れ離れになつたうらみそれに對する自分の戰ひの弱さを悔む悲しみであります。

同じ世に生れてあれど君と吾空の如くにはなれて思ふ
たゞ君をすぐれて思ふとばかりにかろびたる名を負ひし吾かな
心弱くもとより君を戀ふ力なしと知りつゝ思ひやまれず
あとさきを少し思へる心よりたゆたひに勝ちになれる戀かな
とげんともねがはずなりし戀なるになほすてまどふ身のあはれなる
このまゝの別れとすれば悔まれぬわがやさしさの足らざりしなど

別れて後の悔、別れて後の涙、別れていやまさる戀の苦しさ、人の憎さ可愛さ、思ひ迷ふ心はある時は死を希ふ、ある時は空を自由にとぶ蜻蛉の生を羨む。

憎しみも怒も遂に君おもふ涙とかはるこの弱さゆゑ
言多くわが恨むをば鳥の啼くほどにも君は思はざるらん
思はれし思ひあがりにまかせたる戀のむくいを別れてぞ知る
自らを殺すすべなきはがゆさをまた思はする寒きひとりね
吾とわが胸の傷より血とゝもにたえず流るゝかなしみの歌
名に富にみゆづるごとき輕き戀君のせしとは思はねどわれ

かくして別れた阿佐緒さんはその形見の、涙を増す種の可愛子をあげられました。父を見知らぬ可愛子をたゞ一つの翼の下にはぐゝむ事はなみ〳〵の辛さではなかつたでせう。けれども又女ばかりの知る強さです。

狂ほしく死を思ふ夜もかたはらに寢し子を見れば心なごみぬ
戀といふめでたきものに劣らずと兒をし抱けば涙ながるゝ
さびしかり母の泣顏ゑがきしとしたりがほするわが子見るにも

然しかばかりの涙の海にひたつて生てゐたその心が幾年かの風月に慣れてゆくうちに、あきらめの心持がいつとなくその胸を領しました。

何かあらん人のひとりに思はるゝはた思はれぬかばかりのこと
身をあげて男によるを恥とさへ思ふ心のおのれとなりぬ
涙もてわが命とも思へりし昨日の我にそむかんとする

涙の底をくゞつてくる苦しみ悶えて來た心が、やがて次の歌に到達しました。私はその歌を見た時、苦しみの底に貴い寶玉を克ち得た阿佐緒さんのために眉を開きました。

吾といふ一人にかちしあたひをばおのれのみ知るおのれのみ知る

私は歌を味ふ上の束縛を忘れて此の歌が好です。

現代十婦人

高點十婦人

與謝野晶子夫人
三輪田眞佐子刀自
下田歌子女史
棚橋絢子刀自
鳩山春子女史
跡見花蹊刀自
嘉悅孝子女史
三宅花圃夫人
山脇房子夫人
平塚明子女史

☆ 神奈川縣　くれなゐ子

下田歌子　與謝野晶子
嘉悅孝子　棚橋絢子
跡見花蹊　野口小蘋
鳩山春子　山脇房子
田村とし子　三輪田まさ子

☆ 長野縣　すま子

棚橋絢子　鳩山春子
矢島楫子　跡見花蹊
與謝野晶子　平塚明子
山脇房子　下田歌子
三宅花圃　松井須磨子

☆ 新潟市　秋野まり子

跡見花蹊　三輪田眞佐子
與謝野晶子　三宅花圃
下田歌子　廣岡あさ子
鳩山春子　野口小蘋
嘉悅孝子　棚橋あや子

☆ 京都府　友子

三宅花圃　跡見花蹊
三輪田眞佐子　棚橋絢子
山脇房子　池田蕉園

小金井君子　與謝野晶子
嘉悅孝子　下田歌子
☆　芝區　菅野初見
宮川壽美子　棚橋絢子
三輪田眞佐子　山脇房子
嘉悅孝子　下田歌子
津田梅子　跡見花蹊
矢島楫子　鳩山春子
☆　廣島縣　美津子
跡見花蹊　下田歌子
棚橋絢子　三輪田眞佐子
嘉悅孝子　與謝野晶子
三宅花圃　村井弦齋夫人
長曾我部菊子　岡田八千代子
☆　東京　深雪
三宅花圃　矢島楫子
津田梅子　棚橋絢子

下田歌子　三輪田眞佐子
嘉悅孝子　榊原蕉園
與謝野晶子　田村俊子
☆　越後　はつ子
伏見宮恭子女王殿下
山ノ内侯爵奥方禎子の方
小笠原伯爵夫人貞子の方
下田歌子　鳩山春子
跡見花蹊　三輪田眞佐子
棚橋絢子　山脇房子
村井弦齋夫人
☆　千葉　伊東花蝶子
三輪田まさ子　目賀田謠子
三宅花圃　嘉悅孝子
矢島楫子　山脇房子
下田歌子　鳩山春子
加納いつ子　塚本はま子

☆　青森縣　上野禮子
矢島楫子　安井哲子
下田歌子　鳩山春子
三輪田眞佐子　跡見花蹊
棚橋絢子　與謝野晶子
神戸絢子　谷田部順子
☆　横濱　若葉
阿部銀子　與謝野晶子
嘉悅孝子　大隈あや子
江木榮子　下田歌子
棚橋あや子　三輪田まさ子
山脇ふさ子　宮川すみ子
☆　日向　優花
與謝野晶子　鳩山春子
三輪田まさ子　海老名やそ子

安井てつ子　羽仁もと子
平塚明子　新渡戸博士夫人
東郷大将夫人　三宅雪嶺夫人

☆ 姫路市 九十子

跡見花蹊　鳩山春子
與謝野晶子　原田琴子
平塚明子　尾島菊子
長谷川時雨　池田蕉園
松井須磨子　日向きん子

☆ 伯耆 田村美子

與謝野晶子　田村とし子
平塚明子　神崎恒子
尾島菊子　野上彌生子
尾竹紅吉　長谷川時雨
岩野淸子　岡田八千代

☆ 熊本縣 本島とよみ

與謝野晶子　下山京子
平塚明子　日向きん子
上山浦路子　松井須磨子
江木榮子　太田きし子
田村とし子　小笠原貞子

☆ 鳥取縣 水無瀨百合

田村とし子　神崎常子
與謝野晶子　日向きん子
尾島菊子　平塚明子
野上やよひ　中野初子
長谷川時雨　尾竹かづ枝

☆ 埼玉 柏舟 操子

岡田八千代子　三輪田まさ子
與謝野晶子　小金井喜美子
岸邊福雄氏夫人　宮田修氏夫人
目賀田男爵夫人　國木田治子
加納子爵夫人　河崎蘭香

●●●●●●●現代十婦人に就て

記者が試みに募つて見た現代十婦人は右に發表してあるやうに、さまざまな人の考から、さまざまな婦人が十人宛選まれて居ます、併し其結果は何うかと云ふに、初めに擧げた十婦人が最も多數と云ふことになりました。記者は豫め其結果を求める爲に此企てをしたのではありませんが、結果を見ると強ち不當だとも思はれませんし、さまざまな人の眼に映る現代の婦人の中で、最も多くの人に思はれてゐる婦人と云へば矢張此結果に近いものだらうと思はれます。それで此十婦人の應募者の中で、其結果から見て比較的多くの人を擧げた應募者（八人まで當つてゐる人）、即ち、くれなゐ子、すま子、秋野まり子、友子の四人を入賞といたしました。（記者）



雜報

■帝劇の文藝協會劇シーザーは、豫定の通り七日間興行された、色彩と光線とに舞臺美の發揮された劇であつた、或は文藝協會のお名殘にならうかと云ふので見物は盛んにあつた

■富士の御殿場方面の山開きは去る十日であつた、二日には一部の山開きがあつた。去る冬期の間に一頭の猪が猪武者的に登山し、とう／＼下りられないで死んで了つたさうだ

■凡ての新聞が夏期の讀物を載せ初めた、文士の紀行文もある、學者の地理談もある、廣く文士に生活上の趣味に就いて斷片的のことを聞いて載せやうとしてゐるのは大每と時事

■久しく郷里日向にあつて詩想を養つてゐた若山牧水氏は此程上京して小石川に居をトした、近く『創作』と題する文學雜誌を發行するさうだ歌壇の爲に新しい運動でありたい。

■信州入會山の山中で、二疋の仔熊と一疋の親熊に出會ひ、親熊の爲に頭を嚙まれた樵夫があつた、電燈や瓦斯の輝いてゐる都會のお姬樣達には迚も想像の出來ないことであらう

■宇都宮の五月女なつと云ふ踏切番の女は、汽車が進行して來ると同時に、騎馬の憲兵の馬逸し、線路に奔馳したので、憲兵を救はんとし、なつは汽車に轢かれて死す、勇敢な女

■「お忘れ者のないやうに願ひます」と車掌は注意するに拘はらず、一箇月に四千八からの電車内に忘れ物をする人がある、其品物は雨傘、洋傘帽子、金入、辨當、風呂敷包の類。

■英國の桂冠詩人アルフレッド、オースチン氏は去る六月二日逝去した七十八歲の高齡であつた、氏は十九歲の時初めて叔父の好意に依りて詩集を公にしたが、其賣高僅に十七冊

■狂犬に出遭つたら道を曲れ、足を撲つて倒せ、萬一咬みつかれたら小さな傷でも注射治療を受けよ、狂犬の特徵は眼の充血、涎の流れてゐる事等で、何となく犬相が不安らしい

■海水浴や、冷水浴の外に、太陽浴空氣浴などいふのがある、其爲に日本では特に設備は出來てゐないが、太陽浴や、空氣浴は自然にでも出來る、或る度まで自然は人を健康にす

■日本全國で一時間に生れる子供は百九十三人强になつてゐる、卽ち一分間に三人强の割に新しき日本人は產れつゝあるのだ、死ぬ人は一時間に百二十四人餘になつてゐるさうだ

■今若し假に地球上の陸地を悉く海に崩し入れて平均するものとしたら地球全體が深さ一里の海になつて了ふ、して見ると陸の高さよりも、海の深さの方が遙に量が多いのである

●●● 編輯だより ●●●

▲文藝欄の擴張は讀者多數の要求通り、追々發行して參ります、其ことは前號の編輯だよりにも發表いたしました。

▲今一つの讀者の要求に、諸友の交際機關となつて、其便宜を計つてくれよとのとですが、讀者が誠實に行ひたまふならば、記者は欣んで其便宜を計ります。そこで試みに題を決定して交情の便宜を計らうと思ひます●●●

十九歳の婦人

▲題は十九歳の婦人同士が交際するといふことです、同じ年齢といふことは種々の意味で意氣投合しますから、十九歳の婦人諸君は其望むことを書いて紙上にお出し下さい。

▲十九歳の婦人が紙上に澤山出て、各自希望を發表されたら其中でお互ひに好きな方と思想の交換をしたら宜いでせう。●●●

▲原稿は八月十日に締切り、九月一日の定期號に凡て掲載いたします、用紙ハガキにても宜し。

◎寫●眞●募●集●

諸嬢のお寫眞は勿論、風景、風俗各種の寫眞を募集します、掲載の雜誌は必ず贈呈し、寫眞は御入用ならお返しいたします。猶ほ全國寫眞業者諸君にも、同好の方は御寄贈を願ふ

◎文藝欄 投稿規定

▲文藝欄の投稿は女子に限る▲小說、詩は自今振りがなを要す ▲小品文は二十四字詰三十行乃至五十行以内 ▲小說は二十字詰百行以内▲詩は長短隨意 ▲群星欄も長短隨意二十一字詰▲和歌俳句は一人一首限り ▲圖畫は必ず方二寸以内●●●

▲投稿は毎月十五日、殿に締切る。

▼贈賞改正 ▲小說は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢▲小品文は天賞金二圓、地賞金一圓、人賞金五十錢、▲詩は 天賞金一圓、地賞金七十錢、人賞金三十錢 ▲和歌は天賞金一圓、地賞金五十錢、人賞金三十錢▲俳句は天賞金五十錢、地賞金三十錢、人賞金二十錢▲圖畫は天賞金七十錢、地賞金五十錢、人賞金三十錢

▲群星欄は平素優秀なる投稿を送る人に三箇月毎に金一圓の特賞を呈す ▲以上贈賞は總て價格相當の物品を贈呈す。

改正 定價表（毎月一回一日外年四回増刊）定期號増刊號同額

△一冊分（送料とも）	前金拾九錢五厘
△三月分（増刊共四冊）	前金七拾參錢
△半年分（同八冊）	前金壹圓四拾錢
△壹年分（同十六冊）	前金貳圓七拾錢

▷申込注意◁

注文は總て前金のこと◎振替貯金（口座東京一七二九番です）にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢増しのこと（用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます）◎郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと◎郵券代用は必ず壹割増のこと（收入印紙は絕謝）◎最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ本社への照會は返信料添付なければ同答せず

◎廣告締切期限……毎月十五日の事

廣告掲載料金は御照會次第御報す

取扱所 博報堂、電報通信社、帝國通信社、萬年社

大正二年七月十五日第九年第十號増刊

不許複製

編輯兼發行人 野口竹次郎
印刷人 松本魁
印刷所 東京國文社

東京市京橋區大鋸町十一番地
發行所 女子文壇社
電話京橋六〇七番
振替東京一七二九番

特約販賣 東京東海堂北隆館上田屋至誠堂東京堂永久堂良明堂大阪盛文館

大正二年七月十三日印刷納本

女子文壇

(新しき文藝)

七月十五日增刊 第九年第十號 (毎月一回一日)

(明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可)

前號發賣禁止

七月號

增刷五版 忽ち本社賣切

◉面白い浮世の娛樂恐しい社會の裏面

う

●探偵實話「新潟の悲劇」
●諸國花柳通信
●昔は強盜今は牧師
●電車釣淫賣の實例
●麴町山木家の秘密
●女子大學卒業の女髮結
●八王子の奇人

其他『演藝欄』は辛辣なる批評と評論に滿され『浮世くらぶ欄』は全國各地方に亘る美談佳話醜聞惡行の記事を以て埋められ『讀者文藝欄』亦大に振ひ外に大懸賞募集あり、而して全記事總べて事實にして一つの虛構なく一々現場寫眞を挿入しあるは既に定評ある本誌獨特の特色なり

▲最近柳橋藝者戶籍調
▲街頭に歌を賣る孝女
▲苦學生を裝へる色魔
▲破鏡を泣く薄命美人

き

▲近代劇協會の艶聞
▲女醫學校長の珍家庭
▲顚倒不如歸
▲萬龍盛衰記

●日本橋區役所內の暗鬪
●暈染般若物語
●高尾山上の狂人窟
●土井子爵の愛妾
●御滿足の沖男爵
●醫師黃金魔か
●逗子の海を汚す艶魔

●東京花柳界探險記
●詐僞に等しき露店師內幕
●學生のカンニング手段
●藝者に勝る濱町の女
●早稻田の新風聞
●橫濱の南京蕎麥屋內幕
●大阪の怪談と仙臺の怪談

◉本誌獨特記事悉く現狀鮮麗の寫眞挿入◉

よ

定價	一冊送料共金拾壹錢
	半年分前金六拾參錢

▲女子文壇第三增刊 定價金拾八錢 送料壹錢五厘

◀東京市京橋大鋸町 振替二四三七九番 樂文社發行 (電話京橋六〇七番) 賣捌 全國各地書店▶